

二-37

応用心理学論文集

第19回大会発表研究抄録

(東京大学会場)

1955年7月23・24日



日本応用心理学会

40.4
N77
V.19

目次

一、基礎

1	継続的提示図形の再生に関する研究(序報).....	日本大学	浅井正昭.....	(八)
2	視覚に於ける類似と弁別について..... ——特に幼児における弁別関について——	静岡大学	田中敬二.....	(八)
3	応用視知覚研究 第8 線図形の感情表現性.....	東京教育大学 日本大学	○小保内虎夫..... ○古牧節子.....	(八) (八)
4	応用視知覚研究 第9 明暗弁別スケールの作製(検査証驗).....	東京教育大学	○小保内虎夫..... ○浅見千鶴子.....	(九) (九)
5	低照度における色彩弁別.....	日本色彩研究所	○相馬本一仁..... ○橋本尚志.....	(九) (九)
6	カラー・ハーモニーの調査.....	日本色彩研究所	○細野仁司..... ○橋本尚志.....	(九) (九)
7	精神テムポに関する基礎的研究(第11報告) ——時程の再生——	早稲田大学	○望月邦二..... ○三井島二.....	(一〇) (一〇)
8	協和音判断に関する実験的研究.....	東北大学	○泉山中三.....	(一〇)
9	触覚におけるミューラー・リエルの知覚についての実験.....	玉川大学	○須藤泰男.....	(一一)
10	中断作業の想起に於けるRepressionに就ての脳波に依る検証.....	東北大学	○大塚一夫.....	(一一)
11	言語材料の記憶的学习における転位に関する 実験的研究(その2).....	静岡大学	○中沢正寿.....	(一一)
12	美的配置に関する研究(第三報告).....	千葉大学	○盛永四郎.....	(一二)
13	乱文完成検査の解釈法に関する一考察.....	国立教育研究所	○清水利信.....	(一二)
14	欲求の適応性検査の信頼性.....	日本大学 精工大学	○長谷川貢..... ○浅野行雄.....	(一二) (一二)
15	人間の迷路学習における言語・運動の効果.....	東京都立大学	○今井省吾.....	(一三)
16	概念形成に於ける Rigidity について.....	東北大学	○青木民雄.....	(一三)
17	意味の実験的研究(3)..... ——知覚的方法を用いた場合の言語報告についての考察——	東北大学	○志津野知文.....	(一四)
18	頭部身体及び眼球輪転より見た垂直認知の変化..... ——垂直認知に関する実験的研究 第二——	東京大学	○藤田厚.....	(一四)

二、社 会

- 19 「人格と脳波」に関する基礎的実験 (三) 日本大学 山岡 淳 (二四)
- 20 刺激語の脳波 (α 波) におよぼす影響について 日本大学 岡本 健 (二五)
- 21 光覚残像と脳波との関係 日本大学 長沢 有恒 (二五)
- 22 P・G・R の研究
——皮膚電気抵抗と皮膚電気反射を中心として—— 信州大学 小坂 英如 (二五)
- 2 偉大性に関する研究 (第二報) 日本大学 高嶋 正士 (二六)
- 1 諸価値間の関係 日本大学 木村 禎司 (二六)
- 3 婦人自衛官のパーソナリティの研究 陸上幕僚監部 近松 大政秀 (二七)
- 4 ある特殊な女子集団の Emotional Tolerance の研究 日本大学 近松 大政秀 (二七)
- 5 児童図書の分析 東京学芸大学 阪本 一郎 (二八)
- 6 生活場面と言語のコミュニケーション 国立国語研究所 村石 昭三 (二八)
- 7 幼児のつたえの研究 その四 法政大学 天野 章 (二八)
- 8 Group Dynamics に関する研究 (二報)
——雰囲気と認知の変容について—— 愛知学芸大学 市川 典義 (二九)
- 9 社会性戒律説による小学生の社会性の分析的研究 八尾市安中小学校 阿部 孫四郎 (二九)
- 10 青少年の社会的関心 (I) 総理府 小玉 正任 (二九)
- 11 大学生の結婚に対する態度 (第 I 報告) 熊本大学 葛谷 隆生 (三〇)
- 12 家族好性序列と家族成員の行動傾向 東京都立大学 辻 正三 (三〇)
- 13 態度と事実に関する一吟味 電通調査部 朝倉 利景 (三一)
- 14 流行色の実態分析 (その一) 輿論科学協会 齋藤 定良 (三一)
- 15 血族結婚と知能との関係 信州大学 樋口 英夫 (三二)
- 16 被観察事態が患者の行動に及ぼす影響 桜ヶ丘保養院 大島 貞夫 (三二)

三、教 育

17	精神薄弱児をもつ家庭(その一)——葛藤と緊張——	済美教育研究所	山本敏雄……(二二)
1	教師の悩みについて……	千葉大学	小木曾恩……(二三)
2	中学生の情緒の実態についての考察……	中央大学	赤塚泰三……(二三)
3	大学生の怒りに関する調査……	静岡大学	石川透……(二四)
4	大学生のフラストレーションについて(その一)……	東京大学	○中村昭弘……(二四)
5	大学生のフラストレーションについて(その二)……	東京大学	○富田昭弘……(二四)
6	教育相談における効果について……	田中教育研究所	○品川不二郎……(二五)
7	わが国のカウンセリングの実態と性格について ——第三回報告——	東京教育大学	井坂行男……(二五)
8	中等教育時期の道德、宗教訓練……	十文字高等学校	秋葉馬治……(二五)
9	道德判断における教師と生徒の比較……	西京大学	坂田一……(二六)
10	児童生徒の妊娠解釈に関する研究……	横浜市立 教育研究所	岡田寅次……(二六)
11	男女交際についての実態調査……	東京学芸大学	佐藤正……(二七)
12	配偶者選択の態度に関する一調査——大学初年生の場合——	日本大学	妻倉昌太郎……(二七)
13	身体的特徴に対する関心の年齢的变化について……	東京教育大学	松田岩男……(二七)
14	幼児の自然観の一考察……	東京学芸大学	湯本信夫……(二八)
15	大学における知能、クレペリン、向性テスト結果報告……	学習院大学	恒吉忠康……(二八)
16	WISC知能検査の信頼性に関する一考察……	田中教育研究所	小島和子……(二八)
17	入学成績の予診性について(2)……	日本大学	安藤公平……(二九)
18	向性調査票P ₂ について(第三報告)……	津田塾大学	朴沢一郎……(二九)
19	インストラクションの効果に関する研究……	東京教育大学	田中博正……(二九)
20	児童の学習指導法に関する教育心理学的比較研究 (第三報告)……	東北大学	小室庄八……(三〇)
21	賞罰と学習 ——特に診断性向性検査との関係——	日本大学	駒崎勉……(三〇)

22	教師の得意学科と児童の興味……………	埼玉大学	金子保……………	(三一)
23	学科の好悪とその原因——第一回報告——……………	茨城大学	磯貝信太郎……………	(三一)
24	左利きと学力……………	鳥取大学	安田春弥……………	(三一)
25	学級内児童—教師関係の研究…………… —教師に対する児童の一般的要求と現実的認知による分析—	愛知学芸大学	相川高雄……………	(三二)
26	集団学習に於ける協力について(三)……………	愛知学芸大学	田中正一……………	(三二)
27	学級集団の研究(第一報告)……………	名古屋大学	塩田芳久……………	(三三)
28	青年の相補的交友結合の発達の研究……………	福島大学	徳田安俊……………	(三三)
29	友人関係の継続及び消滅……………	日本女子大学	堀井千鶴……………	(三三)
30	成人の親友関係—親友成立の理由と親愛度—……………	日本女子大学	井本玉子……………	(三四)
31	養護施設児童のIQ変動について(一)……………	近畿大学	山田久喜……………	(三四)
32	精神薄弱児施設における児童の適応状況の調査……………	東京大学	三木安正……………	(三五)
33	精神薄弱児のヒューマン・リレーションに関する動態の研究(一)……………	京都大学	田中正昌……………	(三五)
34	聾児童、生徒の言語能力(その三)……………	日本大学	森一司……………	(三六)
35	盲児の研究(十二)…………… —質問紙法による盲児のパーソナリティの研究(その一)—	東京教育大学 都立文京盲学校	佐藤義泰……………	(三六)
36	盲児の研究(十二)…………… —質問紙法による盲児のパーソナリティの研究(その二)—	東京教育大学 都立文京盲学校	佐藤義泰……………	(三六)
37	Identification と Adjustment の発達に対する関係について……………	信州大学	原善平……………	(三七)
38	性格と行為……………	山口大学	亀井定雄……………	(三七)
39	音楽家の精神反応曲線型(第二報)……………	国立音楽大学	佐瀬仁……………	(三八)
40	社会的共感性の変容……………	東京学芸大学	田中熊次郎……………	(三八)
41	児童の心配についての一調査研究……………	信州大学 伊那西小学校	坂本英夫……………	(三八)
42	幼児の継時比較について —週及および前進禁止を中心として—……………	東京教育大学	辰野千寿……………	(三九)

四、臨 床

- 43 妨害音の実験的研究 I 早稲田大学 ○ 沢田 繁 (三九)
- 44 期待及び現実水準の発達的变化 慶応義塾大学 斎藤 幸一 (四〇)
- 45 教室の色彩調節のもたらした効果について 茨城大学 木村 俊夫 (四〇)
- 46 玉岡式音楽鑑識テストの実施 (I) 共立女子大学 玉岡 忍 (四〇)
- 47 スポーツ選手の性格転移 法政大学 ○ 門司 三夫 (四一)
- 1 日本人のロールシャッハ反応の研究 (八) 日本女子大学 ○ 石川 玉晶 (四一)
- 2 日本人のロールシャッハ反応の研究 (九) 日本女子大学 ○ 寺内 幸子 (四二)
- 3 日本人のロールシャッハ反応の研究 (十) 日本女子大学 ○ 椎名 悦子 (四二)
- 4 ロールシャッハ・テストに関する研究 (第二十五報) 金沢少年鑑別所 ○ 酒川 靖一郎 (四三)
- 5 ロールシャッハ・テストに関する研究 (第二十六報) 金沢少年鑑別所 ○ 佐竹 隆三 (四三)
- 6 Szondi Testに関する研究 (第十二報) 金沢少年鑑別所 ○ 佐竹 隆三 (四三)
- 7 ロールシャッハ・TATをヒロポン患者に適用した検査像について 早稲田大学 ○ 滝沢 清子 (四四)
- 8 P-F Study (試案) による施設児の場面分析的考察 福島大学 工藤 正悟 (四四)
- 9 不良化傾向児を発見する為の人物描画テストの研究 大阪府教育研究所 扇田 博元 (四四)
- 10 ウェクスラー・ベルビュー法テストに依る保護少年のScattergramの検討 I 東京少年鑑別所 袴田 明 (四五)
- 11 出生後四年間を継続観察した子供に関する心理学的研究 女子茶大の学水 ○ 平井 信義 (四五)
- 12 女児の発育の類型とその予後診断 女子茶大の学水 ○ 森脇 多恵子 (四五)

13	高熱の出没した一少女の遊戯療法について……………	女子茶の水大学	○古井信義……………	(四六)
14	転生願望法によるパーソナリティの診断(第一報)……………	東北大学	大脇義一……………	(四六)
15	Client-Centered Therapyの臨床的研究…………… ——Motivationについて——	国学院大学	友田不二男……………	(四七)
16	Client-Centered Therapyの研究(三)…………… ——価値構造の分析——	明治大学	堀 淑 昭……………	(四七)
17	適応障害としての心因反応……………	慶応義塾大学	○塩入円裕 佐藤紀子 阿部正 斎藤庄吉 高橋進 武田専 鎮目光雄 佐藤悦平 高橋艶子……………	(四八)
18	GSR及び光電プレティスモグラフ(容量脈波)による神経症的不安の研究……………	東京教育大学	原野広太郎……………	(四八)
19	精神薄弱児童の Rigidity の研究……………	日本女子大学	○森 玉 子 省 西森房子……………	(四九)
29	精神薄弱児の生育歴について…………… ——精神薄弱児診断の資料としての生育歴——	横須賀市教育研究所	村山秀雄……………	(四九)
21	肢体不自由者の診断法研究(二)…………… ——TAT専用図版の解釈上の一考察——	国立身体障害者更生指導所 早稲田大学	○田中 精 宏……………	(四九)
五、産 業				
1	作業向性検査(九)…………… ——向性検査及びC・S・Tとの関係——	東京都職業適性相談所	板倉善高……………	(五〇)
2	学校進路選択における助言者について(続報)……………	神戸大学	増田幸一……………	(五〇)
3	第三回公共職業補導所技能検定の結果について……………	労働省	村中兼松……………	(五一)
4	内田クレペリン作業曲線に関する研究……………	愛知学芸大学	堀内安男……………	(五一)
5	右手切断者、左手切断者の内田クレペリン検査について……………	鉄道弘済会	丸山茂樹……………	(五一)
6	機械的適性と興味との関係……………	人事院	松浦健児……………	(五二)
7	職場内における人間関係の一考察(第一報告)…………… ——そのグループ・ダイナミックス的研究——	人事院	○金平文二……………	(五二)
8	職場モラルの因子分析……………	広島大学	兼子 宙……………	(五三)
9	統計機パンチャーの技能分析と作業性格……………	労働科学研究所	大須賀哲夫……………	(五三)

10	択一式テストにおける高得点者と低得点者との反応の比較	人事院	松井資夫	(五三)
11	オーバー・オール・レイティングにおける 評定事前の分析的態度について	立教大学	大塚博保	(五四)
12	職業集団における態度の要因分析(第二報)	静岡大学	北脇雅男	(五四)

六、犯 罪

1	PGRの漸減特性による嘘疑診断の研究	東京工業大学 新 東 宝	○宇留野藤一 奈良井仁	(五五)
2	非行女子少年に対するC・S・Tの一解釈	愛光女子学園	小峰友一	(五五)
3	児童の日常生活における感情体験について	大阪府立修徳学院	大杉隆男	(五五)
4	非行少年少女の親子関係	東京家庭裁判所	山本晴雄	(五六)
5	非行少年のフォロー・アップⅢ ——不満型非行者の予後分析——	横浜少年鑑別所	水島恵一	(五六)
6	犯罪者、非行少年における覚醒剤嗜癖の研究 ——一、概 括——	犯罪生物学研究所	○武田慎二 酒井敏夫 小井泉 奥井健三 奥沢良雄 樋口幸吉	(五七)

七、シンポジウム (日本におけるカウンセリングの諸問題)

1	教育部会(シンポジウム)			(五八)
2	臨床部会(パネル・ディスカッション)			(五九)
3	産業部会(グループ・ディスカッション)			(六〇)
4	犯罪部会(シンポジウム)			(六一)
5	身体障害者部会(シンポジウム)			(六二)
6	日本におけるカウンセリングの諸問題(部会全体のシンポジウム)			(六三)
八、	シンポジウム(アメリカにおける科学的カウンセリングの現状Ⅱパネル・ディスカッション)			(六三)

第十八回大会研究発表抄録補遺

変化の様相から見た性格診断——性格記号法の反復実施——	阿部孫四郎	(六四)
交通事故防止のための心理学的研究 ならびに施設の強化についての意見書	日本応用心理学会	(六五)

第十九回大会

昭和30年7月

東京大学教養学部

一、基礎

1 継次的提示図形の再生

に関する研究(序報)

日本大学 浅井正昭

図形記憶の抑制過程の分析的研究の Pilot study として、図形を継次的に提示しそれらの再生について研究した。

刺激図形は三系列、各系列は六個の図形によりなる。

第I系列は $40\text{mm} \times 40\text{mm}$ の正方形を主体とした図形の変形で、第II、第III系列ともにそれぞれの構成関係は同一で、鋭角、円弧で作られている。刺激図形はトレッシングペーパーに製図用インクで描かれ、刺激提示箱により暗室内で水平位置に継次的に提示した。

刺激提示時間は予め瞬間露出器により誤りなく知覚される時間を測定し決定した(一・五秒)。各図形間の間隔時間は六秒、最終図形提示後直ちに再生させた。実験は被験者が誤りなく続けて図形を二回再生できるまで継続した。十五名の心理学専攻の学生を被験者とし、各被験者を三群に分け、それぞれ異なる系列を最初に記憶させた。再生図形は実験終了後各被験者に刺激図形を見たまま描かした再生図形と比較し、次の結果を得た。

再生図形の誤りは比較的固執的であり、被験者によりまちまちである。再生における最も多い誤りは再生不能で第I、II、III系列それぞれ全体の誤数に対して二四・一、三〇・九、二七・九%となつてゐる。また全く他の図形と同一化して再生された場合が第I系列七・二% 第II系列八・四% 第III系列四・四%見られた。図形同一化は隣接の図形との同一化、および類似する図形との同一化が

見られる。被験者の内観報告と併せて考察すると、この現象は単なる運筆上の結果ではないように考えられる。その他主なる変容は、ウルフ、ギブソン等の報告している完結の過程と関連して考えられる間隔の変容が第I、II、III系列それぞれ一二・六% 一四・八% 一六・二%見られた。部分的に他の図形と同一化して再生された図形が多く見られたが、部分の同一化現象は、更に細い基準により分析研究されねばならない。本実験を手掛りとし、更に単純な図形により記憶の抑制過程の研究を準備している。

2 視覚に於ける類似と弁別について

——特に幼児における弁別閾について——

静岡大学 田中敬二

目的 視覚に於ける類似と弁別のうち面積(円、正方形、三角形)については第一報告に於て、類似に於ては標準刺激に対して大なるものを類似と判断し、弁別に於ては標準刺激に対して小なるものを弁別し易いと判断すると報告した。しかし類似や弁別の問題も線や角に於ては如何なる結果を示すであろうか。これを幼児を被験者として類似や弁別に必要な標準刺激に対する比較刺激を検出するのが今回の実験の目的である。しかし方法に於て標準刺激に対する比較刺激を多数同時弁別させたため比較刺激の標準刺激に対する大小の弁別も同時に検出されたわけである。

方法 図形としては線の場合標準刺激は 10cm , 5cm の二種類、これを図形の配置上、縦、横二つの場合とし比較刺激としては標準刺激と同じ図形とそれに夫々1/2

の増大及び減少した比較刺激図形を用い同時比較の方法をとった。角の場合はその標準刺激の角度は夫々 15° , 45° , 90° としその角をはさむ線分の長さは 5cm , 10cm とした。そして比較刺激としては標準刺激と同じ図形としそれに夫々1/2の増大及び減少した比較刺激図形を用い同時比較の方法をこれも用いた。

結果 結果を大別してみると線の場合に於ては大体横の場合よりも縦の場合の方がより弁別し易く、丈長い線より短い線の方が弁別し易い。又標準刺激より小の方が弁別し易くその弁別閾は標準刺激より小の方が近く、大の方が遠くなつてゐる。そして性別をみると、男児より女児の方が正確な弁別力を持つてゐる。角の場合も大きい角より小さい角の方が弁別し易く、角をはさむ線分の長いものより短いものの方が弁別が容易である。それ故その弁別閾も線の場合と同じく角の大小に拘らず標準刺激より小なる角の方がその弁別閾は標準刺激に近く、大の方が遠い。又角の大小の場合は小なる角の方がその弁別閾は小になり角の大なる場合は逆になる。又性別では線の場合と同じく男児より女児の方が弁別力は正確である。

3 応用視知覚研究 第8

線図形の感情表現性

東京教育大学 小保内虎夫

日本大学 古牧節子

従来直線は理知的で強い感じを与えるが曲線は優美で穏やかな感じを与えるなど、純粋な線によってゐる感情が象徴されるように考えられて来た。本研究は果

して純粋な線によって感情が表現されるかどうかを調べ
るために計画されたものである。

実験方法 質の異った多数の線と、違った感情をあら
わす多くの形容詞とを同時に与え、各感情をもつともよ
く表現している線の一つ選ばせる (Poffenberger 等の
実験の追試)。

被験者 大学生の男女、予備実験 一二〇名、本実験
三〇〇名。

結果 (1) 多方面からの分析の結果「純粋な線は必ず何
らかの感情をあらわしており、線の質的な変化に伴い情
緒も変化し両者の間には一定の関係が見られる」という
ことが明らかになった。その結果をまとめると次のよう
になる。(a) 快の感情は多く曲線(波)で表わされ、不快
な感情は直線(角)であらわされる。(b) 直線は強烈で高
揚された感情を多くあらわし、曲線は緩慢な弱い感情を
示す。(c) 波や角は低くて大きいもの程弱い感情状況をあ
らわし、高く狭くなるにつれて感情の激しさを増す。(d)
線の方向によって受ける感じが異なる、上向は激しい興
奮した感情をあらわし、下向は沈滞した抑うつ的な感情
を示す。水平線は静かで温和な感情をあらわす。

(2) 本実験の安定性を検討するため六八名の被験者に
一ヶ月の期間において同検査を繰返し結果を比較した。
その結果、集団を単位とした場合は比較的高い一致度が
見られたが個人内の一致度はあまり高くなかった。

(3) 本実験の結果を従来の実験結果と比較して見た。
その結果、H. Lundholm との間にはあまり高い一致は
みられなかったが Poffenberger 等の研究とはかなり高
い一致が見られた。

(4) 各感情に対応する線を選ぶ際の心的な手がかりを
内観報告によって調べた。その手がかりは大きくわけて
連想や感情的印象等によるが、すべての被験者は必ず何
らかの手がかりによって選択していることが明らかにな

った。

4 応用視知覚研究 第9

明暗弁別スケールの作成

(検証実験)

東京教育大学 小保内 虎夫
〇浅見 千鶴子

前回の報告(第十六回大会及び第十七回大会)に引き
つづき、灰色系列の明暗段階につき種々の実験を行った
結果をもとにして、相対弁別度($\Delta R/R$)と明度の比反
射率値との間に一定の函数関係($\Delta R/R = a \log R + b$ 、
 $a = -0.0203$, $b = 0.2429$)を得て、そこから新し
いスケールの値を理論的に算出した。それに対して実際
に灰色色票を試作し(東京配色研究所 佐藤亘宏氏の御
協力による)果してこれが実際に知覚的に等間隔にある
かを、数ヶ所について検証実験を行った。

方法 前回報告の実験手続きと同じ、五ヶ所の段階を
えらび弁別閾の測定を行う。今回は昼光下(1000 lux)
白色背景の条件のみ。測定点はスケール番号、11・15・
19・24・30の五ヶ所、ラテン方格法の実験計画を利用す
る。

結果及び考察 各測定点の弁別閾はスケール値であら
わすと 0.575, 0.575, 0.50, 0.575, 0.70 となり、
前にラゴリオ対数計を用いて得られた数値 0.65, 0.1,
1.2, 1.4, 1.475(測定点 No. 3, 9, 15, 21, 27 の
順)に比べると後者は明度の下るほど弁別閾が上昇する
ある対数曲線を示すのに反し、前者はX軸に平行な直線
関係をなすことが明らかとなった。かくして、われわれ
の新スケールは一応、感覚的に等間隔に分けられている
といえるであろう。ただし、灰色色票の試作は未だ完成
に至らず、比反射率値ならびに色相の補正も今後十分な

吟味を必要としている。また、新スケール値と明度の反
射率値との関係も双曲線の一種として函数式の決定を考
慮中である。

5 低照度における色彩弁別

日本色彩研究所 橋本 仁 司
〇相馬 一郎

前回に発表した色彩弁別検査を用い、低照度下におい
ての色彩弁別が、色相のどの部分に混乱が生ずるかを実
験的に検証した。

照度 0.5 lux, 1 lux, 10 lux の三つの事態下において
色彩弁別検査をおこなった。

理論的には、もし第三色盲的傾向をとるとすれば、色
相90から20にかけての部分と、40から70にかけての部分
に混乱が生ずることになる。

0.5 lux 及び 1 lux 下では、明らかに第三色盲的傾向
をとることが示された。特に0.5 lux 下では、その部分
の色相の弁別において顕著な混乱を示した。10 lux 下で
は、顕著な混乱は示されなかったが、やはりその部分の
色相に多少の混乱を示し、他は殆んど混乱を示さなかつ
た。

これらのことから、1 lux, 0.5 lux というような低照
度下では、明らかに第三色盲的傾向を示すといえること
が
いえる。

6 カラー・ハーモニー (Color

Harmony) の調査

日本色彩研究所 〇細野 尚 志
橋本 仁 司

一、調査のねらい
多くの人々の色彩の調和に対する反応を調べ、色彩調

和の普遍的な傾向を解析せんとすることが目的である。色彩の調和のファクターとして考えられる要素は種々ある。色の組合せに於ける色差 (Color difference)、面積の問題 (Area balance) その他が考えられるが、まず最も基本の問題としての、配色の色差と調和の関係を、総体的に色体系の上で解析することとした。

二、調査の手續

一 被験者 美術専門家一三二名 (工業デザイナー一八名、建築デザイナー二三名、商業デザイナー一四名、服飾デザイナー二六名、美術教育家一三名、洋画家一三名、日本画家六名) 美術学生二〇〇名 (男一〇〇名、女一〇〇名)

2 調査試料 色研の色体系からは平均にぬき出した約九〇色を相互に組合せた二色配色 (二十五種角の標準色紙を並置した試料) 一一八種を用いた。

3 調査方法 各被験者に全試料の半数の五五四種の試料を一つ一つ見せ、それぞれに次の反応語をつけさせた。イ、調和しやすい。ロ、調和し難い。ハ、どちらともきめ難い、中間。

三、集計整理の結果

一 美術家各層別の反応の傾向 調和の答の最も多いのは服飾デザイナー、最も少ないのは工業デザイナーと建築デザイナーで、中間の答の多いのは画家と工業デザイナーであるが、総体的な調和反応の傾向には各層別による違いはあまりない。

2 美術専門家と男女学生との反応傾向の比較 総体的な傾向にはあまり違いがない。女は調和の答が多く、男は少ない。

3 色差による調和の傾向 (1) 色相差による調和の傾向 総体的に、等色相の配色が最も調和し易く、無彩色と有彩色の配色これに次ぎ、類似色相の配色も調和し易い。反対色相の配色の調和はあまり出ていない。たゞ

し、色相の調和は明度差及び彩度差との関連にかなり左右される。すなわち、明度差大の場合は等色相、類似色相に、明度差小の場合は反対色相に調和が傾く。彩度差大の場合は反対色相に、彩度差小の場合は等色相、類似色相に調和が傾く。(2) 明度差による調和の傾向 総体的に明度差が大きい程調和し易い。(3) 彩度差による調和の傾向 等彩度、類似彩度及び対立彩度の配色が比較的調和し易く、彩度差中位の配色が調和し難い。

7 精神テムポに関する基礎的研究

(第11報告) — 時程の再生 —

三島 二郎
早稲田大学 浅井 邦二
〇望 月 稔

目的 精神テムポ、これより明らかにしやすい速さ、明らかに遅い速さの三種の断続音刺激を聴覚刺激として、刺激時程に挿入し、その時程を再生する場合、精神テムポが他の速さを与えた時と比べ、その時程の再生に如何なる影響を与えるかをその誤差の傾向により検討しようとした。

手続 中学生三〇名を対象とし、個人毎に連続五日間 にわたってその精神テムポを測定し、これより明らかにしやすい速さ、遅い速さを決定した。次に精神テムポ、はやい速さ、遅い速さを刺激時程に聴覚刺激として与え、この三種について、それぞれその時程の再生を行わしめた。時程提示の順序はランダムに計六回行い、その再生時程の誤差の平均値を測定した。被験者には閉眼させ、次のインストラクションを与えた。「これから音が鳴いてなりませんが、音が鳴り終わった時からこの音が鳴っていた時間と等しい時間がたちましたら直ちにこの台の上を

叩いて下さい」。このインストラクションは二回繰越した。時程はそれぞれ一〇秒、二〇秒、三〇秒とした。又附加実験として、刺激時程には何も挿入せず、再生時に三種の速さを与えた場合も行ったが、手続は前述のと同じにした。

結果 各実験共、精神テムポを聴覚刺激として与えた場合の方が、他の速さを与えた場合よりその時程再生の誤差は小である傾向を示した。この傾向は精神テムポの研究に一つの示唆を与えるものとし、今後の研究に待ちたい。

8 協和音判断に関する実験的研究

東北大学 泉山 中三

音楽に於ける和音についての協和・不協和という分類は、最近の作曲技法ではそれを固定化せず相対的機能的に扱うのであるが、心理学に於いても和音の協和感情を全体的構造上から把握しようとする様になった。従来和音の協和性についてはヘルムホルツの古くから諸家の研究があり、実験的にはヴァレンティンの一対比較法による協和音の序列があるが、最近ではバグ・トムソンがその判断の個人差について各々の音楽歴、和声嗜好性からその協和感情の決定因子を把握しようとしている。しかしして実際にはその和音を含む楽曲の調性全体に支配されるものと思われる。

かかる和音の一対比較を実験的に実際の楽曲の中に捜入して協和判断を求めて見ると、先の結果とはかなり相違のある判断得点を得る。即ちその判断は、楽曲に於ける和音構成に著しく影響を受けている。そこでその関連を明かにするためにその楽曲の和声分析を行い、そこに使用された各和音の個数を算出してみると、頻数の大きいものからの序列は、判断得点の大きいものの和音の序

列と類似している。実験は二種の和音構造を異にする楽曲、一つは古典的主三和音を主体とする作品と一つは近代音楽のあらゆる和音を使用している作品について行われた。前者については協和判断は主三和音の順で得点が大きく、後者ではその調性を構成する和音の頻数の多いものの順で得点は大きかった。更に同様な実験が二和音についてもなされ、同じ結果を得た。

9 触覚におけるミューラー・

リエルの知覚についての実験

玉川大学 須藤 泰男

拇指と他の四指となす角を利用して触覚的な高さの知覚に於ける「ミューラー・リエル錯覚」の生起如何を吟味。

方法 Vp は上腿を水平に、股を開き腰かける。上腿スレスレに細長い板を水平にわたし、Vp よりみて板の手前端中央に一一・五厘の間隔で二本の棒（尖端の太さ一耗強）を垂直にとりつけ、ネジの操作により上下に動かせる様にする。Vp はこの二本の棒上に各々左右の手をおいてその高さを較べる。但しその場合、何れか一方の手は拇指と他の四指とを適当な角度に保ち、拇指と人差指とのなす角のほぼ頂点に棒の先があたり且つ棒が大体指のなす角の二等分線の位置になる様にする。他の手は掌と水平に保ち、人差指のつけねの第三関節の末端辺りで棒の先に触れる様にする。前腕は左右共ほぼ水平となる。前者をN刺激、後者をV刺激の条件とす。Nの高さを一定としVpが調整法でVを変化させ等価点を求めます。上昇・下降計四回。之を第一及第二空間順位について行い一系列とす。原則として一日一系列。Nに於ける指の角度は0°・30°・70°・110°の四種。角度条件を一定にするため各々30°・70°・110°をなす板を棒にと

りつけ拇指と人差指がこの板をはさむ様にする。しかし指が板に接触することからくる何らかの影響を考え、指を板に接触させず単に角度板に平行に保つ場合も行ふ。

Vp は大学生一、成人男女各一名計三名。

結果 (一)角度板を指ではさんだ場合。Vp 二名の錯覚量平均 110°:-1.7cm(0.84) 70°:-1.85cm(0.91) 30°:-1.7cm(1.27) 0°:-0.72cm(1.02) (括弧内SD) I指を接触させぬ時。同二名のVpの平均 110°:-2.1cm(0.70) 70°:-2.8cm(1.55) 30°:-2.1cm(0.84)。視覚の場合からの類推では30°の時錯覚視量最大が予期されるが、こゝでは70°の時が最高。110°・70°・30°の差が比較的小さいのは触覚の未分化な性質に由来すると考えられ、30°が最高とならないのもこの様な理由と共に指の構造から30°位になると角度の感じが実際よりも不明瞭になるためと思われる。しかし0°の時錯覚量最小なることは視覚の場合と同じ。以上の傾向は他の一名のVpでも然り。

10 中断作業の想起に於ける

Repression に就ての

脳波に依る検証

東北大学 大塚 一夫

Rosenzweig が行った中断作業の想起に於ける Repression の実験は、その後多くの人々に依って追試吟味がなされたが、それ等のすべては、Repressionの有無を捉えるために、不安定な現象である Zeigarnik effect を Index として用いている。その故に、この研究者に於いても余り明確な結果が得られていない。そこで Repression そのものを直接的に捉える方法として脳波を用いて Repression の有無を検討する実験を行った。そこに用いた仮説は次の如くである。条件反射に於

ける内制止 (Innere Hemmung) は大脳に於ける制止である。Pavlov は考えた訳であるが、本川弘一博士はその制止に対応すると思われる脳波上α波の出現を確かめた。そこで、もし先の Repression も、内制止と同様な大脳に於ける制止の一種であるとするならば、同じ様に、それに対応するα波の出現が見られる筈である。

実験の方法は先の研究者達が用いたものと類似のものであつて、その想起の場合に脳波を記録した。但し単なる想起では想起の内容と脳波との対応が不明であるから、各課題毎に一つづつ選んだ刺激語を呈示し、それからの連想に依つて想起をもとめた。脳波誘導部位は前側頭一耳の単極誘導である。Vp は二名。脳波記録の整理はα波出現率及び平均振幅を算出した。一人のVpについてのそれ等の値は仮説を支持する方向に、臨界比で一%水準の有意差を示した。この事から仮説の通り Repression が生起し、かつそれは大脳に於ける制止であるものと断定し得る。他の一人のVpについてのデータには上記の如き差が見られなかったのであるが、単に仮説の方向についてのみでなく、全体的にα波出現率に変化がないのであつて、このことは脳波の一般的性質から見ても、その個人が本実験のVpとして不適当であつたと考えるのが正しく、仮説そのものの成立をゆるがすものではない。

11 言語材料の記憶的学習における

転移に関する実験的研究

(その2)

静岡大学 中沢 正寿

目的と問題 同一刺激に対して異なった二つの反応を引続いて学習するという条件、刺激も反応も同一だが先行学習と後続学習においてこの刺激と反応との対結合が変

手続 被験者は静大教育学部学生四〇名（男一四名、女二六名）、これを A—Br 群（対結合の変更）と A—
の群（同一刺激に對する二つの異った反応）との二〇名
づつの二群に分けて実施した。記憶材料は梅本堯氏によ
つて検討された連想価一〇%、二〇%範囲内の無意味綴
より選り、六対を一組として使った。ランシユバルグ露
出器で、各語二秒、対間休止二秒、試行間休止二秒、先
行学習と後続学習との間の休止二分として、六対全部を
記憶してしまふまで試行を重ねた。

結果 A—B₂ 条件群、A—C 条件群両者の成績を、試行数と誤答及び不能との二つの面からみて、いづれも消極的転移はみられなかった。けれども、試行数の平均を先行学習と後続学習との間で比較すると、A—B₂ 群では二三・六 対 二〇・一で有意な差がないのに対して、A—C 群では二二・四 対 一六・七で有意な差(五%水準)がみられ、侵入数も A—B₂ 群では二四六に對し、A—C 群ではわづか四であつて、刺戟語—反応語の對結合とすることが、後続学習において禁止的役割を演じ、消極的な要因として働くものと推定された。

千葉大学 盛永四郎

実験目的 前の報告（第十八回並に第十九回大会における発表）で、一定の紙片上の二箇乃至三箇の円の美的配置に関する実験的結果を述べ、二円のばあいには二円を結ぶ線が紙片の中心を通過する傾向のあること（中心通過の法則）、および三円のばあいには三円を結ぶ三角形の重心が紙片の中心と一致する傾向（重心の法則）のあることを示唆したが、本研究はかゝる傾向に関する発達の考案を行うために試みられたものである。

実験手続 前回と同じ方法を用い、10mm×165mmの白紙の上に厚紙で作った直径27.5mmの円盤を一箇、二箇、三箇をそれぞれ最も美的と思われる位置に配置するように被験者に求める。被験者は小学一年、三年、五年、中学一年、三年各々二〇名（たゞし何れも男一〇名、女一〇名）。小学生に対しては適宜にわかり易い教示を与えた。

実験結果 以上の結果をまとめて前の大学生における結果と比較すると、特に中心的傾向に関して は次のことが知られた。

一 一箇の円を与えられた紙片の中央におく傾向は、小学一年よりも三年、五年においてやゝ強くなるが、中学生では少し衰え、大学生においてはさらに弱くなる。

2 二箇の円の配置における中心通過の傾向は、小学一年よりも三年以上中学三年までにおいて強く現われるが、大学生においてはこの傾向は多少弱くなる。

3 三箇の円の配置における重心の紙片の中心と一致する傾向は、小学一年では弱いが、三年にて明瞭な傾向として現われ、さらに中学より大学に至って最も強く現われる。

る一考察

国立教育研究所 清水利信

目的 この研究は、個々の部分には有意味ではないがこれらを結合すると有意味な全体になるような課題の解決機能と比較をするために、個々の部分も有意味であつてこれらをさらに結合することによつて有意味な全体が構成されたとときの解決機能を研究したものである。

手続 被験者に課する課題には昭和二七年度に実施された進学適性検査の文科問題 (SAT-S2-1Z) の四番を用いた。(この問題は一つの文章をAとGの七個の文に区切られてあり、最後の文がGであることは決まっているが、一番目から六番目までは配列順序を狂わしてあるものである。)

実験の方法は laut-denken の方法を用い、これをテープレコーダーに記録した。この記録に基いて課題の解決機能を分析することにした。

結果 プロトコルを分析した結果、つぎのことが見出された。(1) 解決の糸口は文章の初めの文を探すことに始まるが、解決の順序は一番目の文、二番目の文、三番目の文、……のような順序では行われない。(2) 一つの文に内容的・意味的に関係の深い他の文を幾つか探して *discourse* を構成する。(3) この問題では *sub-group* は二個か三個であつたが、どの文を *sub-group* にするかは個人によって一定していない。(4) 解決の初期の段階(探索的段階)において、すでに幾つかの *sub-group* に分かれる兆が見られる。(5) 一つの *sub-group* から他の *sub-group* へ思考が転換する場合は、一つの *sub-group* が完成した時、一つの *discourse* の構成が困難になった時、あるいは同時に二つ以上の *sub-group* を

交互に、相互の関係を考慮しながら、これを構成している場合などに見られる。(6) 上述の思考機能は個々の部分が無意味の課題の場合の思考機能とかなり類似しているように考えられる。(文部省昭和二八年度助成研究費の一部による)

14 欲求的適応性検査の信頼性

日本大学 長谷川 貢
精工舎 浅野 行雄

以下の報告は、適応性概念に関する既存の諸説の検討、及び合理的なテスト形式に対するわれわれの吟味により作成した欲求的適応性検査の有効性検討結果の一部である。

本検査の信頼度は、約三ヶ月の間隔を置いて同一被験者に再検査をし、第一次検査と第二次検査の相関を係数とする(再検査法)という方法により検討した。結果は情緒領域において〇・七四であり、社会領域では〇・七一となっている。また本検査の実施により同時に判定できる不適応のタイプでは、攻撃型が〇・八〇、合理化型が〇・六三、退行型が〇・六〇、逃避型が〇・五六とそれぞれなっている。被験者は都内足立区某中学三年生、男子五〇名、女子五〇名、計一〇〇名である。

この信頼度は従来の種々の同種の検査と比較して極めて良好と考えられる。その理由には、本検査のもつ数々の特色のうちとくに、

- (一) 質問すべてに行動場面が設定されており、また質問項目それ自体が行動項目となっているため、質問の内容容理解が容易であり、その解釈が一義的である。
- (二) 質問およびそれへの応答が、被験者の個人的な価値あるいは道徳観より自由である。

(三) その他

の諸点よりして、応答が非常にしやすくなっていることが考えられる。本検査のみようとしている他の適応領域である家庭及び健康における信頼度については、未検討のため今回は報告できないが、本検査作成にあたって理解した適応性に対する考えとともに、いずれ報告の機会をもちたい。

念のため本検査の各領域内相関は(身体は未検討)社会対家庭が係数で〇・三七三となり、情緒対家庭が〇・二九七となっていて、それぞれ予期したものと同程度の良好な結果である。

15 人間の迷路学習における言語・運動の効果

東京都立大学 今井 省吾

ネズミでさえ迷路を学習できるのであるから人間ではどんな巧い仕方でも学習して行くか、当然、高等な心理的機能を駆使する訳で、このような機能として言語(的)なものがある。しかし、一方では運動的学習機能も無視しえない。ここでは、迷路学習において人間の言語・運動的機能がどのような効果をもっているか、について実験する。

基本実験群として、手に鉛筆をもち選択点で左右の一方を選び進んで行くもの(M)、選択点で左右の一方を発言(予言)して行くもの(V)、以上二つの動作を同時にやるもの(MV)、の三群をつくり、更に各群を三種に条件変化し九箇の実験群とする。

迷路は直線型で右又は左の二者択一、選択点は十二箇、白巻紙に印刷、一定速度(毎秒三秒)で動き、厚紙のカバーの隙間を通して刻々に迷路を見て行ける。学習方法は系列的全体学習とその反復である。誤反応のない試行が二回続いたとき止める。被験者、男子大学生、計

八十四名。

結果は全体として、学習の速さはM条件、V条件では急速で、MV条件では緩慢、これはMV条件でMとVを同時に行う協力の複雑さに関係していると考えられる。また、内観からえられた内的自発的な学習の仕方についてみると、単に言語的機能を使う方が運動的言語的機能を併用するものよりも優る。これは迷路が直線型であるため、場所的な学習を要する空間的に分化した迷路では運動的機能が有効になってくるであろうと思われる。ともかく、この実験によると、M条件、V条件で言語的機能がより有効で、MV条件では余り有効とは云えない。

16 概念形成に於ける Rigidity について

東北大学 青木 民雄

Rigidityは反応の一つの傾向(型)から他の傾向への推移に対する失敗によって規定される。この推移には幾つかの型があるが、本実験は概念形成場面に於いて、後続の弁別学習に対する逆転推移及び非逆転推移の効果を研究した。

刺激は互に高さ、形、色、大きさの異なるボール紙製の立体であった。

グループIは系列Iで高さの弁別を学習し、系列2では逆転した高さの弁別を学習した。グループIIは系列Iで形の弁別を学習し、系列2で高さの弁別を学習した。両グループ共系列3で色の弁別を学習した。統制群は先行トレーニングなしに系列2の高さの弁別を学習した。

この結果、次のことが見出された。

- (1) 先行トレーニングのないグループと比較して、逆転推移グループ及び非逆転推移グループは共に後続学習を

(2) 逆転推移と比べて、非逆転推移は後続の弁別学習を阻止され遅滞された。

つまり非逆転推移は逆転推移よりも Rigidity の程度が
高くなることが認められた。

17 意味の実験的研究(3)

——知覺的方法を用いた場合の
言語報告についての考察——

東北大学 志津野知文

目的 コトバの認知閾測定実験に於ける言語報告の質的分析を行い、個別的な変数を見出す。

方法・手続・条件 九つのひらがなの意味刺激を用い瞬間露出器で認知閾を測定する。この場合のVpの言語報告をV₁が記録する。

結果

この言語報告の属性分析の結果

1. 手掛りをもつ反応語の出現期（手掛り期）と閾値との間に一定の関係が見られる。
2. この手掛り中、外的条件と主体的条件との相剋の過程であると考えられるもの、即ち有意味語と無意味語が混合して報告される場合のものが頻数に於て大である。

3. 固執性(同一言語報告の連続… $P=(a_1-b)/a_1$)や
 退行性(正答語への推察可能性が前の場合よりも低く
 なる場合… $O=(a_1-b)/a_1$)が仮定され、これ等が特
 定の刺激及び V_p に於て頻度及び量に於て大なる事が
 見られる。これらは閾値に関係するかくれた変数であ
 ると推定される。

18 頭部身体及び眼球輪転より

見た垂直認知の変化

垂直認知に関する

實驗的研究 第二

東京大学 藤田 厚

目的　暗室内の如く視的手懸りがない場合、身体或は頭部を傾斜して垂直を觀察するとそれは傾いて見える。これはアウベルト現象として知られるものであるが、本実験に於てはこの現象の生起を身体傾斜の際の頭部身体定位、眼球の輪転より考察する。

方法 暗室に於てV_Dを立位より30°区切りで180°まで傾斜せしめ、各々の傾斜に於て立位に於て与えられた垂直な照線の残象を再生せしめ、直ちに照線をV_Dの見かけの垂直に調整し、同時に身体の傾斜を報告せしめる。

VPは健康者六人とす。

結果及考察 一般には身体傾斜 30° 、 60° に於て見かけの垂直は身体と反対方向に偏り（E現象）、 90° 以後に於ては同方向に偏る（A現象）。見かけの垂直の位置は前回の報告通り個人差を示し、凡そE現象大、A現象小とE現象小、A現象大の二型を区別し得る。

眼球輪転より垂直認知を見ると各身体傾斜に於ける残像の位置は見かけの垂直の位置とは一致せず、後者の位置は前者の位置より 0° に近い。又眼球輪転の個人差は垂直認知の個人差を決定する程著しくない。

頭部身体定位と垂直認知との間には認むべき関係はなく、各身体傾斜に於て傾きを過大評価する者の間に明らかな垂直認知の差が見られ、同程度の垂直認知を示す者の間でも身体の傾斜を過大視する者、過小評価する者などがある。

以上の結果から見て、身体或は頭部を傾斜すると二つ

の垂直が生ずると考えられる。例えば傾斜に於ては眼球の輪転による網膜子午線の位置、即ち 80° の偏りを垂直とする傾向と、頭部身体の定位が正しければ身体と反対方向の傾斜 20° の位置を垂直とする傾向の二つを有する。(勿論身体傾斜を過大評価、過小評価すれば後者の位置は変化する。)然し結果に示された通り、これらの位置のみが垂直認知を規定するのではなく、これの位置のいづれに「重さ」が置かれるかに依るのである。垂直認知の個人差はこれらの「位置」その「重さ」を考える事により理解出来る。尚E現象は二つの位置の接近により、A現象は分離により生じ易くなると理解される。

19 「人格と脳波」に関する

基礎的實驗(三)

日本大学
山岡淳

脳波研究において電極位置は重要な問題と思われるが、特に「人格と脳波」研究の基礎である個内変異の研究では、このことは重要な課題であらう。そもそも電極を頭蓋上に装置する場合の目安自体が曖昧であるうえに、その場所に正確に製着できるとは限らない。

そこで今回は後頭部電極のズレによる脳波、特に(A)α波の振巾および(B)そのヒストグラムの型の相異がどう現われるかについて調べてみた。正中線上で後頭部結節を中心にして(1)左右方向に約一八耗おきに計七個の電極をつけ、また(2)上下方向(正中線上)に約二〇耗おきに計九個の電極をつけた。左右両耳朶を一本の共通不関電極として単極誘導脳波を九本ずつ同時記録し、それらの振巾について比較を試みた。

その結果(A)平均振巾については(1)左右方向では正中線
上が最も振巾が小で、それから左および右にずれるに従
い拋物線状に漸次振巾が増す。特に右方向にずれる場合

の方がより急激に増す。(2)上下方向では後頭部結節からその上方約四〇耗の間は殆んど変化がないが、それより上方では急激に、また下方に向つては漸次振巾が減少するようである。(B)振巾のヒストグラムの型については(1)正中線から左右約二〇耗ずつの範囲内で、(2)上下方向では後頭結節からその上方約二〇耗の総範囲で本川、三田両氏(1942)のいう振巾のヒストグラムの型と殆んど一致したが、その他の位置の脳波は相当変った型を示した。以上のことから正中線上になるべく近くかつ後頭部結節よりやや上部を後頭部脳波の関電極位置と定めることにより(1)電極位置のズレによる α 波の振巾の差異は余り変化を受けず、(2)また振巾のヒストグラムの型も本川、三田両氏のいう型とよく合うようである。

20 刺激語の脳波(α 波)におよぼす影響について

日本大学 岡 本 健

脳波の検査過程において被験者が種々の感情的状態に直面しているときには、脳波特に α 波に影響を与えその抑制を起させることは従来から知られているが、刺激語によって喚起された弱い感情的場面においては如何なる影響がおよぼされるかを調べるために、三三名の被験者(男二三名、女一〇名)について単極誘導による後頭部脳波を記録し、「初恋」、「キス」、「自殺」、「火事」、「乳房」、「机」、「果物」、「飛行機」、「泥坊」、「電燈」の一〇個の刺激語および「暗算(31×25)」を呈示して、刺激呈示前後一〇秒間の α 波の振巾を比較してみた。それによると、どの刺激にたいしても α 波は抑制されているが、刺激語の相違による差は著しくない。刺激呈示後一〇秒間に平均して α 波の抑制のもっとも大きいのは「初恋」であり、次で「暗算」、「乳房」、「電燈」、「机」、「果物」、

「キス」、「火事」、「自殺」、「飛行機」、「泥坊」の順に弱くなる。また、刺激呈示後一〇秒間における毎一秒間の平均振巾からみた最大抑制値は「初恋」においても、と大きく、以下「暗算」、「火事」、「電燈」、「果物」、「机」、「キス」、「自殺」、「乳房」、「飛行機」、「泥坊」の順に弱くなる。刺激呈示後の α 波の振巾の変化には一定の型はなく、最初強く抑制されて時間とともに弱まるもの、逆に時間とともに強まるもの、あるいはこの両者が交替して現われるものなど種々の型があるが、これらが何に由来するかについては検討を要する。

本実験は脳波のほかにG・S・Rをも同時記録して、各種の刺激を与えた場合の両現象間の関連について検討を試みたもの、一部であるが、それらについては目下整理中である。

21 光覚残像と脳波との関係

日本大学 長 沢 有 恒

目的 暗室、閉眼時における光覚残像発生メカニズムをみる。特に後頭部 α 波について研究したが、Jasper & Cruikshank (1937)、本川弘一 (1941) 氏らの研究を追試してみた。

方法 刺激は乳白光を用い、(一)刺激強度をいろいろ変えた場合 (15, 50, 150, 200 lux) の残像脳波について、(二)刺激時間を変えてみた場合 (3, 10, 20, 30, 45, 60 sec) (三)刺激面積を変えてみた場合 (1, 9, 25, 100, 400, 600, 3600 cm² 正方形) の残像脳波を記録してみた。(四)の場合 30 sec, 100 cm² は一定、(五)の場合 50 lux, 100 cm² が一定、(六)の場合には 30 sec, 50 lux を一定にしておき、観察距離 40 cm、被験者は正常成人五名である。なお、被験者は刺激凝視以外は閉眼状態である。結果の見方について一言すれば、後頭部 α 波平均振巾を求める。

さらに残像前後などにおける脳波曲線を数学的方法により、瀟波分析を試みた。

結果の要約 残像時は振巾減少、みえぬ時は上昇する。この変化が残像週期に一致する。残像末期は脳波振巾が上昇する傾向がある。

(一)照度が強ければ結果がよいと限らず、15 lux と 200 lux が最も良い結果となった、これは Adrian, Matthews らも言っているように、光覚と単に言っても図形と背景を決める輪郭感があって初めて抑制をうけると言う事がうなずける。

(二)時間は長い程残像出消、規則性が明瞭になる。三〇〜六〇秒あたりから特に著明である。しかし、この条件下で六〇秒以上はどうなるか。

(三)面積は 25cm², 100cm² の場合が結果が最も著明。これ以上になると輪郭感がうすれ、明順応の為か、振巾は急激に上昇してしまい、又他の場合と較べて一般に振巾が大である。

(四)残像の週期は三〜六秒位。色覚の変化は普通の場合と一致するが平面色傾向をもつ。

(五)周波数を分析すれば、 α 波抑制が著明であるが、 β 波が混入する事、 δ 波・紡錘波が少しみられる。又 10℃前後の波が周期がのびる傾向がある。残像現象は末梢のみならず中枢との関係も考えられる。

22 P・G・Rの研究

——皮膚電気抵抗と

皮膚電気反射を中心として——

信州大学 坂 本 英 夫
台東小学校 小 島 一 如

目的 多様式精神電流計による定量測定を可能にする為の基礎的実験を試み、更に心電図、呼吸曲線等の比較

研究を試みようとする。即ち、(1)皮膚電気抵抗の変化と Galvano-meter のふれとの関係、(2)皮膚電気抵抗の変化と、K・Y・S 多様式精神反応記録装置のふれとの関係、(3)内向性、外向性と G・S・R との関係、(4)P・G・R と呼吸曲線による各人の共通性と特殊性、(5) Frustrate なされているときといないときとの、呼吸曲線と P・G・R の変化等についてみる。

結果 実験(I) ペイシェントにポストオフィス・ボックスを挿入して既知抵抗とガルバノ・メーターのふれをみると、ほぼ一次の正比例直線になる。

実験(II) (I)の場合と同様のセットにて記録装置を接続し、レコーダーのふれを見ると既知抵抗とレコーダーのふれとは、ほぼ直線に近い一次の函数関係になる。

実験(III) ラポポートやクロファアの提唱する、ローレンツハ・テストに於ける向性指数と抵抗値との相関は $r=0.368$ 、指数と潜伏時間との相関は $r=-0.155$ 、指数と基本抵抗値との相関は $r=0.745$ 、指数と頂点反応時との相関は $r=0.085$ 、基本抵抗値と抵抗変化値との相関は $r=0.299$ となる。

藤森氏の室温 13.1°C に於ける潜伏時間 2.75 sec 、頂点時 4.51 sec と比較すると、この実験に於ては室温 19.4°C 潜伏時間 1.4 sec 、頂点時 2.2 sec となり、これは Gildermeister, M. や Ellinghaus, J. のいう見解を裏書きするものと見られる。

実験(IV) (1) Frustrate なれているときといないときとについてみると、(i)無変化のもの、(ii)P・G・R が周期状に整う、(iii)平板化される、(iv)類似波形を画くものがある。(2) 刺激が与えられると、呼吸線が雁行状に上ったり、雁行状に下ったりするものがある。(3) 刺激が与えられると必ず反応が同一波形を画くものがある。(4) Frustrate なれると呼吸線が全く不規則にみだれたり、亦 P・G・R も全く不規則にみだれるものがある。

二、社 会

1 諸価値間の関係

日本大学 木村 禎 司

目的 オールポート・ヴァーノンの価値研究を工学部学生(夜間部)に実施した結果の報告である。

手続 約八〇〇名のうち不完全なものを除き五六九の資料を得た。年齢の範囲は一八〜三〇歳で、一九〜二〇歳が最も多い。大部分が男子である。それをまず各価値が平均に接近している平均型三〇三(五三・二%)と、ある価値が特に高い(四〇以上)か、特に低い(二〇以下)分化型二六九(四六・八%)とに分ける。

結果 (1)、各年齢について平均(未分化)型と分化型との比を見ると、年齢が長ずるにつれ分化型が増加する傾向があるように思われる。

(2)、分化型のうち特にある価値の高い者を積極的分化型とすると、理論型七一、経済型二一、審美型三一、社会型二〇、政治型一九、宗教型三二で理論型が最も多い。計一九四例。

(3)、つぎに、他は平均しているのに一つだけ特に低い価値を持つ者を消極的分化型とすると、理論型二、経済型一一、審美型二六、社会型九、政治型一四、宗教型一〇である。これは他の価値に対し貶置されるもので順位は審美型が最も多く、理論型が最も少い。計七二例。

(4)、この積極・消極両価値の配分と、全員の平均値から見て、この集団の価値体系は理論—宗教—社会—政治—経済—審美の順になる。

(5)、各コースと価値型(積極的)との関係を見ると審美型の過半が建築科学生であることが目につく。そのほかは大体平均しているが、理論型に電気科、経済型に建築

科、政治型に土木科、宗教型に機械科などがやや多い。(6)、同一人で二価値が共に高い場合がある。理十美四、理十政三、美十宗二、経十政一。(7)、二価値間に一方が高いため他方が特に低いという関係がある。そうした葛藤を持つ価値として宗教一四、理対美一一、経対美九、社対理、美対政、宗対政、各八など。全然葛藤のないのは政と経、宗と美、政と社の三対である。

2 偉大性に関する研究(第二報)

一、二、三の Case Study を中心として—
日本大学 高嶋 正 士

目的 偉大性とは何か。又それを組成するものにどんな要因があるかを究明し、過去の偉人の偉大性を分析する手がかりとなるべきものを見いだそうとすることに於ける。今回は特に現存人優秀児の Case Study を中心として行なった。

方法 IQ 一三〇以上、SD 七〇以上を有し、且学業成績頗る優秀な中学三年生、各校より一乃至二名計九名を選出し、牛島氏の環境性格評定尺度を使用し担任教師及び両親に評定して貰い、次に Ternan の行った十八種の性格的特質については関係教師及び両親の他に品等して貰い、且生徒指導要録、家庭調査簿、進路相談票、小学校の内申書等を重要参考資料とし、他方に於いて両親、生徒の面接によりあらゆる角度から調査分析した。これらの研究には類型的な面が勿論必要ではあるが、事例が少ないため特に個々の特質に就いての結果を述べることにする。

結果 九例を総合的にみると、牛島氏の評定尺度の総合平均六・九、段階点十・二、AD 二・一一で極めて良好、十八種の性格的特質の評価で教師によるもの平均一

・四六、AD三・七八でターマンの報告より稍々良く評価された。両者の相関は〇・四六八である。両親によるもの前者より遙かに低かった。家庭の職業は専門的管理的職業で、経済状態頗る良く一応成功している。父平均三〇・三才、母二六・六才の時出生し、この点従来の研究に比較して父母の年齢が低い。家族は三から九にわたり平均五・四人である。ケース個々についてみると、性格は一例を除き内向性であり、VQ平均九一、IQ平均一三六、学業成績現行五段階法による平均四・六、友人数平均四・二人になっている。牛島氏案の尺度結果と、十八種の特質評価との相関は〇・七〇八でかなり高い相関を示している。読書熱効時から旺盛であり、ある者は変った行動を有し、ある者は特殊の興味を有している。一般に努力的、我慢強く責任感があり、自主性に富み常に委員に選出されている。両親はなるべく自由を束縛しないように努めているという。

3 婦人自衛官のパーソナリティの研究

陸上幕僚監部〇近 喰 秀 大
日 本 大 学 大 村 政 男
人 事 院 松 浦 健 児

この研究は防衛集団について行ってきた一連の精神医学的・心理学的研究の一部であって、ここでは婦人自衛官の情緒性と向性について報告する。研究の詳細については「保安衛生」第二巻五号・六号に掲載した論文「第二期看護婦課程学生的情绪性と向性について」"Emotionality and version among the second nursing course nurse students"を参照されたいと思う。

婦人自衛官の年齢層は二二歳から四一歳にわたり、入

隊前の経歴は主として国立病院・保健所および療養所に勤務していた看護婦である。

情緒性診断票において婦人自衛官と一般女子大学生のグループを比較すると、過敏性・抑うつ性および情緒性においては婦人自衛官のグループは有意に低い($\alpha \cdot 0$ 一)公衆前の自覚もまた有意に低い($\alpha \cdot 0$ 五)が、社会的内向性においては有意な差が認められない。情緒性の平均反応率においては婦人自衛官(四〇・一八%)・一般女子大学生(五八・七八%)のグループの間に有意な差が認められる($\alpha \cdot 0$ 一)。防衛大学校学生は婦人自衛官よりもわずかに高い反応率(四一・〇八%)を示しているが、その差は有意性を持たない。

向性においては婦人自衛官は防衛大学校学生よりも低く、その差は有意性を持っている($\alpha \cdot 0$ 一)。しかし婦人自衛官の向性は一般女性と比較すれば有意な差を示すのではないと思われる。

かような資料および日常生活の観察から婦人自衛官のパーソナリティを推断すれば、彼女たちが一般女性群よりも情緒的不安定の傾向が少いということが理解される。

4 ある特殊な女子集団の Emotional Tolerance の研究

日 本 大 学 近 喰 秀 大
日 本 大 学 〇大 村 政 男
田中教育研究所 松 浦 健 児

情緒的耐性とは個体あるいは集団が情緒的狀態において不当な反応を惹起しないで、心的平衡を維持する耐性を意味する。この耐性の測定には多くの生理的・心理的方法があるが、ここではRosenzweig, S. のP-F testを参考にした試案を用いた。絵は思いきった抽象的線図形

にし、要求阻止の場合は原案に準じた。対象は女子の特殊な少数集団で、経歴は国立病院・保健所および療養所の看護婦である。結果の概要はおおむね次のとおりである。

- (1) 反応型ではO-D、E-D、N-Pの順に低下する。
- (2) 攻撃方向では外罰的・無罰的・内罰的の順に低下する。
- (3) 二次元からの分類においてはM'E'E、e、M、I'、I、m、iの順に低下する。
- (4) 全群の傾向転移においては、O-Dと無罰的方向が後半に有意に増加し、N-PとEは前半に有意に多い。
- (5) 全群のGCRは二七・〇三%を示すに過ぎない。
- (6) Neurotic GroupとNon-Neurotic Groupとの間には、反応型および攻撃方向ともに有意な差が認められない。
- (7) Neurotic GroupのGCRは二六・四〇%で、Non-Neurotic Groupは二八・八七%である。
- (8) Neurotic Groupにおける傾向転移では、O-Dと無罰的方向およびE'が後半に有意に増加し、外罰的方向とEおよびN-Pは前半に有意に多い。
- (9) Non-Neurotic GroupではO-Dと無罰的方向が後半に有意に増加していた。
- (10) Introversive GroupとExtraversive Groupとの間には、反応型および攻撃方向ともに有意な差が認められない。
- (11) Introversive GroupのGCRは二五・五四%で、Extraversive Groupは二七・三一%である。
- (12) Introversive Groupにおける傾向転移はO-D、E'、M'および無罰的方向が後半に有意に増加し、N-PとEおよび外罰的方向は前半に有意に多い。
- (13) Extraversive Groupでは無罰的方向が後半に有意に増加し、N-Pは前半に有意に多い。
- (14) EmotionalityおよびVersionなどの分散とP-F testの結果とが明瞭でないのは傾向転移のためと思われる。
- (15) 全群を総括すると反応型としてO-Dが五〇・〇%を示し、一般的に最小値になるものが最大値を示しているのがめだっている。攻撃方向は一般的傾向に従っている。

る。(10) GCRは一般的に低い傾向を示した。

5 児童図書の分析

—「少年ケニヤ」についての試み—

東京学芸大学 阪本 一郎

児童図書の質的向上のために、現に愛読されている代表的な図書を採って、その魅力の所在と、それが児童の人格形成にとって健全かどうかを分析してみた。

繪物語「少年ケニヤ」は、既刊一一巻、約一五〇万部の売れゆきを示している。

物語は数駒を一単位とする事件の羅列である。事件の発端は、猛獣や土人の挑戦が過半数で、危地と知らずに踏みこむこと、救援を他から依頼されることなど、ほとんど受動的な動機によっている。すべて突発的な偶然である。

問題の解決も、救援者など第三者の出現による場あい約六割でもっとも多い。自力での敵の調伏は、起人的な技術による。あるいは神秘的な脱出路によって避難をする。かくて巨人征服もしくは愚弄の願望を満足させる。知的な術策を用いることがない。

一貫して絶えず敵を意識する緊張の下に右往左往する逃避行の少年の宿命的な身の上、短い事件の重複によって物語られていく。突如襲いかかる敵に、彼は一か八かの応戦を試みる。一難去ればまた一難。投機的興味の連続である。これが欠点の一。

しかも、思考を要しない。問題は偶然に起こって偶然に解決する。独立した事件の羅列であるから、前を記憶することも、先を洞察することも要らない。知性の欠如。これが欠点の二。

誇張された猛獣や怪人の脅威、これを超人的・神秘的な方法で一撃のもとにうち倒す。痛快さを煽る強烈な刺

激。これが欠点の三。

この三つは、現代社会の娯楽性の欠点と共通している。これらを脱却する努力が、作家に望ましい。

6 生活場面と言語の

コミュニケーション

—大衆酒場—

国立国語研究所 村石 昭三

目的 現代人の生活行動、二四時間は私的・公的生活における多様な言語行動の個人的調整によって安定化を試みる。生活場面は個人の言語行動にさまざまな規定を与える故に、ここでは場面を大衆酒場に限り、言語のコミュニケーションの特徴をとらえようとする。

方法 酒場内の客人の言語行動の(1)追跡的観察記録(2)録音器による音声言語の収録。

着眼点 音声言語のみを抽象せず、言語行動を全体的に空間・時間の位相過程から考察する。

場所 東京都内、新宿、池袋、上野にある小さな夜の

大衆酒場、三軒。

結果 資料の分析から得た特徴をあげる。

A 言語行動の構図

(1) 酒場内配置による行動場面規定とグループ相互の孤立化の傾向 (2) 不安定な身体運動と情緒の表出 (3) 会話における短かい物理的距離 (4) 女主人を媒体にしたコミュニケーション・ネットの形成。

B 言語表現の形式

(1) 情報交換の時間的軽重なりと聞きとりの軽視 (2) 多量の言語量と発声の混乱 (3) 強調句のくり返しと誘導、代名詞の濫用、修飾限定的表現と特殊語の使用。

C 言語表現の内容

(1) 単純な表現論理と文脈の矛盾 (2) 語いに対する感

化的意味づけ (3) 異性、仕事、身上、世間話。

D 言語行動の機能

(1) フラストレーションの解消、現実逃避 (2) 享楽、対人関係の心理的融合。

結論 大衆酒場における言語のコミュニケーションの特徴は言語による自主的な精神治療にある。その言語行動は現代人の健康的な生活行動のひとつの型にはかならない。

7 幼児のつたえの研究 その四

法政大学 天野 章

題材 おはなしづくりという保育実践記録を中心に。

対象 四、五才児 幼稚園・保育園児。六十名。

研究期間 一九五三年——今回は一九五五年四月からの保育実践の内より。

研究方法 実験観察法。この方法はその一で詳しく述べたが、ここでも簡単にふれると。

子どもの発展の過程には、すべて主要なる矛盾の結節点がある。こうした結節点をその発展の過程においてつかむことは「短時間見本観察法」でつかもうとすると、そこに系統的把握がぬける嫌があり、矛盾の本質にまでせまることは困難なように思える。更に、子どもの発展過程をきわめる、主要なるもの、つまり、教育・保育という大人の働きかけを見落し、精神発達現象の把握に落ち入る危険性がある。この点は、働きかけを捨てた。

無作為の自然観察法も矢張り、同じ危険をもつ。

そこで、子どもたちの精神発達に主要なる役割を果たす、教育保育とつらなりながら、意図的方向に合せながら、子どもたちの発展の典型的状況を考えていく方法、つまり、実験観察法という方法をとりあげてみた。

報告内容 今回は、都内C幼稚園五才児とG保育園五

才児夫々四十名を対象に置きながら、同一の材料に従って「懐れ自動車」というおはなしづくりを中心にして、教育・保育実践における、働きかけの相違に現れた子どものつたえ、地域性の問題を分析してみた。

材料も少なく、結論とはいかぬが、中間報告としていえることは、その働きかけの相違、ならびに地域性が具体的に現れていることがみられた。

今後、豊富な材料によって、個々の子どもたちのつたえの系統的な研究をやりながら、私たちの研究方法をより一層たしかめていくことにしたいと考えている。

8 Group Dynamics に関する

研究(二報)

— 雰囲気と認知の変容について —

愛知学芸大学 市川典義

目的 前回の報告に続き、今回は主として二つの雰囲気と異なる学級集団が、ヘッドシップの仕方によって、教師対児童間に如何なる認知関係を成立せしめるかを明らかにする。

方法 前回と同様であるが、ただ児童生徒の教師に対する認知の状況を明らかにする為、一七項目の学識、指導、人格の面における望ましい特性についての質問紙を別に作製して施行した。雰囲気については民主的、専制的の二条件に出来る限り合致する様な二学級を選出した。その基準は次の様なものである。

- (1) 教師の態度は民主的か、専制的か。
- (2) リーダーは民主的な態度をもつ児童か否か。
- (3) 学級は全体として秩序的、統制的に行動するか。
- (4) 下位グループへの分化度、凝集性の程度。
- (5) 児童、生徒の教師、リーダーへの依存性の程度。
- (6) 運動、清掃時は真面目で、且つ協力的か。

(7) 自習時はリーダーの統率の下に静粛に行われるか。

(8) クラス全体が、親和的、協力的、友好的か。

結果 Social Status (S.S.) の高いもの、中間のもの、低いものの三者について集計した結果、まづ民主的、専制的態度をもつ教師の何れもが、概してS.S.の高いものはやや過大に、低いものは過小視する傾向があり、民主的と専制的の両者の比較では、専制的教師の方がS.S.の高下を問わず過小に認知する様である。一方かゝる雰囲気のもとにおかれた児童生徒(成員)の自己に対する認知は過小視の傾向が示された。そこで此の点を明らかにする為に、担任教師と他学級教師の両方を同一児童に評定せしめその比較を行ってみた結果、民主的教師の方が、専制的教師よりも好ましい教師として認知されている様に認められた。

以上の諸結果について考えられた点は、民主的専制的といった学級の雰囲気の違いが、実験的操作でないため明確でなく、その為仲々一義的關係を把握しにくいという事と、今一つはかゝる雰囲気による認知の変容は、更にS.S.の差異と、それらの認知構造の分化度の面から研究して行く事を必要とする様に思われた事である。

9 社会性戒律説による小学生の

社会性の分析的研究

○阿部孫四郎

八尾市安中小学校 秋田一貫

社会をトポロジ的に分析すると、 I_n 個の飛鳥をもつ領域で、 $I_n = \sum_{i=1}^n (n_i - 1) (n_i - 2)$ の様に成員数 n の函数として示され、飛鳥は戒律で、成員運動能力による戒律内輪廻和、領域分化による戒律過剰和があるが、戒律は社会性の本質だから、戒律を調べれば社会性がわかって来る。(参考文献、阿部福四郎、性格の科学、第三

章、一九五二) 安中小学校上級生三年以上四三三名につき調べた。まずやって悪いことを二つずつあげさせて、二一戒律に整理し、三群に品等させた。その処理の結果を品等値順にあげると、(1) ヒロポンを教わる、(2) 盗み、(3) 線路に石、(4) 親不孝、(5) 拾った金をとる、(6) 傷害、(7) 麦の穂をちぎる、(8) パチンコ、(9) 学校さぼり、(10) かけごと、(11) 試験をみる、(12) 虚言、(13) 約束を破る、(14) 無駄費い、(15) 道で野球、(16) けんか、(17) 夜遊び、(18) 意地悪、(19) 落書き、(20) 悪口、(21) 仇名。——この傾向は世間的一般道義と大体同様なのに、大学生ではカンニング、学風毀損、教師軽蔑等の学校道義が最も重いのと対照的で、小学生ではカンニングは二一戒律の中央一位に品等され、また学校の特殊化が進んでいない。小学生の社会性を性別に比較すると、男は拾った金をとる、線路に石、かけごとが女よりも重く、ヒロポン、ぬすみが女よりも軽い。地域別に比較すると商店街は学校さぼりが軽く、特殊部落は拾った金をとるが重く、勤人街は傷害が軽く、農地は麦の穂をちぎるが重く、住宅街は親不孝が重い。学年別に比較すると低学年では戒律品等値の重さの分化の巾がせまいが、三年ではけんかが重く、かけごと、線路に石、学校さぼりが軽く、六年では線路に石、学校さぼりが重く、麦の穂をちぎるが軽くなって居る。これらの特質は χ^2 検定に於て一%あるいは五%レベルで有意差がある。尚地域別の名称はその大学の中心職業或は特質によって命名したものであって、別に職業別分類をしたものではない。

10 青少年の社会的関心(I)

総理府内閣官房審議室 小玉正任

今回は青少年の社会的関心に就いて述べる。政治的関心として、政治的常識の程度、政府、或いは議会政治へ

の不信、現在政治的論争点となつてゐるものに対する態度、更に政治的行動への意欲といった四項目をとりあげ、考察を進めたいが、昭和三〇年三月上旬満一六才から一九才までの日本人男女を母集団とし、層化多段無作為抽出法により全国一二三地点、対象者三、〇〇〇名を抽出し、個別面接聴取法により調査した結果を中心として述べる。

政治的常識があるかどうかということとして、革新的政治党と保守的政治党の区別が出来るかどうかを問うに、革新・保守の言葉すら知らない者は二七％で、言葉は知つていても、両者の区別がはっきりできない者が四六％あり、一応区別の出来る者が二七％である。この両者の区別の出来るという者は、夫々の政党に属する政党をあげたもの（尤も、中間的性格を持つある特定の政党を革新と見るか保守と考えるかは、各人の政治的立場に左右される）とある故、世間一般の常識と大きく違わない限り一応区別出来るものとした。両陣営のイデオロギイの差を述べるもの、論争点に対する革新、保守両者の見解に触れたものなどである。これらの分布を見れば、趣味や娯楽の傾向が所謂戦後派のものに（このことについては別に触れる）革新、保守の区別の出来る者が少く、言葉すら知らぬものが多い（三四％）。一六才から一九才までの青少年の約半数は生徒、又は学生であるが、両者の区別のできない者や言葉を知らない者は学校に行っていない者、特に中学だけを終った者に甚だ多い。この層で、区別の出来る者は一四％に止まる。高校に通つてゐる者では学年が進む程、はつきり区別出来る者が増加しているが、定時制高校生は全日制高校生に比べて著しく、此の点に關しては劣るようである。女性は区別のできるもの少く、男性の三五％に対して、二〇％となつてゐる。（以下略）

11 大学生の結婚に対する態度

（第1報告）

熊本大学 葛 谷 隆 正

目的 大学生の結婚に対する態度、特に結婚に於ける年令的、教育的、家庭的要因に対する態度の研究に於て、性差があるか、又アメリカのスタウトの同様の研究と比較してそこに何等かの相違が見られるかを明らかにしようとした。

方法 被験者——熊本男子学生一七五名、平均年令一九・九才、熊本女子学生及び熊本県立女子大生計一七五名、平均年令一九・八才。調査期日——本年五月。調査内容——男女の結婚最適年令、夫婦の年令差、在学中の結婚可否、家族同居と結婚、結婚後の夫婦有職の可否に關し質問し応答させる。

結果 (1) 男子の結婚最適年令——男子では二六～二九才代、女子では二八～三〇才代。アメリカでは二三～二五才代。女子は日米とも男子より年長視の傾向をもつてゐる。(2) 女子の結婚最適年令——男女とも二三～二五才代を最適とする。アメリカでは男子二〇～二二才代を、女子は二三～二五才代を最適とし、矢張り日米とも女子は男子より年長視する傾向が見られる。(3) 夫婦の年令差は結婚の幸福に影響するものと考えられるが男女とも半数近くあり、この傾向はアメリカの学生にも見られる。望ましい年令差については日本では四～五才、米国では六～七才が年長であるがよいとされている。(4) 在学中(大学)の結婚可否については日米とも否とするものが圧倒的で、双方在学中の場合とは否とする率が更に高い。(5) 家族と同居なら結婚延期とするものがアメリカでは学生の半数以上あるのに、日本では逆に延期しないとする者が男女平均して五九％近くもある。(6) 結婚後、夫婦とも有職がよ

いとする者は否とする者より高率で、特に女子では六八％を越えている。アメリカの学生では反対にその半数以上が否とし、可とする者は三％に足りない。(5)は家族意識の残存と住宅難、(6)は生活難と男女平等、個性尊重という民主的個人主義的人間観に基くものであると察せられる。この傾向は女子に於て著しい。

12 家族好性序列と

家族成員の行動傾向

東京都立大学 辻 正 三

目的 児童が家族を自らの好む順に序列づける場合、父を母より上位におく者(FVM群)と母を父より上位におく者(MVF群)とで、父母の家庭における行動傾向に差があるかどうかを、質問紙法による児童の回答を通してみようとする。

手続 ここに使用した資料は、都内M区T小学校六年生男女約三〇〇名の資料から、家族構成が父母とその子だけからなる一六九例を抽出したものである。うち八九例は、六〇数項目に及ぶ「家庭における日常生活状況調査」に回答した後に、家族を好性の順に序列づけし(A群)、あとの八〇例は「序列づけ」をした後に、「生活状況調査」に回答した(B群)。なお、「序列づけ」を課するに當つて、「序列づけ」の中に「自分」をも入れるかどうかは、被検児童の自由にまかす旨指示した。結果の統計的な検定は専ら χ^2 検定によつた。資料の集計分析において操作した主な属性の群別は、男女児別、BA別、序列中に「自分」を入れた者(e群)・「自分」を入れぬ者(nie群)別、FVM・MVF別、当該児童に対する養護的または嫉妬的事態における接触度が、母より父の大な者・父母相等しい者・父より母の大な者別、要決定的事態における決定の頻度が母より父の大な

結果 (一)父母の家庭における行動傾向のうち、父母の相対好性序列と正の対応関係を有意に示したのは、当該児童に対する養護的事態における接触度の相対的な大小であった。(二)この事實は、特にB群またはe群において顯著であった。(三)要決定事態における決定の頻度は、n—e群において若干正の対応関係がうかがわれた。(四)文句不平の頻度は、女兒またはe群において若干正の対応関係が認められた。(五)「序列」中に「自分」を入れることの意味の検討が、今後の課題の一つと考えられる。

電通調査部 朝倉利景

質問票による標本調査ではサンプリングにおけるバイアスやエラーのほかに、質問票、調査員、回答者等による所謂サーヴェイ・エラーが起ってくる。この研究は、その中の回答者によるサーヴェイ・エラーに関する吟味である。

質問調査で注意すべきサーヴェイ・エラーの一つは、回答者が、故意なく主として記憶の誤りから、事実に対する回答を行うことである。このために質問票作成に当っては、例えば、遠い過去の事実や、日常よく繰り返される事実について回答を求める場合、その質問の適用性が問題になる。

ここでは新聞広告中、どの業種の広告をみるか、について、回答者に事実を態度化して表明せしめ、その結果を実際の閲読結果と照し合せてみた。一方の調査では東京在住十八才以上の男女二千人に面接調査をして、「あなたがいつも気をつけて御覧になる広告はどんな広告で

14 流行色の実態分析（その一）

輿論科学協會
牧田稔

流行色が独断的な決定をされることに対する反発は最近とみに強くなっている。流行色は押しつけられた色ではない。他の流行現象と同様に大衆の意志がそこに働いて始めて流行色という名にふさわしいものにならう。そのためには、大衆の衣服その他の生活環境の中において、彼等が何色を最も好んでいるかということは重要な意義を持つてくる。

先ず第一段階として我々は上記の如き要請から、大衆の嗜好する色を調査してみた。色彩の嗜好調査は勿論古くから行われている。例えば、J・Chou 一八九四年の調

査、H・J・Eysenck | 一九四一年 & J・P・Guilford | 一九四〇年 Color preference の研究や、今田恵 | 一九二六年 (心研第一巻)、小口ふく・青木誠四郎 | 一九二六年 (心研第一巻)、橘覚勝 | 一九二九年 (心研第四巻)、斎藤定良 | 一九四九 ~ 一九五一年 (東大大学院 report) その他色々ある。しかし、これ等の調査は対象として傾いたものがとられていたり、色紙として用いられたものが不適当であったり、実物を提示せぬため、抽象的な色彩としての調査であつて、不備な点が多い。だが今度我々が行つた調査は東京都内二〇才以上を対象として地域別無作為抽出法によつて八〇〇名を抽出、これに面接して調査を行つたものであり、色紙は色彩社シリーズ No. 九〇色に更に七種の色を加えた九七色について昭和二九年五月一四日及び昭和三〇年六月二五日の二回にわたつて行つた大規模なものである。

その結果の一部を概略述べてみよう。

(一) 一般的な嗜好色は色相については男子は紺、緑系統に、女子は赤、紫系統に多く、明度は低明度のものが好まれ、彩度はその高いものほど嗜好が強い。

(二) 洋服の嗜好色は一般に青系統に集中し、男子は比較的低明度であるのに、女子はやゝ高明度のものも選択する傾向が強い。彩度については男子は低彩度に圧倒的な率を示すが、女子は比較的高彩度にも選択の率は高くなるのが見られる。

(三) 年代別にみると、一般嗜好色も衣服の嗜好色も男子は低明度を好むが、女子では若年者は高明度、老年者は低明度を好むことが見られる。(以下略)

×
×
×

15 血族結婚と知能との関係

信州大学 坂本英夫

〇樋口吉弘

目的 血族結婚がその子孫の知能に如何に影響するかを確かめようとする。

調査対象と期日 長野県上伊那郡南内村桑原区八五戸男子一九〇名、女子一九九名、計三八九名。昭和二年五月五日～同年一月二二日。

調査方法 (1) 知能—田中B式知能検査、学業成績、面接法による。(2) 家系図作成—戸籍簿、寺の過去帳による。

結果と考察 A 血族結婚の様相 結婚回数は過去六八代に四九二回あり、そのうち血族結婚は一九四回で、比率は三九・四％となる。家系図よりみると、X家とY家と他の八三家群の三系統に分れ、その八三家群は全部が親戚関係になっている。この様に血族結婚が多い原因としては、僻地、強度の封建性、血統の純粋性に対する美的憧憬等があげられよう。B 血族結婚回数と知能 血族結婚回数が三回までは、知能の上位者と中位者は次第に減少し、劣位者と低能者は増加するが、三回以上になると、前者は増加し、後者は減少していく。そして、六回にはほぼ同数となり、八回には逆になる。しかし、親の組み合わせなどから考え合わせると、血族結婚回数が多くなるに従って、その子孫の知能は低下すると云えよう。C 親の組み合わせと子供との知能 知能的に親の組み合わせが悪くなるに従って、その子供の知能は低下していく。又、過去に於て血族結婚回数が多く、不良形質者の出ている親側の子供は、血族結婚回数が少く、不良形質者の出していない親側の子供よりも知能程度は悪くなっている。

結論 人間の知能は、遺伝と環境の何れの要因に、よりもとづくかについてみると、この調査研究からは環境的要因よりも遺伝的要因の方が多大な影響を与えていると云うことができよう。しかし、この研究からは遺伝的法則を判然と見出すことは出来なかった。

16 被観察事態が患者の行動に及ぼす影響

西尾忠介

桜ヶ丘保養院 天羽大平

〇大島貞夫

本研究は閉鎖病棟内の精神障害者が食事時に配膳室に列を作つて並び、給食される時を利用してその配列の順序から彼等の行動の特質を観察したものである。

観察は一日三回食事毎、一週間行つた。従つて、通常二一回或はそれ以上観察の対象となるのである。一週間を二日、三日、二日と三期に分けて夫々平均し、一期と二期、二期と三期に於ける平均値の差が五以上のものとそうでないものを区別し、早くなつたものと遅くなつたものを総計すると、一期と二期は相対的に二期と三期よりも早くなつてゐる事が分つた。初第一回の観察時に記録した順序が何等かのグループを作つてゐるものと仮定し、次の規約に従い操作する。(一)第一回目の順位を患者番号としZで表し、特定の患者の仲間がZ±5以内のKraepelin番号をもつ者とする。(二)上記の仲間がその患者とグループをなすため隣り合うか、一人又は、グループを間に置いて隣接しなくてはならない。特定のグループの安定性を調べるため、Group Cohesion Index $C = (C - \sum (N/n)) \times 100$ (Nは患者数、nは観察回数、Σはグループから脱落した患者の数)を用いた。かくして、二名がグループを作り安定している例は非常に

少い事が分つた。それは二人組総数の約三％である。即ち、五組である。

最後にグループの組成について調べてみた。基本型を二人組と考え、それに一人或は二人結合する場合を調べた。その結果、二人又は三人で高い結合性を示すものは奇数のグループを作る事が困難であり、逆に奇数でまとまり易いグループは、偶数型でまとまる事が困難だと考えられる。そのグループはPsychopathia一名、Schizophrenia一名、Epilepsia一名、M・D・I一名が、二名乃至四名で作る偶数のグループと、Schizophrenia二名、Paralyse一名で作られる奇数のグループが認められる。

17 精神薄弱児をもつ家庭

(その一)

葛藤と緊張

済美教育研究所 山本敏雄

精神薄弱児を持つ家庭にも、家族があり、家族生活が営まれている。そして、その子故に生ずる家族間の永続的な暗い雰囲気は、不和、葛藤を生み、そして多くはすこぶる深刻になつてしまふのである。家庭の実状はどうであろうか。その実態を調査した結果について述べよう。当所教育相談部及び都立青島中学校教育相談部に相談に見えた四〇四例についてアンケートを送り、一五六通、四〇・一％の回答を得た。我々としては好結果と考えている。

(一)家庭内の雰囲気と家族の子供への態度 「お子さんのために家庭の一般的雰囲気はどうですか」と問い、六項目の回答例のうち該当するものに〇印をつけるようにした。次に「お子さんに対して家族の態度はどんなですか」と問うた。雰囲気は、「家庭全体がば

らばら」「家の中がいつも暗い」「時々暗くなる」「四・五二%で、半数近くが暗く、「ふつう、あかるい」が残りである。子供への態度は「完全放任」「干渉多く、かばいすぎる」「無関心」「大体よいが時に感情的になる」の望ましくないもの七二・四三%で、子供の事で心配が多く、苦勞も大変なものであると思われる。

(二)父と母の葛藤と緊張

不具の子を持った父母は、かえって夫婦の危機をのりこえ、緊密となろうが、多くは、不和、いさかいを生じ家族の崩壊に至ることもある。子供への態度は「感情的でひどくあたる」「げんかく、やかましすぎる」「気まぐれでときに自制を失う」「大体よいが特定の時自制を失う」で父は六二・八七%、母は七〇・〇%が望ましくない態度で接している。「別居、離婚のおきた、話が出た」が四%、「ときにあらそいがおきる」が二八・一八%である。「和して解決につとめる」が、五七・一%は涙ぐましい限りである。

(三)祖父母と両親の葛藤と緊張

「あらそいたえぬ」「くいちがう」が一%、「うまくいかぬがおさえる」が八・六%、両方で一九・六%(約二割)が望ましくない。医学的にも直る見込のない子を抱えて、家庭の日常は深刻である。

三、教 育

1 教師の悩みについて

千葉大学 小木曾 恩

目的 小学校及び中学校における教師が、教師として、また一市民として、いかなる要求や願望、もしくは悩みがあるか、その障害、障壁は何か、さらにそれに対

し、いかなる努力が払われているかについて調査し、その対策は如何というようなことについて考究せんとしたものである。

方法 自由記述法。対象は千葉県〇郡〇〇小・中学校教師男女合計七一名。

結果 まづこれを全体について見るに、教育活動に関するもののうち、教える内容と方法とでは方法の方に一層多くの要求、願望、悩み、障壁、努力があり、学習指導、生徒指導、学級経営に対しては三者とも高く、次に教師として自己自らに関する要求、願望、悩み、障壁は高いが、それに対して払われた努力は前者程高くはない。次に対人関係では教員相互関係、対父兄・保護者関係における要求、悩み、障壁、それに対する努力が大きく、一市民としては家庭生活、文化生活に対するそれが比較的大きな数字を示している。

次にそれら内容についてみるに、教育活動に関するものについての悩みは、雑務が多すぎて研究時間のなさと、用具・施設の不足、資料の貧困、経費の不足、学級人員の過剰、教員の不足、教師の指導能力の不足、教師の身体的・精神的不健康、児童生徒の生活環境、すなわち、家庭環境、友人環境、社会的・文化的環境、広く地域社会のありかた等に関係し、その対策としては、学級人員の縮小、特別学級の設置、事務職員、教員の増加、受持時間の減少、事務の簡素化、学校図書館の整備、教師間の相互研究や協同研究の促進、全校を挙げての協力体制の実施、出来れば地域社会の人々を含めての協力組織、例えば事例研究協議会をもつこと等が有効と考えられる。

× × × × ×

× × × × ×

2 中学生の情緒の実態について の考察

中央大学 赤塚 泰三

中学生の日常の情緒の動きからその人格構造をさぐり個性指導を基礎づける試みとして、学校家庭友人一般生活の四場面で「喜怒哀楽恐淋」の情緒がどう動くかを質問紙法によって調べた。被験者は、東京都大田区矢口中学一、二、三年生徒合計男六七九名、女六六六名。回答件数男七一一、女八九〇三。昭和二十九年十月上旬実施。

(一)情緒の全体的傾向―次のようである。(喜・楽は同じ傾向であるから一括して扱う)。

情緒	男	%	女	%
喜	二二四七	(三〇・二)	二三四九	(二六・四)
怒	一一四〇	(二七・四)	一五一八	(二七・二)
悲	九七二	(二三・六)	一二二五	(二三・六)
楽	一一六三	(二六・三)	一四二四	(二六・〇)
恐	七四〇	(二〇・四)	一一八六	(二三・三)
淋	八六九	(二二・二)	一一二一	(二三・六)

男女共「喜楽」が最高、次いで「怒悲恐淋」の順となる。女の「恐淋」は男より大きく、またより情緒的である。

(二)情緒の場面別傾向―(表省略)喜楽と悲は男が「学校」で多いのに対し、女は一年の喜が「学校」で最高のはか「家庭」で多くあらわれる。怒は男女共「友人間」で最高、恐は男女共「一般生活」で最高、淋は男女共「家庭」で最高となる。がいして男の情緒は「学校」女は「家庭」で多く動く傾向がある。

(三)情緒の内容別傾向―(表省略)場面別にあらわれた情緒内容の最高頻数のものをあげると次のようである。

情緒性	学 校	家 庭	友 人	一般生活	その他
喜・(男) 校外授業	物をもろう	仲良く遊ぶ	親切の交換	空想	
喜・(女) 学校行事	一家団らん	〃	〃	反省	
怒・(男) 勉強不出来	親の無理難題	いやな友人	大人の不正	何となく	
怒・(女) 男の乱暴	〃	〃	〃	馬鹿にす	
悲・(男) 勉強不出来	父母の叱責	仲間外れ	大人の不親切	背が低い	
悲・(女) 先生の叱責	〃・手伝	悪口・カガ	不幸な人を	他人の幸	
恐・(男) 先生の叱責	夜の留守番	友人のケン	夜・恐い話	夢	
恐・(女) おそい	〃	〃	〃	戦争	
淋・(男) クラスが非	一人留守番	友とのケン	夜	何となく	
淋・(女) 友人の欠席	〃・兄弟が	仲間外れ	〃・人の不	信じられ	

寮を含む)が第一位。学校が次ぐ。交通機関関係、路上、その他の場所等。(4)発生原因 精神的原因(相手の態度、自己に対する侮辱、利己的行動、等)が各強度を通じて六〇・七〇%。その他に、身体的、物質的、社会的(個人的立場を離れたもの)、自我的(自己の才能、性格に基く)原因がある。(5)対象 各強度を通じて、一般の他人及び男子の友人が多く、合計約五〇%。次いで、一般学生(強度五、四)や、家族(三、二)。原因との関係は、強度との関係とは多少異なる。(6)持続時間 強度が大となるにつれて、長引く傾向がある。最短は一分未満、最長は永久的。(7)怒りの表現 各強度を通じて、言語的攻撃、及び代償的行動(サボ、表情等)が多いが、抑制する場合も見られる。(8)内部的衝動 怒りの状態の記述が最も多い。(9)解消過程 自然消滅、原因消失、気分転換の順。(10)その後の行動へ影響 なし、能率低下、不快の順。

3 大学生の怒りに関する調査

静岡大学 石 川 透

目的 大学生の怒りの経験を、後記の諸項目について明らかにしようとする。

方法 怒りに関しての日記(後記の諸項目、並びに睡眠、健康、疲労等の状態を記す、怒りの強度を五段階に品等)を七日間、つけさせた。無記名。昭和三十年五月下旬より六月中旬までの間。調査対象は本学男子学生二九四名、大部分は一、二年平均年令十九才十ヶ月。

結果 (二三名の分は記述不十分で除く)

(1)怒りの回数 総計一一三三回、一人平均四・二回、最低〇回、最高二三回。一日の最高は四回。強度別の回数は、五(最強)(八・九%)、四(二六・四%)、三(二六・六%)、二(二九・九%)、一(七・九%)、強度不明(一〇・二%)。(2)発生時刻 強度により必ずしも一定していないが、大体午後三・五時頃が最も多いと見られる。(3)発生場所 各強度を通じて 自宅(下宿及び

4 大学生のフラストレーション

中村弘道

東京大学○中 島 昭 美
富 田 悟

東京大学学生相談所は昭和二十九年一月本郷と駒場の二つのキャンパスに開設せられ約二ヶ年の歳月を経たが、その間この二つの相談所を訪れた学生の数は五六六名に上っている。もともとこれには二度三度と数回に亘ってインタビューした件数は含まれていないからそれを合わせることもと数が多くなるわけである。

相談内容では、(一)駒場は個人適応に関する問題と健康に関するものが多い、健康の問題のなかで注目されるものは精神衛生に関する問題で単に病院に行ったり、医者の

の手当を受けなければならないというものよりも自発的に自分の生活態度を改造しパーソナリティーを再構成することによって治療に導かれる場合が多い。(二)進学及びコースの選択の問題、駒場では従来進学振分けの発表後に自分の志望がかなえられずあわてて相談所にかけてくる学生が多かったが最近では次第に前以って自己の能力、適性、興味等について相談する学生が多くなった。(三)本郷の大学後期課程では転学部、転学科、学士入学の問題が多い。これは必ずしも充分な考慮の下に悔のない選択がなされているとはいえない証拠であってプリ・カレッジ・カウンセリングの必要を感じる。(四)大学入学時に際しオリエンテーションの不足が痛感される。入学時の困惑とフラストレーションを解消し、充分な安定感と所属感をもつて一日も早く大学社会に融合せしめることが必要である。(五)学業の負担が学生の能力により難かしきると重荷になり、易しきと退屈する。学生の能力が学生の負担と一致するとき学生は成功感を持ち生長と成熟を続けることができる。

5 大学生のフラストレーション

中村弘道

東京大学 中 島 昭 美
富 田 悟

今後の研究課題としては(一)学生がいつ、いかなる問題をどの程度に持っているかの実態調査が望ましい。(二)カウンセリングの道具又は技術としてのカレッジ・レベルの標準化されたテストの作製が必要である。

東京大学教養学部学生相談所では学生のフラストレーションの実態を知るために本年四月、新入生を対象として Mooney の Problem Check List を邦訳したものを

実施した。目的は前記のみならず更に個人指導の資料とすることをも含めたものである。調査項目はまず米国のそれと比較するために内容的直訳を用い、実施後のデータによって漸次改訂してゆく方針である。これによる健康、社会適応、社交娯楽などに関するフラストレーションが他に比して多いとも云える。又、自発的な問題の解決を助ける為に二〇〇名を選び、その中から五〇名に対して第一次の誘いの手紙を出して学生が気軽に相談所に来る様に配慮している。

6 教育相談における効果について

田中教育研究所 品川不二郎
〇品川孝子

目的 教育相談における効果の判定。
手続 相談に来てより約六ヶ月後に、ハガキにより問

合させた。

対照 田中教育研究所教育相談部相談者 昭和二十九年四月より同十二月迄の相談者二二九名中、問題のある者一一名に対して問合せを出し、返信のあった者三六名についての結果である。(男児二三名、女児一三名、五才一四名、六才一四名、七才二名、八才二名、十才一名、十一才二名、十三才一名)

指導方法 両親に対するカウンセリングを主としたが、その過程を述べると次のようである。(1)子供についての資料を蒐集する(各種テスト)。子供との面接、問題によっては、担任教師や家庭から資料を提出してもらう。(2)次に親と面接するが、相談者は始め種々の意見や指示を述べるのをさけ、出来るだけ率直な親の考えを聞き、それを理解し受け入れてやる。(3)集めた資料、情報を示し、特に問題点に関しては、一般的な親の態度と子

供の問題のメカニズムを話し、他の事例を引用して普遍的な知識を与える。(4)これにより多くの親は自から問題の原因に思いあたるのであるが、相談者は更にこれを認め詳細な説明を加える。この場合所謂 Bibliotherapy として、両親向きの参考書などもすすめる。親が問題の原因を痛感すれば、それを改善しようという意欲も起し、何処かで今の悪循環を打ち切ろうと決意するようになる。

結果 返信のあった者三六名の効果は次の通りであるが、判定の規準は相談者が指示し、記入は両親にしてもらった。

+3 (大へんよくなった)	一〇名
+2 (大部よくなった)	一五名
+1 (少しよくなった)	九名
0 (相変わらず)	二名
計	三六名

7 わが国のカウンセリングの実態と性格について

——第三回報告——

東京教育大学 井坂行男

この研究は、カウンセラー設置概況調査、主として中学校におけるカウンセリングの問題点等の第一、二回調査報告について、特にカウンセリングの性格について、わが国の高校教育の実態を背景としながら分析したものである。

わが国の中・高校においては、カウンセリングは主にホーム・ルーム担任教師によって行われているが、それには、(1)カウンセリングのための専門的技術が十分身につけていない。(2)生徒指導に必要な資料を各自で十分に蒐集整理することができない。(3)それぞれの校務分掌下にあつてカウンセリングに専念できない。(4)職員組織上

すべてのホーム・ルーム担任教師が個別指導に適当な条件資質を具えているとは限らない。(5)生徒は身上の問題について単にホーム・ルーム担任であるからという理由からだけでは相談助言を求めようとしていない。等多くの困難を残している。専任のカウンセラー設置が切に望まれるゆえんである。

カウンセリングの性格を規定するものとしてあげられた主な内容は、生徒の持つ問題、生徒の非行の原因、非行の兆候の発見、悩みの助言の資料、テスト・調査等による資料の蒐集、整理、相談室の施設、現下の学校の職員組織、その中におけるカウンセラーの位置づけ、特にホーム・ルーム担任教師との関係、教育の訓育面との関係等がある。

これらの問題の実態を究明しつつ、特に現下の状況においてカウンセリングを行ってゐる教師の負担量を探究し、カウンセラー設置のための基礎の一部面を明らかにしようとした。

8 中等教育時期の

道徳、宗教訓練

十文字高等学校 秋葉馬治

一、道徳心、宗教心の発達段階
一般に道徳心、宗教心は青年期に於て略々社会的標準に近づき一応の完成を見ると言われている。また著しく内面的であり漸次自主的になる。判断のカテゴリーが狭く、行為との矛盾対立が少くない。之を心理学的発達段階にすると

- (一)無道徳の段階(一才～三才ころ)
- (二)他人の要求に従う段階(三才～五、六才ころ)
- (三)相互適応の段階(六才ころから)
- (四)原理、理想による段階(十才～十四、五才ころ)

(四) 道德的知識と行動が矛盾する段階(十四、五才と十七、八才ころ)

二、中等教育時期の特色

(一) 人間の最も中核にある最も重要な欲求は青年期に発達する、即ち自己の生命、生活の安全に対する欲求、自らの価値に対する欲求、性欲等がこれである。

(二) 更にこの時期には社会の既成道德、既成宗教、既成文化が人間の内部へ浸透して人間の道德となり、人生観となつて行くのであるが、その際社会の道德やイデオロギに分裂があり不統一があると青年の内部を分裂し、不良化の現象を生じ、又交友関係に性的関係の危険を伴つて来る。

(三) 青年期から壮年期にかけては個人の人格は拡大され、深化されて己れの利害と不幸と社会の利害と不幸とを同一視するようになり、社会問題や国際問題を個人の痛切な問題とし、ここにも亦発達の課題の重要な一面が存在することになるわけであるが、この事は真に社会化された人格に於てのみいえることであるが多くの未熟者は皮相的な関心を示すに過ぎない。

三、宗教、道德の訓練

(一) 知識による訓練、欲求、道德、人生観の教育。

(二) 良習慣の機械化。

(三) 環境整理、教師の態度。

9 道德判断における

教師と生徒の比較

西京大学 坂田 一

目的 規範としての道德行為の判断は、発達途上であり、また特有な問題期にある青年と、成人としての教師との間では共通点も、断層もあるであろう。それらの内容分析を行つて、輔導に役立てようとした。

方法 質問紙法によつて善悪両行為八〇問を品等せしめた。生徒は高校生男女一一三名、教師七五名。

結果 (1) 領域別に分けると、生徒は学校・個人・国際・社会・家庭・国家の順、教師は個人・学校・国際・社会・家庭・国家の順で、共に国家、家庭が低い。これは田中寛一博士の大正十四年の調査結果と逆になっている。(2) 教師、生徒の列位相関は頗る高い。(3) 教師は他人と自己、社会と自己との関連において、比較的己のパーソナリティを確立し、自己の行為の規範を持つて超個人的な社会規範に立っているのに対し、生徒は対人、対社会的にハッキリ確立されていないで、一応成人の社会と切離されていて、自我周辺の具体的な問題に関心が多く、自分の都合や利害で動揺する不安定な状態にあつて、パーソナリティの建設途上にある。(4) クラブ活動、身体鍛練、純潔など、青年の発達過程で情操的に育まれるものは生徒が高かつたり、また成長を願う青年の指標として高く掲げられるものがある一方、人の陰口、猫ババ、恋愛のおしつけのように生徒の通念として教師ほど厳しく律しないものもあつて、一応の完成をみた教師と矛盾性をはらんで成長過程にある青年との考え方の断層がうかがわれる。(5) 田中博士の結果との比較では、自己犠牲などの一部を除いて、一般に教師、生徒共通になり様相を異にしていて、当時の社会環境を異にして多くのフラストレーションに呻ぐ現在、お互いに同質の問題として解決すべき多くを擁している。

10 児童生徒の妊娠解釈に

関する研究

横浜市立教育研究所 岡田 寅次

妊娠の外形的解釈は容易にできるが、その妊娠が性交

の結果受胎を促して生じたものであるとの解釈にはなかなか到達しない。そこで妊娠解釈を五類型十五種類の選択肢で捉え、小学校六年より高校三年までの間に、その解釈が年令によつてどのように変るかを追ふことにした。調査対象は小学校六年女生五五九(市内四校) 中学校一年女生九三三(市外二校市内八校) 二年女生七五三(市外二校市内八校) 三年女生九五八(市外二校市内八校) 高等学校は一、二、三年女生二四一(市外一校) 男生は中学一、二、三年一六九(市内一校) 総計三七一三名である。人員の配分にむらがあるので今後この質問紙を使つても幾分変わってくるものと思うが、その結果を一先ず概観すると、年令に従つて激しい上昇傾向を示すものは第五群即ち「どうかする」との有意的な性接触を意味するもので、対照的に激しい下降傾向を示すものは第四群即ち「遊ぶ、暮らす」等の無意的な性接触を意味するものである。これは自然に妊娠すると考えていたのを、どうかしなくては妊娠しないと考へなおす方向を示すものでその交叉するところは中学三年にできている。従つて性知識の混乱がこの年令附近に起るものとみてよい。なお第二群の解釈(ふれる)が中学三年を山に下降するのであるから、この山は交叉期と一致し性知識の混乱を助ける要因ともなつてゐる。しかもこの混乱期で第一群乃至第五群の妊娠解釈がお互に最も接近し解釈に迷つた揚句精子プラス卵子の原理に移行して一時的には割切るが再び疑問が高まる傾向も示している。換言すれば結婚して男がどうかするとやつと考へたが(高校一年が最高峰) そのどうかするの思考過程が精子プラス卵子の原理で満足させられ急速にこの線に吸収されて、どうかするの曲線は下降して割切るが、この受胎原理では不明な箇所ができて高校三年ではかえつて疑問線が上昇し、終点に到達しないで迷つて様子が出ている。

11 男女交際についての実態調査

東京学芸大学 佐藤 正

同一視点から、中学・高校・大学と縦に男女交際の実態を比較することによって発達的な変化傾向を理解する必要がある。しかし、この種の断面的な比較による発達の研究には、被調査者の複雑な生活条件ができるだけ類似なものでなければならぬ。東京でも比較的穏健な中間的条件と考えられた対象を選んで実態調査を行った。

(対象、東京都世田谷区山崎中学校二年生男女三一八名、東京都立目黒高等学校三年生男女一九〇名、東京学芸大学三年男女二一〇名)

男女ともに異性の友人の増し方は同じ傾向にあり、大学においてその増し方は急になる。異性の友人数は、平均して、中学男〇・四名、女〇・一名、高校男〇・五名、女〇・三名、大学男二・〇名、女一・九名であった。交友関係の要因は、男子が女子を選ぶ場合と女子が男子を選ぶ場合に多少の差異が認められる。男子は好感のもてる人、好きな人として女子を選ぶものも、とも多いが、女子は勉強(研究)の友人として(中学)、スポーツ、趣味、娯楽の友人として(高校)、好感のもてる人、好きな人(大学)となっている。中学校では、尊敬する友人が男女共に上位にあるが、男子では高校から少くなるに反して、女子は大学まで多くのものにこの理由があげられている。

異性の友人は学校外のものが比較多い。中学生では男女共に交際を望んでいないものが多いが、大学生になると望んでいるが交際をしないという理由が多くなる。その理由は、中学生では男女共に、まだ若すぎる、高校生では勉強の邪魔、面倒くさい、大学生になると交際が下手、などが目立つ、このほか男女交際の限界意識、交際

意識への社会的影響の調査なども併せて行った。

12 配偶者選択の態度に 関する一調査

——大学初年生の場合——

日本大学 妻倉昌太郎

青年の配偶者選択に対する態度について、大学法学部初年生男子一〇二名、女子二八名を被検者として調査した。

〔検査Ⅰ〕男女学生の配偶者選択要因として、Reuben IIIのあげる一八の項目を選択肢として、被検者が配偶者選択の際に最も重視する事項を三項選択せしめた。IIIの結果では四・五位にある健康、愛情などの要因が本調査では一・二位を占め、同じくIIIにおいて、一〇位程度の教育・知能の要因が本調査では三位になった。男子は容貌を第五位にあげ、純潔は七位となっている。IIIの結果と本調査の結果は性別にみると普通乃至高い相関がある。

〔検査Ⅱ〕Ray E. Baber (一九四〇) Judson T. Landis (一九四七及一九五二)の調査に従い、他の条件が完全に満足な場合に、一〇項目の条件のそれぞれの人を配偶者として選ぶか否かを然否法によって検査した。経済的に低い地位の者や自分より下層の家庭の人との結婚は五分の三以上の被検者が肯定している。魅力のない性質や人格者については否定されることが多く男子は容貌のひどく悪い者を最も多く否定した。離婚経験者が男子によって否定されることの多いのは検査Ⅰの純潔の七位と対照して興味深い。本調査においても性別にみるとときLandisの結果と普通乃至高い相関がある。

〔検査Ⅲ〕教育程度については男子は同じ教育程度の

女性を、女子は自分より教育程度の高い男性を求める。

〔検査Ⅳ〕年令的には男子は自分より若い女性を、女子は年長の男性を求める。

〔検査Ⅴ〕Straussが結婚において満したいと望む Personality needsを調べたものに従い、その五項目を選択肢として被検者に示し、自分が結婚において期待する事項三つを選択させた。「私の気持ちを理解する人」「愛してくれる人」などが優位を占める点はStraussの結果と一致するが列位全体の相関は低い。

13 身体的特徴に対する関心の 年令的变化について

東京教育大学 松田 岩男

目的 人は多かれ少なかれ、自己の身体的特徴に対して関心をもつものであるが、それは発達に伴って変化する。これは自我の自覚との関連においてみることであり、本調査は体育的な観点から、児童、生徒が身体の外に強い関心を示すか、それが、性、年令によってどのように変化するかを明らかにするためになされたものである。

方法 質問紙法。身体を(1)顔(二六項目)(2)身体形状(二二)(3)機能(七)(4)運動能力(一六)にわけ、該当事項にチェックさせた。

対象と調査期日 静岡県下の某小学校四、六年、中学校一、三年の男女計四〇一名を対象とし、昭和二十九年十月に調査した。

結果の概略 一般に、女子が男子よりもすべての領域について関心が高い。ただ身体の機能と運動能力については、小学校では男子が高いが、中学になると女子が高くなる。

これは個々の項目の頻数が多いだけでなく、多くの項

目について相当の類数を示すことによってみられる。

けれども、項目によって、性、年齢による関心の変動がまちまちである。例えば、「顔が黒いので困る」「眼の形をよくしたい」「脚が太いので困る」「やせたい」などは男子は低く、女子が高いが、それも中学校以後に急速に高まる。「背を高くしたい」「跳力を強くしたい」などは、小学校六年又は中学校一年頃までは男子が高いが、それ以後は男子が下降し、女子が急速に高くなる。「手先を器用にしたい」は中学校一年迄は男女ほぼ同じであるが、三年になると女子のみ急に多くなる。

「たくましい身体になりたい」は男子が多いが、女子も、小学校六年、中学校一年では四〇%近くある。男女差がなく、漸次高まるものとしては「赤面して困る」などの項目である。

14 幼児の自然観の一考察

東京学芸大学 湯 本 信 夫

研究動機 幼児の自然現象に対する見かた考えかたの調査については、ピアジェの口頭による質問の調査があるが、私は口頭による質問だけでなく、描画を併用して、幼児の応答と描画の両面の内容を総合して、その自然観を調査した。

研究法 自然現象の中、幼児がもっとも強い興味や関心を示す、「かみなり」のなる現象をとりあげ、幼児に紙とクレヨンを与え、一人一人面接して、「夕立の降っているところを描いてください」又は「かみなりの鳴っているところを描いてください」と言って、その紙にかかせる。

幼児がその絵を大体完成した頃に、「かみなりはどうして鳴るのでしょうか」と質問する。

幼児は口頭で答えたり、その絵に、描き足りないこと

がらを描き足したりして、自分のかみなりに対する見かた考えかたを発表するのである。

これら応答内容及び描画内容の両面から幼児のかみなりに対する見かた考えかたを総合的に調査する。

調査対象 私が四才、五才、六才級の幼児(K及びS保育園八七人、K及びD幼稚園一一二人)を二つの方法で調査し、更に東京都内の幼稚園及び保育園の幼児一四三人を同園の保育に依頼して調査してもらった。

調査結果及び結論 四才児(六二人)、五才児(一五二人)、六才児(一一六人)、合計三四二人の調査結果を総合すると、かみなりの鳴る現象に対する幼児の見かた考えかたは、次の通りである。

	四才児	五才児	六才児
(1) 電気と電気との衝突	四才児 二二%	五才児 三六%	六才児 六一%
(2) かみなりさま、鬼、神さま	四六%	四〇%	二七%
(3) 空(雲) になる	八%	八%	二%
(4) 雲と雲とが衝突又は(雨と風との衝突)	三%	一〇%	〇%
(5) 不明	二〇%	一〇%	九%

即ち、幼児の自然現象に対する見かた考えかたは、四才児ではまだ擬人化的傾向が相当強いが、六才児では、それらの傾向は著しく減少し、客観的な見かた考えかたに変わっていくことがわかる。

15 大学における知能、クレペリン、向性テスト結果報告

学習院大学 恒 吉 忠 康

一、知能テスト 昨年度は七九〇余名、本年度は八三三名の新入生につき、新制田中A式第二形式による知能検査を実施いたしました。その知能係数の算術平均は一二・六、分布の中心は一二・八、標準偏差は一・〇という結果を得ました。昨年度及本年度とも数字も分布のカーブの形もほとんど同様です。尚本年度の受験者は二六一一

名、採用一〇〇七名です。

二、クレペリン内田精神作業検査 一二〇型 被験者八三〇名、平均曲線は休憩前最高一分目五五・五、最低六分目四六・五、休憩後最高一分目五九・二、最低九分目五四・四。

昨年度、本年度を通じて共通に見られる現象は、

- (一) 平均曲線は同じ形、同じ高さを示す。
- (二) 作業量C以下の者はほとんど現われない。
- (三) 作業量が高いにもかかわらず疑問形曲線の出現率は減少していない。

四 初頭努力を欠くものが多い。

三、向性テスト 一昨年は榊原、昨年は田中、本年度は田中の診断性向性テストを使用しましたが共通して見られることは分布の中心が相当はつきりと外向の方へ偏っていることです。診断性向性テストでは思考的向性と劣等感についてその傾向が特にはっきり見られます。

16 WISC 知能検査の信頼性に

関する一考察

田中教育研究所 小 島 和 子

WISC 知能検査の信頼度については、すでに七才、十才、十三才について折半法により検定されているが、低年齢(五才、六才)の児童についても同様に折半法により信頼性を検討してみた。更にこれと平行してキューダー・リチャードソンの公式によっても検討した。折半法は、各下位検査及び言語性、動作性及び全検査について奇数と偶数項に分けて総計し、両者の相関係数を算出しこれをスピアマン・ブラウンの公式により修正した。線体的にみると、全検査は各年齢とも相当高い。言語性、動作性検査とも共に高く、動作性検査は言語性検査を上廻っている。又キューダー・リチャードソンの信頼

度検定法に従い、テスト項目の通過率と、その得点のS
Dより係数を求めた。折半法とは多少異った数値が得ら
れた。

各サブ・テストにおいて信頼度係数の高く出るもの、
低く出るものがあるので、これについて考察すると。

(一) 折半法とキューダー・リチャードソンの公式によ
る検定の結果得られた信頼度係数の傾向は概して平行的
である。但し全く一致しているというのではない。しか
し両検定方法は検定に用いる基礎条件を異にしているか
ら、従って検定の側面が違ふからであらう。今後、この
様な側面の違ふ方法から得られた結果の差異が、何を意
味するかについて究明したいと思う。

(二) 年令が進む程、一般に係数が高くなる傾向がみら
れる。これは常識的にも当然であるとは考えられるが、
更にその条件を考えると二、三の条件が考えられる。

(三) WISCの一般的信頼度については、従来の児童
に用いる諸検査の信頼度に比較して十分信頼度が高いも
のと結論する事が出来ると思う。

17 入学試験成績の予診性に

ついて(2)

日本大学 安藤公平

既に日本心理学会第十七回大会において報告した分
(昭和二二年から昭和二七年までの資料)以後の昭和二
八年及二九年分についての報告。入試に実施したテスト
の性質は次の通り。

昭和二八年度—進適は分類、文章完成、同意語反対語、
概算、推論、空間関係の六種を含む六〇問のスパイラル
形式、検査時間は五〇分。各学部共通。学力検査は、
文系学部では国語、外国語、社会二科目、理系学部では
国語、外国語、数学、理科で、検査時間は四科目含めて

八〇分。

昭和二九年度—進適は文章理解、空間関係、推理、類
比、計数及置換、間接記憶の六種を含み、下位検査毎の
時間制限法で、検査時間は合計六〇分。学力検査は実施
科目は前年度と同じ、検査時間は四科目で一二〇分。

これら入学試験の諸テスト成績(いずれも粗点)と、
大学における成業との関係を見るため、第一学年末の学
業成績との相関係数を算出。成業のクワイテリオンとし
て用いたものは、各学科とも八〇点以上は3、七〇点代
を2、六〇点代を1、六〇点未満を0とおきかえた段階
点の平均である。

結果 昭和二八年度、進適とのrは 文系(一四六
名)〇・四二九 医進(一二〇名)〇・三八七 工学部
(四一名)〇・五二八 短期(四一名)〇・六五五。学
力検査とのrは、文系〇・六六四 医進〇・六二四 工
学部〇・六四一 短期〇・六四七。而して進適と学力検
査との得点を同等にみて合計した場合に、必ずしも予見
的価値の増加を見い出さなかった。すなわち 文系〇・
五九三 医進〇・五九四 工学部〇・六二六 短期〇・
七四四。

昭和二九年度、進適とのrは 文系(一一一名)〇・
四三〇 医進(七七名)〇・三三七。学力検査とのrは
文系〇・四九六 医進〇・三三三。進適、学力の合計点
とのrは文系〇・五二三 医進〇・四二七となり、昭和
二八年度よりやや低い傾向。次に入試成績におけるAB
CDE五段階別に、入学後の学業成績(五段階)の割合
をみると、進適、学力ともにB以上の者の七三%(二八
年度)、六二%(二九年度)は成績もB以上で優れ、進
適・学力両者ともにD以下の者の六四%、六三%は学業
成績もD以下で劣ることが示された。

18 向性調査票P₂について

(第三報告)

津田塾大学 朴沢一郎

昨年七月、向性調査票P₂を使用して、全国に亘り中学
校生徒の向性を調査したが、今回は東京都内四〇校につ
いての結果を報告する。対象は一校あたり一二名(二、三
学年男女各三名づつ)について一集団としてとった向性
偏差値の最大のもの、最少のものを比較する。外向性
(偏差値最大)の群は、すべて教師の評価と一致してい
る。外向性に示し、答の平均値は外向点二八・
二 内向点六・七 無応答五・一を示し向性偏差値の平
均は六六・三四である。一方、内向性の群では、その一
七%が教師の評価と必ずしも一致を示さなかったが、八
〇%以上のものが一致を示した。此の群の平均値は外向
点一〇・二 内向点二一・七 無応答は八・一となり
偏差値の平均は三三・一五である。なお、両群の無応答
の差について平均値の差の検定をすると二・一四で(自
由度七八)〇・〇五の危険率で差は有意である。したが
って、内向性の群に無応答が多く見られることは、向性
偏差値に基いて内向、外向を区別した場合には有意であ
ることがいえる。

性別、学年別、地域別の違いによる中学生の向性傾向
については、次の機会に述べたい。

19 インストラクションの効果に

関する研究

東京教育大学 田中博正

ジョンウイズオールは雰囲気インデックスの発展と
して教師の陳述を七つの範疇に分けている。その一、

二、三は主観的、客観的基準で承認する場合、五、六、七は同様な基準で不承認する場合と考え、それらが生徒の行動に如何なる影響を及ぼすかを見ようとするものである。

本研究では集団内個人の作業量の変化に陳述の効果をしようとした。生徒を一施行五分間で一日二施行の加算作業を三日から四日行った平均から High (H) と Low (L) に分け、その各々について外向、内向に分け、又その各々について担任教師が前述の二大別した範疇の陳述を一施行五分間で一日二施行の加算作業を五日間連続して一組三人で八組合計二四名に対して行った。

ハーロックはこの種の実験で、賞讃の時最大の進歩を示すのは優秀組と比べて劣等組であるといっているが、この事実ははつきりと認めることは出来なかった。その後トムプソンとハニカットは向性で組を統制して、言語でなく用紙の端に印をつけてこの種の実験をしているが、外向は叱責、内向は賞讃の印をつけた時が一番作業量が増加することを述べている。印と陳述という違いはあるが、本研究の結果は、一般的に向性の如何問わず承認を与える場合は加算の作業量は増加し、反対に不承認では減少している。

更に H、L、向性に拘らず承認は作業量の増加に継続的效果をもち、不承認では初期には作業量の増加をもたらすが直ぐにその効果は減じ作業量の減少が見られる。併し初めの二・三日目頃では H で内向の場合、承認より不承認の方、又 L で内向の場合、不承認より承認の方が作業量が増加することでも分る様に、雰囲気インデックスとしての教師の陳述も生徒の個人差によって異なった効果をもつことが知られる。この事は集団の色々な質的变化過程の中にも個人差の問題が考えられねばならぬことを示唆している。

20 児童の学習指導法に関する教育心理学的比較研究(第三報告)

東北大学 小室 庄八

問題 この研究は前二回の研究から「児童中心の指導法は教師中心の指導法に比して知能の高いものにとつては有利であるが低いものにとつては不利な傾向がある」ことが見られたが、これは児童中心の学習に於いては知能上のものが中心となつて活動する結果、下位のものにとつて細目の理解が出来ずに引廻されるために起るものと思われる。この実験はこの点の検証のために行つたものである。

方法 一学級の児童から知能指数一一〇以上の者を除き、残りを二分し(その際男女別、知能、国語成績、交友関係、家庭の社会的経済的地位について有意の差が認められないようにする)一方の組に知能上のものを加えて二学級をつくつた。更に各級を知能度を考慮して五班に分けた。知能上のものはその級の各班に一名又は二名づつ加つた。両学級とも同一教師が国語を児童中心の指導法で行う。一方が国語のときは他方は算数の指導を教師中心の指導法で他教師が行う。各級指導時間八時間。テスト一時間。評価は(一)テスト、(二)五人の教師による観察、(三)指導教師による観察の三方法で行い、知能指数一一〇以上の者を除いた児童群について比較した。

結果 テストの結果から実験級(指数一一〇以上を加えた級)は他の級の成績より下廻っている。又成績の低下は中間児に多くなっている。観察の結果から自発的興味、協力的態度、班内発言数に於いては差が見られないが、リーダーシップの数に於いて実験級が少くなっている。指導教師の観察をまとめて見ると実験級に於いては班内がリーダーによって統一されていて(リーダーは主

に知能上位のもの)活気があるが出来るものと出来ないものの差がはつきりしている。他方は反対に出来るものと出来ないものの差が少く協力的である。

要するにこの実験を通じて検証の目的は十全ではないけれども達し得たものと思う。

21 賞罰と学習

——特に診断性向性検査との関係——

日本大学 駒 崎 勉

本実験は個体の向性と覚醒の関係を加算テストにおける効果によって見たものである。また向性も社会性、思考性、劣等感、神経質、感情変易性の五因子から構成されていることから本実験でも診断別に社会性、劣等感、神経質の三因子だけ取上げ賞罰効果を見ることにした。すなわち、一九五四年一〇月、神奈川県葉山中学校生徒全員六五七名に田研式診断性向性検査を実施し上述の三因子について、内向外向性計一五三名、正常四七名を抽出した。これらにその後三日間単純加算テストを実施し四日目からこれを各向性グループ別に無作為で賞、罰、統制群(無刺激)の三グループに分ち再び三日間同様に加算テストを行った。この間、賞グループは作業成績のいかに拘らず口頭および同校内に掲示して賞賛し、罰グループは同様の方法で叱責し、統制群には刺激をなるべく与えぬよう放任した。なお最終六日目には被験者の性格についても同様の方法で賞賛と叱責が加えられた。結果は次のようである。各グループの作業量が六日間記録されたが、内向性について見ると、神経質、社会性ともに統制群の成績がよく次に賞グループで罰の場合著しく下降する。劣等感では賞を与えられた時は向上し、罰では下降する。外向性のばあいは非神経質グループは罰を与えられると成績は向上し次に統制群で最後が賞の

順である。劣等感因子の外向（優越感）のものは社会性外向と同様に賞、罰何れが与えられても成績は向上する。しかし統制群はよい成績でない。一般的な傾向としていえることは外向性群は賞罰の効果に差が少いこと、内向性群は賞により最高四五%も成績向上し罰では七%の練習効果しか見られず、統制群が六〇%もの向上を示すなど刺激による作業成績の変化が大きいこと、そして賞よりむしろ放任がよいことである。もちろん賞罰の力動的メカニズムは複雑ではあるが一応賞罰は与えられる個体の向性によって効果が異なるといえるよう。

22 教師の得意学科と児童の興味

埼玉大学 金子 保

研究目的 現在小学校においては全教科主義がとられているが、教師が全教科に対して同じ様に、知識・技能・興味をもっているとは限らない。この点から、教師自身の得意とする教科が児童達の教科への興味にどの様に影響するかをみようとした。

方法 小学校における全教科名、並びに、好ききらいに対して予想される理由群を記入した質問紙によった。教科の好ききらいな順位を順に記入させ、一番好きな教科と一番きらいな教科には理由を附させた。調査月日は昭和三〇年四月一二日。

研究対象 附属小学校四年生、五年生各三クラスである。四年生は一年から三カ年間、五年生は一年から四カ年間、同じ担任教師により、クラスの編成がえもなく生活して来たものである。六名の教師の得意教科は国語二名、社会、算数、体育、工作各一名に、国語のうち一名は習字をも得意とするため合計六教科である。六名とも男子教員である。

結果 (1) 社会、体育、算数は男子が、国語、習字は

女子がより好む人数が多いのであるが、その教科の得意な担任によってより好む人数を増加する。

(2) 国語、習字においては男子が、社会は女子がよりきらいな人数が多いのであるが、これを得意とする担任においてはきらいな人数をなくするか又は減ずる。

(3) (2)の場合きらいな人数は影響を示すが、好きな人数の増加はみられなかった。

(4) 体育について男子はより好きな人数を増すが女子には変化しない。同様に算数の場合も男子には好む人数増加をみるが女子はきらいな人数を増加した。

(5) 工作については全く差がみられない。

(6) 理由に対して、教師による影響をはっきり示す項目はきらいな場合では全くえられず、好きな場合は教師の得意教科が一番好きだとする児童の一六%、それ以外の教科が一番好きだとする児童の一〇%がえらんだ。

23 学科の好悪とその原因

—— 第一回報告 ——

茨城大学 磯貝信太郎
○中原 弘之

要旨 学科の好悪傾向が性別によってどのような影響を受けるかをみることにした。

調査対象 茨城県水戸市を環境の異なる三区にわけ、各区から一校ずつW、S、Jの三つの小学校を選出し、五年六年の児童（男二九六名、女二六一名、計五五七名）を調査した。

調査期間 昭和三〇年六月一日～二四日。

調査方法 社会・国語・算数・理科・図工・体育・家庭・音楽の中、最も好きな学科と最も嫌いな学科を二科目づつ、質問紙法により自由選択せしめ、その理由をも書かせた。

結果 (1) W、S、J校全体の結果に基づく場合

学科全体の好悪傾向は性別により差があることが、

○・一%以下の危険率で認められた。

社会・体育・理科・図工をA群、音楽・家庭・国語をB群とした場合、A群は男に好まれ女に嫌われる。B群は女に好まれて男に嫌われることが、○・一%以下の危険率で認められた。算数は特殊な好悪傾向をもっているので一応この検定から除外した。

次に各学科毎の好悪傾向と性別との関係を見ると、算数は二%以下、他の学科は○・一%以下の危険率をもつて有意の差が認められた。

(2) 学校別の結果に基づく場合

学科全体の好む傾向と学校別との間には、女にのみ差が認められた（五%以下の危険率）。さらに検定の結果、J校の女に特殊な好悪傾向が認められ、他のS、W校では認められない。

そこで各学科毎に好む傾向を見た結果、算数は○・一%以下、家庭・体育は各々二%以下の危険率をもつて有意の差が認められ、特にJ校の女が、他校の女に比して算数を著しく好んでいることが目立つ特徴である。

結論 以上の如き結果より、次の結論に達する。

男に好まれ、女に嫌われる学科—社会・体育・理科・図工。女に好まれ、男に嫌われる学科—音楽・家庭・国語。性別による好悪差のつかぬ学科—算数。

24 左手利きと学力

鳥取大学 安田 春 弥

目的 左手利きの者の学力に何か一定の傾向が示されるかを検討してみた。

方法 調査対象は小学校第三学年から第六学年まで六二二名と中学校の各学年七六五名、計一三七七名の児

童生徒。

手続き 質問紙法による。利き手決定のためには、(イ)文字を書く時鉛筆を持つ手、(ロ)鉛筆を削る時ナイフを使用する手、(ハ)ボールを投げる時ボールを持つ手の三項目が調査された。次に左利きが手に於ける単独偶然の傾向であるか或はその個人を支配する優勢な特質であるかを確かめるために利き足利き眼の調査を重ねた。利き足決定は(イ)片足とびをする時よく使用する足、(ロ)走巾跳(走高跳)をする時踏みきる足、(ハ)下駄(靴)などをはく時最初に差出す足によって確かめられた。以上の諸動作は原則として先づ実験者の指示によってやってみることにによって決定された。利き眼の決定方法は古はがきの中央にあげられた穴を通じて前方の対象を認めた後(はがき固定)何れか一方の眼を蔽い対象が認めえないならその眼を以って利き眼とすることによって。学力は算数、国語、(英語)、音楽、図工、体育の各教科について担任のなした評価を参考とした。

統計処理 手足の動作は左利きの完全さの程度に従って品等評価し、前記各学力と手(足、眼の各々、又両者と結合の夫々に於て)の相関係が確かめられた。次に夫々の場合に於ける最も程度の重いと最も程度の軽い者との間の学力差の有無が検定された。(信頼し得る相関がえられなかったから)

結果 相関係は小学校・中学校を通じて左利き手、左利き手と左利き眼又は左利き足、左利き手と左利き眼と左利き足いずれかと各学力との間にも信頼し得る結果はえられなかった。

手(足・眼との結合関係は前記の通り)の左利き傾向の最も重い者と軽い者との間の学力差も亦有意な数値を示さなかった。

25 学級内児童・教師関係の研究

——教師に対する児童の一般的要求と現実的認知による分析——

愛知学芸大学 相川 高雄

目的 学級内において、児童・教師関係がどのような特性を持っているかを明らかにするために、児童の一般的要求と現実的認知に対する認知構造とを対応させ、その偏向を把握するとともに、児童の能力・性的差異が、教師の人格・資質などといかなる関係にあるかを探ろうと試みた。

方法 教師の人格・資質などを積極・中性・消極的判断のそれぞれで記述してある調査票(A)(四三項目からなる)と、このうちから二〇項目を抽出して、これを三段階の記述尺度に配列し、調査票(B)としたものを小学校児童四、五、六年の男女二六六人に与え、(A)「B」とともに3、2、1の配点により得点化した。

結果 (1) 児童の教師に対する人格的・資質的要求の程度は、能力により顕著な差はないが、優れた児童(H)ほど要求度が高く、劣った児童(L)ほど低い。

(2) 現実的認知においては、能力により差が見られる。(H)では、教師の教養・研究・指導法に、(M)(能力中位の児童)では、生活指導・性格・接合・取扱いに、(L)では、服装・健康・音声について認知度が低い。

(3) 一般的要求と現実的認知との偏向はH、L、Mの順であり、女子よりも男子にこの傾向が著しい。

(4) 一般的要求度と現実的認知の偏向は、児童と教師の接合・取扱ひ・態度に高く、指導法・生活指導・性格などもこれに次いでいる。

(5) 学級内の児童の担当教師に対する現実的認知度

は、それぞれの学級内において、能力のH、M、Lで共通の傾向を示すというよりは、Hでは認知度が低いMで高く、Mで低いLで高く、Lで低いHで高いというように、能力差によって認知度が異なっている。

26 集団学習に於ける協力に

ついて(三)

愛知学芸大学 田中正一

目的 最近集団学習(分団学習)の問題が注目されている。そしてこれによって児童、生徒の個別化と社会化とを同時に果そうとする新しい傾向が見出される。本研究に於ては集団学習(体育に於ける)の場を通して集団の発達過程に於て児童、生徒の協力が如何に変化し進展するかをみて新しい体育指導の基盤とし、更に体育の教材評価に役立てようとして、先に中学生を対象としてリレー及びバレーボールを行って実験したのであるが、今回は小学校児童に於ては協力的な身体活動の場を通して年令的にどのような発達過程をとるか、即ち発達のこれを見ようとしたのである。

方法 (1) 対象 愛知県渥美郡豊南小学校 一、三、五年三六名(男子)

(2) 等質集団(A)……六名、異質集団(B)……六名をえらび、ゴールハイスの練習及びゲームを行って、これを観察法と質問紙法とによって研究してみた。

結果の考察 ボールゲームに於ける協力的な現われであるパスについてみると、一年では全然見られず、三年では一試合中に一回も見られ、五年に於ては更に増加する。シュートについては、一年はシュートする時邪魔されない方がよい者六三%、三年では邪魔された方がよいとする者六六%に増加している。又ボールが外に出た場合に一年は一人だけ外に拾いに行き、三年は二、

三人協力して動き連絡をとろうとし、五年になるとボールを拾う事にチーム全員が関心を抱きパス連絡の都合のよいところに待っている。

以上の諸点より考察して一年は個人目標に終止し協力は殆んど行われず、三年では集団参加の意識が強くなり、自己を主張し協力は分離的に二、三人に行われる傾向が見られ、更に五年ではチーム全員が共同目標に向って協力している。等質集団より異質集団の方が協力の立場からみればより効果的な傾向が前実験と同様に見出される。

27 学級集団の研究 (第一報告)

名古屋大学 ○塩田 芳久
大橋 正夫

目的 学級編成時において、けん著に異なった構造をもつ二つの学級を作り、それらが指導の条件をほぼ等しくする場合、時間経過にともなう、どのような特徴ある変化をたどるかを、(1)集団構造上の変化 (2)所属する個人のその学級に対する感想上の変化 (3)所属する個人の学習成績上の変化、という三つの側面から明らかにする。

実験計画 学級編成——集中型(分団結合型または中心への集中型)の学級(E組)、相互選択型(対型または無中心型)の学級(D組)を各一学級ずつ作り、これを実験群とし、他を統制群(A・B・C・F組)とする。全学級とも知能・学習成績・向性・男女数はほぼ等しくする。指導の条件——教科の指導教官は少くともD・E組は同じであること、学級担任教官の資質・能力・性別もできるだけ等しくする。ホーム・ルーム、課外活動等の指導も同一の計画のもとに実施するなど可能な範囲内において指導条件の齊一をはかる。測定——ソシオメトリ

(毎月一回)、質問紙による感想調査(四回)、標準学力検査(各学期末三回)、学級生徒会(討議)の観察(二回)各教官の学級ふん囲気に対する印象調査(一回)。記録——各学級の指導記録、とくに集団活動に関する記録。被験者と期間——四日市〇〇中学校二年六学級、昭和二十九年三月から三十年二月末まで。

結果 構造上の変化——ソシオメトリの選択一致度の推移では、E組がもっとも変化少く安定している。D・Aの間には大差ない。感想調査——現在の学級を「よい」とするものは実験群に多い。時間経過にともなう実験・統制両群の差は縮小する。D組は「よくない」方向に変化する傾向を認める。標準学力検査——実験・統制両群の間にも、またD・E両学級の間にも有意な差異を認めない。

以上から、(1)E組(分団結合型)がもっとも変化少く、感想調査の結果もよい、(2)D組は当初の感想はよいがその後は統制群と大差なく、終期には編成替えを希望するものが多くなるといえるが、一般的な結論を得るためにはなお研究を要する。

28 青年の相補的交友結合の発達の研究

福島大学 徳田 安俊

青年の交友結合要因として従来交友間の類似性の面が多く研究されているが、自分に欠けている点を友人によって補おうとする相補的交友結合が青年期には強くあらわれる。相補的交友結合がパースナリティのどういう面にあらわれるかを、青年前期・中期・後期にわたって発達の研究した。

調査の方法としては、十四の特性について五段階品等法によって本人と親友とを同一のスケールの上に品等せ

しめた。そして各の特性において本人と友人の違いの程度を一段階差を一点として数値化し、十四の特性の段階差の合計を以て個人の相補点数と名づけた。中学生・高校生・大学生の男子及び女子夫々二百名のうち、相補点数の大きいものから順に五十名を相補グループ、最も小さいものから五十名を類似グループとして、この両グループのパースナリティを比較した。即ち各特性毎に、本人自身の特性の三段階における分布のしかたが、類似グループと相補グループとでどういう差があるかを χ^2 検定によって検討した。

その結果(1)「ユーモア性」以外すべての特性に相補的傾向があらわれることがわかったが、中でも「人気」・「社交性」・「熱心」の特性は相補的傾向の最も顕著にあらわれるものである。(2)自己否定傾向の強い青年が相補的結合を求める。即ち無口・陰気・不熱心・気分易変性の強いもの、非社交的・非活動的で人気がないと自ら考えている者が相補的結合を求めている。(3)青年期の時期によって、相補的結合のあらわれる特性に変化がみられる。前にあげた「人気」・「社交性」・「熱心」は青年期全体を通じて相補性がみられるが、「神経質」・「支配性」・「自己主張」・「多弁」における相補結合は青年期の前半にあらわれる。それに対して「大人らしさ」・「身ぎれい」・「陽気」などの特性の面での相補的結合は青年期の後半にみられる。

29 友人関係の継続及び消滅

兎 玉 省
堀井千鶴子
日本女子大学 ○松本 伸子

現在の二十才、三十才、四十才の人達は何人位友人を持っているかを、調べたが、三十才四十才代の女性を除

いては、友人数五人の者が多く、三十才四十才代の女性
は、友人数三人の者が一番多くなっている。但し一般的
傾向としては若い者程友人数が多い。又異性の友人は同
性の友人に比べて、ずっと少くなっている。

第二にこれらの友人関係は何時頃発生し、どの位継続
しているであろうか。この点については幼少時より継続
せる友人は比較的少く、多くの人は青年期に友人を得て
いる。二十才代の人は、男女共高校・大学時代、又職場
に入つた人は職場で得た友人が多くなっている。三十才
四十才代の傾向も殆ど同じで、男性は青年期より続く友
人が多いが、女性では女学校時代より継続せる少数の友
人を除いて、ごく最近、P・T・Aとか隣近所とかその
他家庭的関係で出来た友人が多い。男性の友情関係の方
が女性のそれより継続期間が長く、又異性間の友情は同
性間の友情関係に比べて、概してその継続期間が短くな
っている。

第三に友情関係の消滅について検討したが、年令の点
より見ると、失つた友人との交友期間は二十才代に於て
は二年間が最も多いが、四十才代の人の場合は、全体的
に長くなっている。対異性との友人関係は同性のそれに
比べていつも短く、又女性の交友期間は男性に比べ短く
なっている。

友人を失つた率は年令の上昇と共に増加して各年代
共、過去に於て得た友人の二五〜三五%を失っている。
そして二十才代三十才代では、親友を一人失つた人が四
〇〜六〇%あるが、年令の増加と共に二人失つた人が最
も多い。又、友人関係を消滅させる理由としては、年長
者では死亡とか、転居などが多いが、年少者では感情的
原因のけんか、及び性格の相異などがあげられている。

30 成人の親友関係

——親友成立の理由と親愛度——

児 玉 省
日本女子大学○井 本 博 子
登 倉 京 子

青年期から後四十才以上に至る者の友人数、その友情
の継続期間、友情関係の変動、友情の成立理由などを検
討しようとした。二十才代から四十才以上の者約千二百
名(男女約半々)に対して行つた質問紙法に依る研究で
ある。親友成立の可能的理由を挙げて、その項目中該当
する項目に幾つでも印をつけさせ、その印の数即ち反応
総数の和をもって各理由項目の和を除いた。この数字は
各親友成立理由のウェイトを示すものと考えられる。

二、三十才代迄は男女共に、一位「学校が同一」(約二
〇〜三〇%)、二位「性格的魅力」、三位「趣味が同一」
という順位になつてゐる。然るに四十才以上の男子にな
ると「学校が同一」という理由は依然継続しているが、
前述した理由よりも「職業が同一」という理由が進出し
てくる。女子の場合四十才代以上では二、三十才代の理
由とは凡そ異り、「近所同志」、「家庭同志親しい」とい
う理由に変わってくる。次に親友関係と親子・夫婦などの
親愛関係をみるために各人に「最も親しい人」を指示し
てもらつた。その結果を前と同じ様に各項目毎に(例え
ば父・母・妻・子・友人など)和を求めて、反応総数を
もつて除し、各項目毎のウェイトを求めたところ次の様
な数字を得た。この数字は各年令群毎に、父・母・妻・
子・友人などの項目が親愛度に於いて持つてゐるウェイ
トを示すものと思われる。年令群毎の親愛度(最も親し
い)は次の通りである。(数字は%)

十代男子学生 父 一四 母 一九 友人三〇

十代女子学生	父 二八 母 二五	友人一七
二十代男子学生	父 一五 母 一八	友人二〇
二十代女子学生	父 一四 母 二一	友人二三
二十代男子	父 一一 母 一九	友人二七
二十代女子	父 一二 母 一九	友人二一
三十代男子	母 一二 妻 二六	子供二四
三十代女子	母 一一 夫 三四	子供二二
四十代男子	友人一四 妻 二七	子供二〇
四十代女子	友人一二 夫二五・四	子供二五・二

31 養護施設児童の

IQ変動について (一)

近畿大学 山 田 久 喜

目的 養護施設と云う限定された環境に生活する児童
のIQの変動の様相を捉えることによつて、児童の精神
発達過程を究明し、養護施設に於ける指導方法に参考
資料を供するを目的とした。

手続 養護施設収容児童について、経年的に知能検査
を課しIQを求めた。使用した知能検査は学童以上には
I・A団体知能検査を、幼児には鈴木・ビネー法を用い
た。被験者は二年より一六年にわたる男子三七名女子三
二名計六九名で学童は施設所在地の小・中学校に通学し
てゐるが、施設に於ける指導は充分にされてゐない。

結果 I・Aテストの結果では、一年二年三年間隔の測
定では、前後の相関係数は夫々 〇・五四、〇・七七、
〇・五二であり著しい正の相関を示し、IQの平均の増
加は僅かであつて、その有意性は認められなかつた。十
年間隔では前後の相関が〇・二六と低くなり、IQ平均
の増加は八・一二と大きい有意性は認められなかつた。
他方鈴木・ビネー法に於ける結果では、一年二年三
年間隔では、相関係数は夫々 〇・四四、〇・六七、

○・五一と相当著しい関係を示したが夫々のIQの平均の差が何れも有意性を示さないことはAと同様であった。各間隔に於ける個人のIQの絶対値の変動はAでは一一以上の変動が二五%及至三〇%であるのに比し、鈴木・ビネー法では二四%及至四五%と動揺の大きい比率を示していた。

更に特に顕著な傾向として付言したい事は、AテストによるIQと、鈴木・ビネー法によるIQの間に大きい有意差が認められた事である。

結論 以上の結果より、養護施設収容児童に関してIQの変動については、三年程度の間隔であれば、自己相関は相当あり、IQの増減も士一〇以内の変動を示す者が七〇%程度でIQの恒常性が考えられるが、使用テストによって、IQに大きい変動が予想されるから、その点の探究が今後の課題として考えられる。

32 精神薄弱児施設における児童の適応状況の調査

東京大学 三木 安正

昭和二九年度の厚生科学研究費による「精神薄弱児処遇の判定基準に関する研究」の基礎調査の一つとして、標記の調査を行った。

精神薄弱児施設六三ヶ所に対して発送した質問紙は、三六ヶ所から回答されてきたが、その中で「児童の適応状況」というところについての結果を報告する。

調査は児童の特徴をあらわす項目、男女、満年齢、IQ又は偏差値、診断、推定原因、入園経路、家庭、身寄りの来訪、健康、身体的欠陥、体力、学力等と、施設における適応状況を示す項目、情緒的安定、問題行動、担任者との関係、同室の仲間との関係、同室の仲間との結びつき、グループでの役割、規律、作業（能力）

（態度）取扱いの難易、進歩（生活態度）（技能）将来というようなものを選び、各項目を評定基準を示して、A、B、Cの三段階に評価してもらった。評価された児童は一九〇四名である。

適応状況をしめす項目と個人的特徴を示す項目の間及び他の調査項目例えば居住条件、指導者の類型などの関係を検定によつて求めた。そのうち情緒的安定を例にとれば、一パーセント以下の危険率で相関ありとされたものは次のようなものであった。

男女（AとCは男に多くBは女に多い）年令（一二才が安定度が高い）IQ（高いほど安定）健康体力（よいものほど安定）実働職員一人当り児童数（五人未満がよい）児童一人当り居室の坪数（一坪半以上がそれ以下のものよりよい）担任者の型（教育型、愛情型、お守型、しつけ型と分けると愛情型が安定、ただし、問題行動は愛情型に多い）クラスの人数（一〇以下でも二人以上でもわるい）クラスの男女別（男女混合はわるい）クラスの知能別編成（大きなひらきのあるもの及び接近したものより、やや混ったものがよい）クラスの年令別構成（年令差の大きいものより一二才のグループがよい）学習時間+作業時間（三時間半以上というのはわるい）等である。

33 精神薄弱児のヒューマン・リレーションに関する動態の研究（一）

京都大学 正木 正
○田 中 昌 人

精神薄弱児が義務教育終了後、家庭及び職場で適応している姿の現象的類型化と適応像形成因子の分析を行い、更には適応像の原因的類型化を試み、指導のあり方にも寄与したいと思ひ一連の研究をはじめた。

昭和二九年度現在滋賀県で義務教育を終え一五〜二〇才になったIQ七〇以下の一四〇九名を対象に個別的面接調査を行ったが、七三六名について適応像の現象的類型化の第一段階をおえたのでここに報告する。

調査・整理を通じて家庭・職場で彼を囲む人間関係のあり方とそこで示す本人の適応の仕方に重点をおき、それに将来の見通しも加えて、単なる項目毎の集計でなく総合的適応像の把握に努めた結果、大きく八個の類型を見出し、移行型として幾つかの亜型分類の見通しを得た。八個の類型とその頻度を示す。

第一型（家庭・職場でよく理解され生き甲斐を感じて生活しているもの）三〇・二%

第二型（家庭・職場での取扱いは常習的だが本人は何とか適応している）三一・六%

第三型（家庭の理解に問題があるが職場でよく理解され明るい見通しのもの）八・六%

第四型（家庭・本人には問題が少いのに職場の理解に問題があるもの）二・〇%

第五型（本人よりも家庭・職場における理解の仕方に問題の多いもの）六・三%

第六型（家庭・職場は本人に対して理解があるが本人の性格面に問題がある）六・三%

第七型（本人・家庭・職場共に問題の多いもの）一・三・三%

第八型（家庭・職場に問題があるが本人に耐性の出来ていないもの）一・四%

更に在学時代交友関係中で示していた適応像との間には相当の変化をみた。変化の要因として仕事の場のもつ意味の重要性を認めたが、尚この条件分析は適応像の客観化と共に今後に残された問題である。その他就職状況に関する統計結果も出ている。（本研究は昭和二九年度厚生科学研究補助費の交付をうけた。）

34 聾児童、生徒の言語能力(その三)

日本大学 森 一 司

聾児童・生徒の言語能力特に助詞の使用状況、誤用並にその原因についての一聯の研究であつて、前回は助詞充填文章完成テスト試案について報告したが、今回は二、三の点を改訂した完成テスト私案を用いて聾児童・生徒および正常聴力児童・生徒の助詞の使用状況、誤用についての比較研究を報告する。

実験は昭和三〇年六月〜七月にわたつて行われ、聾群(D群)は神奈川県下三校の聾学校五、六、中学一、二、三、高等部一、二、三年の二三六名、比較群(H群)は五、六、中学一、二、三年の二七三名が被験者となつた。

Mおよびσは、H群、M三四・四 σ五・七、D群、M一四・〇 σ九・一(三九点満点)である。この差は有意の差であつて、この程度の完成テストに於ては正常小学校五、六年で充分理解でき、助詞の表現が充分できるに反し、D群では文章の読解、理解力の不充分と助詞表現の困難を示している。D群の充填の困難であつた助詞は、「し、まで、でも、ほど、たり、のに、も、だけ、か、と、くらい、ばかり、しか」である(誤答率八〇%以上)。D群にとり比較的易しかった助詞は、「で、から、ので、が、は」である。次にどの助詞をどうまちがえやすいかといへば、「より」から、でを、にが、のに、から、ので、まで、から、ばは、で、で、で、に、が、は、と、が、へ、を、と、は、を、か、が、も、で」などである。この結果はさきに報告した作文分析からえた結果と同様な傾向がみられ、助詞の誤用には、誤に規則性のようなもの即ち、この助詞はこうまちがえ易いということが言えようである。在学年数との関係、

知能との関係、残存聴力との関係、失聴年令との関係などは積極的な関係がみられたが、別の機会に報告する。

35 盲児の研究(十二)

質問紙法による盲児の

パーソナリティの研究(その一)

東京教育大学 〇佐藤 泰正
都立文京盲学校 村中 義夫

質問紙法による盲児のパーソナリティの解明を目的として、現在我国で標準化されているテストから、できるだけ多くの性格特性(トレイツ)が把握されるように次のテストを選んで(点訳)実施した。【適応性診断(長島・山崎)、情慮不安定(大伴)、性格検査(牛島)、乙式向性(柳原)、キプラーの自己診断表を加え計三二二問】。被験者は盲児二〇〇(男一二九、女七一、うち二〇名は大学相当、他は小四〜中三)と正常児一〇〇(男女各五〇、中一〜中三)

結果 視力程度を正常、弱視、準盲、全盲に分けると障害の度がまずにつれて、適応が悪くなる。異常傾向では視欠グループ(弱・準・全)が正常に劣る。神経質、退行的傾向は全盲が他に比して悪い。自尊劣等、自己統制、社会的技術、統率性、学校関係、向性、回帰分離、では四グループの間に差がない。家庭関係では準盲がいからか悪い。近隣関係は正常弱視が準盲より優る。道徳性、情意不安定では正常が最もよく、準盲、弱視がこれにつぎ、全盲が最下位。発達につれてよくなる特性は異常傾向、自己統制、社会的技術、家庭関係、学校関係、道徳性で、悪くなるのは退行的傾向、変化しない特性は神経質傾向、自尊劣等、統率性、近隣関係、情意不安定であり、また発達に伴つて内向的になる。失明年令が高くなるにつれて悪くなる特性は異常傾向、神経質傾向、

退行的傾向、学校関係、情意不安定で、変らないのは自尊劣等、社会的技術、道徳性である。よくなる特性としては自己統制、統率性、家庭関係があり、また、盲であるという自我意識は後天盲に目立った。性別ではほとんど差が現れない。強いていへば女子がいくらか適応がよい。女子にいくらか好ましい特性は、社会的技術、道徳性、で、男子がよいのは神経質傾向。居住環境では、家族関係以外の特性で自宅通学組が学寮組より好ましい適応を示している。顕著な差は神経質傾向、情意不安定、統率性、学校関係にみられた。また、一般に欠損家庭の盲児は適応が悪い。(本研究は昭二九、文部省科学研究費による杉田裕ほか「特殊児童の社会的適応に関する研究」の一部である)

36 盲児の研究(十二)

質問紙法による盲児の

パーソナリティの研究(その二)

東京教育大学 〇佐藤 泰正
都立文京盲学校 〇村中 義夫

一般に標準化されているパーソナリティ・テストを盲人に実施する際の問題点を大きく分けると、(1)実施方法および(2)項目内容の妥当性の二になる。本研究は主として後者の問題を取扱ったものである。方法は内的緊一性の検定によるテスト項目の理論的な妥当性の吟味を行い、対象には「盲児の研究」(その一)に用いたテスト(キプラー診断表を除く)の全項目に対する正常児一〇〇名、盲児一〇八名の反応を使った。

結果を要約すれば次の如くである。
(一)一般に標準化されたパーソナリティ・テストは、これを盲児に実施するに当り、相当多くの不適当な項目を含んでいる。

(二)これら妥当性の乏しい項目には、(イ)テストの構造そのものに原因があるものと、(ロ)盲人に特有な諸条件に依るものと二種がある。

(三)テストの構造そのものに原因するものは更に、次の三点が考えられる。(イ)項目に対する被験者の反応が極度に一方に偏するもの。(ロ)その項目によって設定される場面が異なるに従って行動の現れ方に差異を生じ一義的に反応を決定しにくい為、「でたらめ」反応を生じたもの。(ハ)テストの表題によって示されるパーソナリティ特性が必ずしも単一純粋でないこと。

(四)盲人のみに特有な条件としては、(イ)直接視力障礙に附随して起る身体的徴候および行動の制限。(ロ)答えにくい問題に対して示される盲児特有の反応態度。(ハ)face to faceの対人関係において示される盲児の過度の感受性。が関係すると考えられる。

結論として、個人差をみる本来の目的を果す為に盲人用パーソナリティ・テストが標準化されねばならない。

37 Identification と Adjustment

の発達に対する関係について

信州大学 原 善 平

題目の説明

(一) 人間の発達にとって重要なものは行動である。すなわち人間の発達はどういう行動をするにかかっている。導くものと導かれるものとの関係からいうと、導くものが導かれるものにどういう行動をさせるかということになってくる。このことは子供にどういう環境的刺激を与えるかという問題になってくる。ここでは一つの環境的刺激である言語について考えてみる。

(二) われわれは社会に住む個人であって、言語をつ

かって交わっている。それで社会について、個人についてどう考えるのがよいかを言語によって語ってみることは重要なことである。というのは社会と個人は発達すべき方向をもっているからである。

(三) 社会、個人をその方向へ導いてゆくときに、言語は重要な役割をするが、この際考えねばならぬことは、導くものの状態と導かれるものの状態である。それは言語は二つのものの間をとり結ぶから、また言語は、それを発するものの状態と密接に関係しているが、これを受けるものの状態に合せて発しなくてはならないからである。この事を考えるには Identification と Adjustment とをもつてきて考えると具合がよい。Identification は Identify oneself with であって、導くものと導かれるものとの関係をあらわしている。これによって、導くものは導かれるものの状態に一致しそれを把握し、それをたてるのである。つまり、Adjustment は adjust oneself であって、これも導くものと導かれるものとの関係をあらわしている。導くものは、導くべき方向へ導かれるものの行動が向うように言語を発しなくてはならない。導くものの導くべき方向が確立しており、導かれるものの自己指導の方向がそれへ一致し、その二つが相互的に作用して向うべき方向へ力強く前進することによって、教育の効果があらわれるのである。Identification と Adjustment は教育の目的へ向って子供を導く際に重要な方法的原理となるのである。

38 性格と行為

山口大学 亀井 定 雄

ある一つの行為には、常にその基底に、性格的要因が横たわっている。本研究は、それ自体としては価値的な内容を意味しない性格が、価値的な事象であるわれわれ

の行為の上にどのように影響するかを研究しようとするものである。

そこで、本研究は田研式診断性向性検査を用いて、向性を決定する各因子、即ち社会的向性・思考的向性・劣等感・神経質・感情変易性の五因子を別々に測定し、性格の方向を診断し、併せて「児童指導要録」中の「行動の記録欄」の行動特質二二について行動評価を行った。次にこの行動特質二二の各々と向性決定の各因子との関係を見る目的で、診断性向性検査の結果につき各因子共向性偏差値五五以上を外向性、四五より五四までを両向性、四四以下を内向性として三段階に分類し、この三段階の各々と各行動特質における評価（これも上中下の三段階に評価した）との相関を見るために配分係数(C)を求めた。(小・中・高・大学生計七二五名を対象とし昭和二九年九月～三〇年二月に実施。行動評価は小・中学校は教師評価、高・大学生は自己評価による)。

この結果、外向性は対人物的な行動面に優れ(社会的向性の因子と関係が深い。この外、思考的向性や劣等感の因子とも積極的な関係があり、やはり対人的行動面に優れている。ただ小・中学生の場合、思考的向性の因子ではこの傾向が見えないが、これは評価法の相異によるものと思われる。劣等感の因子では、社会的行動のみならず他の行動面でも外向性が優れている傾向があるが、感情変易性の因子では内向性が多くの行動面で優れている。思考的向性の因子では、個人的行動面で内向性が優れている(特に小学生)。次に、神経質の因子は普通内向性の短所と見做されるが、道徳性の面ではむしろ長所となっている場合が多い。最後に、発達の条件が問題になるであろうが、評価法の一貫しない本調査ではこの点明らかでない。しかし大体からいって上に見てきた傾向は各発達段階を通じて共通するものと見るべきであろう。

39 音楽家の精神反応曲線型

(第二報)

国立音楽大学 佐 瀬 仁

I 一九五三年の第一五回大会において、音楽学生から得た内田クレペリン作業曲線を音楽科、ピアノ科、ヴァイオリン科に分け、各々が示す曲線型の特徴を見ると体格型において音楽科生は斗士型、ピアノ科生は肥満型、ヴァイオリン科生は細長型であるように思える、と一報した。

II その後、上記仮説を検討すべく継続的に資料を採集しているが、その整理中に、音楽部門において優秀な成績を収める者たちの示す作業量につき、次に述べるような共通の事実があることを発見したので、今回は曲線の型よりも量の問題に焦点をおいて報告する。

III 被験者イ 国立音楽大学最近四カ年間の卒業生中成績優秀の者七名(音楽、男二、女二。ピアノ、女二。ヴァイオリン、男一)

被験者ロ 東京学芸大学音楽科三・四年生二五名(男六、女一九)

被験者ハ 芸術大学音楽部附属高校生五二名(男一九、女三三)

以上三つの被験者群の各々から、更に成績上位者を二名づつ選出、その作業曲線を研究してみると、それらの全てが内田式テスト評価法でいうところのA円段階(休憩前作業量平均五五以上、休憩後作業量平均六五以上)の定型曲線であった。

比較研究のため被験者ニを選んでテストを実施したがそこにおいても同一の結果を得たのであった。

被験者ニ 大塚信子 二二才、高校卒、F会社電話交換手、昭和三〇年三月二日 第八回NHKのど自慢全

国コンクール、歌曲の部一位入選。

IV 四つの被験者群が示した曲線型の間に見られる一致は偶然のものではないと考えられる。つまり、感受性の高さ、精神運動の速さを必要とする音楽活動に適する者のもつ精神作業素質が本テキストの上には既述したような「すがた」で現れるものである。

40 社会的共感性の変容

東京学芸大学 田中熊次郎

目的 学習による人間関係の発達において、複数行動体系形成の媒介変数として「社会的共感性」を仮定する。

かかる社会的共感性は、準ソシオメトリー(Quasi-sociometry)によって測定される。教育の場—特に学級社会集団の中において、準ソシオメトリーを期間をへたてて二回実施したとき、それらの結果がいかに比較されるであろうか。この点から、社会的共感性の変容の一端を解明してみたい。

方法 東京都練馬区石神井小学校及び中学校を選び、一九五三年と一九五五年と二回準ソシオメトリーを実施した。しかし、実際には、学級人員の変動があり、学級の再編成もなされているので、統計上の操作を加えた。

- ①小学校三年A組→同五年の各組
 - ②小学校三年B組→同五年の各組
 - ③小学校四年A組→同六年a組
 - ④小学校四年B組→同六年b組
 - ⑤小学校五年A組→中学校一年a組
 - ⑥小学校五年B組→中学校一年b組
 - ⑦小学校六年A組→中学校二年a組
 - ⑧小学校六年B組→中学校二年b組
- という集団を単位として、それらのソシオメトリック・ステータスをパーセントイルに換算して比較した。
- 結果及びその考察 (一)ソシオメトリック・ステータ

スの相違が二〇パーセントイル以上にわたる人員(%)は、①二一(五三・九)、②一六(四五・七)、③二三(三〇・二)、④二八(四三・九)、⑤八(四二・一)、⑥一一(三七・九)となつて、かなりの変容がみられる。(二)相関をみると、①〇・三三、②〇・三九、③〇・七一、④〇・五四、⑤〇・五〇、⑥〇・三九である。このうち、③と④は学級再編成が行われていない。

右の結果から、社会的共感性変容の、主なる条件として、教育の場におけるフォーメーショナルなグルーピング及び、生活の場におけるインフォーマルなグルーピングが問題とされるようである。

41 児童の心配についての一調査研究

信州大学 坂本英夫
伊那西小学校 横内立身

目的・方法・対象 目的 Ⅱ心配の様相について多面的に探り、その構造を明かにする。方法 Ⅱ質問紙法。対象 Ⅱ一五七名(小学生七〇名、中学生八七名)。

結果・考察 (1)心配の原因は生命活動に於ける自我を優越感と劣等感との葛藤の主体の時空間の様相とみる時、生活空間に於ける社会的承認感(価値感、愛情感、帰属感等を含む)成就感、生命感、経済感等に対する予見的優越、劣等の葛藤意識として捉えられる。それは心配事と表裏一体をなし、時に互に移行し合い、必ずしも単独には働かず、二つ以上のものが有機的に働く。亦発達的には自我意識(要求)の未分化と分化・素朴と深化、生活空間の圧力意識的には児童と生徒との差異男女の性的差異が伺われる。この事は後述の心配の種類・適応・継続時間・消失とその原因・反復度にも通じてみられる傾向である。(2)心配の種類は学校、将来、交友、家庭、

氣象、物の破損、紛失、身体性格上の欠陥、政治社会状勢、其他に關する心配に類別される。夫々の心配が他のものと有機的連関をもつことは心配の原因と同様である。學校に關する心配が最も多く、次いで健康に關する心配である。(3)心配に對する適応の種類は多いものから逃避・相談・防衛的攻勢・抑制・理窟付・退行・自責・補償・其他に類別出来る。最も多い逃避を逃避(1)心配な所から逃げてしまつた(2)一人でとじこもつてしまつた)と現実・睡眠・空想への逃避に類別すると、現実への逃避が最も多く、次いで逃避(1)(2)である。生徒に空想への逃避、男子生徒に女子生徒よりも睡眠への逃避が夫々稍多い。(4)心配の継続時間は学年の進むと共に長くなつており、一般に男子よりも女子が長い。(5)消失された心配は兒童が七〇%以上、生徒が約五〇%である。生徒は男子が女子よりも稍高率を示している。心配の消失原因は多いものから(1)うまくいったから、思う様になつたから(2)あきらめたから(3)時間が長く立つて忘れてしまつたから(4)なぐさめられたから(5)おこられてしまつたから(6)其他となる。(6)心配の反覆度は一般に兒童よりも生徒が又男子よりも女子が大である。(7)結語 心配の種類別に心配の継続時間・消失原因・反覆度を相互關連的にみる時、何が一過性或は継続性の心配となり易いが知られ、亦前述の様に自我意識(要求)・生活空間圧力意識の發達變化の様相も觀察されるのである。

42 幼児の継時比較について

44 期待及び現実水準の発達的变化

慶応義塾大学 斎藤幸一郎

目的 被験者に対して、性格特性に関して現実の自己を自己評価せしめると同時に、同じ特性に関して将来の自己をどの程度にまで変化させ得るかを判断せしめ、前者すなわち現実水準と、後者すなわち期待水準との間の水準差を測定するならば、この値は、青年期の被験者の方が、それ以外の年齢段階の被験者の値よりも大となるのではないかと、この仮説を検討するためにこの研究を行った。

手続 淡路岡部式向性検査の質問項目の中適当なものを二五問だけ選び、各質問に対する回答を、七段階（更に各段階の中央の段階をとることも許した）からなる価値段階法によってつけさせるような質問紙を作成した。そして、各質問毎に、まず現在の自己を判断せしめ、両極端の間の自己の位置をしるさせ、次に、同じ質問に関して、将来自分はどの程度まで変化し得るかについて判断を求め、将来の可能性としての自己の位置を、同じ尺度の上にしるさせた。

被験者は慶応義塾内 大学一年、高校二年、中学三年、中学一年・計二一四名を用い、調査は、学年別に団体式に実施した。

結果 尺度の一段階に対し一点をあてて現実水準と期待水準との間の水準差を学年別にとって平均値を計算したところ、大学一年〇・九三五、高校二年一・〇二六、中学三年〇・九三六、中学一年〇・七七八となり、高校生に於いて最も水準差が大であった。又、二五問中、高校生に於いては一五問にわたって、全学年中最高水準差を示していたのに、中学一年生が最高水準差を示した問は一つもなかった。又、最低の水準差を示した問は、高校生では僅か一つであったのに中学一年では一七問であった。

た問は、高校生では僅か一つであったのに中学一年では一七問であった。以上の結果は、私のはじめの仮説を裏付けているように思われる。

45 教室の色彩調節の

もたらした効果について

茨城大学 木村俊夫

教室内部の色彩調節がもたらす効果に関しては、理論的には種々の面が推測される（拙稿「応用視覚論」四六頁、心理学講座）が、その実証的報告例は極めて少い。本報告は第十四、十五回大会に報告したものに引続くものである。

本報告中の主要項目を若干紹介すれば次ぎの如くである。

(1) 静岡県竜井寺小学校では色彩調節により、夜間机上照度が平傘つきで二〇〇Wの時一一・五%、平傘なしの二〇〇Wの時四三・五%増加した。天井、壁面等の反射率の増加の結果である。また、昼間の教室等照度分布曲線が平滑になり、塗板面上照度も向上した。その結果として、教室の視条件が向上した。然し、視条件の向上が生徒達にいかなる効果をもたらしたか、の報告は未だない。

(2) (1)の報告に欠けたものを補うものが愛知県武豊小学校の次ぎの諸項目に関する測定報告である。

(イ) 半年間に於ける視力変化の差 (ロ) フリッカー値変化の差 (ハ) 集団聴力変化の差 (ニ) 色名呼称時間の変化の差 (ホ) ドナジオ反応の変化の差

何れも、彩色教室の生徒と普通教室の生徒との比較調査であるが、何れも彩色教室の方が環境として好ましい

ことを立証している。

尤も、色彩調節の彩色設計に妥当性を欠く時は右の様にはならぬこと勿論である。現在全国的に教室の色彩調節は普及しつつある。然し、その効果測定は小・中・高等学校に於いては可成り困難の仕事であるらしくこの点に関して各地の大学等がその測定を指導して下さることが望ましい。右の報告の(2)は大部分を愛知学芸大学に負っているのである。

46 玉岡式音楽鑑識テスト

の実施(I)

共立女子大学 玉岡 忍

昭和三〇年四月の日本心理学会で発表したテストを標準化するため、目下実施中であるが、その中間段階の結果をここに発表する。被験者は今回は大学生が主で、それに小学生の小数を比較の意味でまとめてみた。大学生は、中央大学八八九名、共立女子大学四八九名、計一三七八名、小学生は、神田神童小学校男子一五六名、女子一三〇名である。

結果 (一) 大学生において予想以上の出来栄で、総得点(三〇点満点)の平均二五・六八となり、テストがやゝ易きに過ぎたのではないかと考えた。

(二) メロディー、リズム、ハーモニーの三様のテストの内、リズムが最も成績がよく、メロディー、ハーモニーの順位となる。これは音感テストの結果とも一致する。(一般にはメロディーが一番易いと思われた)。

(三) ハーモニーは他とかなりの差をもって出来が悪いが、これも今までの私の研究と一致する。

(四) 総得点からみた男女差は、男二三・七四に対して、女二七・一五で明らかに女子が優れている。

(五) しかも男子のM・Dは女子に比べてはるかに大

であって、男子の中にはかなり得点の悪いもののいることが判る。

(丙) 年令差は一八才から二二才前後までの間ではみるべきものがない。

(丁) 小学生の平均は一回目において一八・二六、二回目で一四・九八、——これは大学生に比べてはるかに低く、この音楽テストの易しすぎでなかったことを証明した。

(戊) 三種のテストの出来栄は、一回目はメロディーが一位、二回目はリズムが一位で、今後の吟味を要する。ハーモニーのよくないことは大学生に同じ。

(己) 男女差は大学生と同じく女子の方がよくなっている。(男、一四・五六、女、一五・四八)

(庚) 年令差は、各学年の差として、かなりはっきりと、学年の進みに伴ってみられる(五年に例外あり)。大学生との比較でも明らかのように、このテストの持つ意味、すなわち、鑑識力は年令と共に進むべきもの(音感はずしもそうでない)との予想を裏づけるものと思ふ。

47 スポーツ選手の性格転移

法政大学 門司三省
○豊田国夫

(一) 一般に体育では「好ましい社会的性格」も培養されるものであるとしているが、その素材のスポーツからうける刺激は、性格にどんな反映を与えるのか明確でない。

(二) この研究では約半数の運動選手を見込んで、高校一年から大学四年までの一一五〇名に、理解度の高い各三名グループを作らせ、性格特性一七項目の性格検査をなし、相互転写を行い、①運動選手・非選手②個人・

団体競技別、③選手生活経験年数別、④選手生活開始年令別、⑤うち込んでみた種目経験数別、の比較をとって性格の相違とその転移の問題を検討した。

(三) 結果として一応スポーツ選手には「より好ましい性格」を多くもっていることが認められ、とくに社会性・明朗性・持久力・安定感・自信・指導力・責任感・正義感・勤勉等に特色があると判断された。これに対して判断力・情緒安定度・礼儀・寛容性等は差がないか、または劣ることが認められた。年令の多い方には社会性・持久力・礼儀・正義感等の対社会的なものに高度な特色が現れた。個人・団体競技別の比較では、個人種目の方に平均高度があり、持久力・礼儀・特に責任感・正義感・勤勉等の意志的な項目に特色が現れ、団体種目では、非選手と比べて責任感のひらきがなく、正義感は劣っている。協調性はあまりひらきがなく、個人種目とは同等であった。団体種目という特性を裏切っているかに見えるが、案外ルールの中での反射行動が多く、日常生活への転移がないものであろうか。

経験年数別では五・六年のものに、開始年令別では青年前期に始めたものに、各平均高度があり、それ以上はむしろ変化がないか、また下向を辿る項目がある。種目の経験数別では一、二種目位のは平均度が劣っている、四、五種目と始めから一種目にうち込んでいるものに高い。

要するにこの種の研究においては、性格形成を中心として、日常生活とスポーツの場及び選手の性格要素と技能要素の関係分析が必要であろう。各性格要素を如何に取扱えば転移出来るかについての期待出来るデータがない。

×	×	×	×
×	×	×	×
×	×	×	×
×	×	×	×

四、臨 床

1 日本人のロールシャッハ

反応の研究(八)

——繰返しテストにおける

反応総数と反応時間の変化——

児玉省
日本女子大学○石川晶子
江口妙子

正常人三〇名を一〇名づつの三群に分けて、毎日一〇日間、毎週続けて一〇週間、及び一ヶ月毎に続けて五ヶ月間、繰返しテストを行った。そして繰返しテストすることによって、反応が如何に変化するか且その変化の傾向は何であるかを検討する研究を企てた。結果については一〇回分を最初三回と中間四回と最終三回の平均を求め、毎月の場合には最初二回と最終二回の平均を求めてその平均値の比較を試みた。先づ反応総数、反応時間及びA%、H%をとりあげる。引続いて寺内がF%、F+%, F-%及び領域の問題をとりあげる。

反応総数は時に一、二の例外はあるが毎日の場合、毎月の場合、何れも増加を示している。毎日の場合が増加しているものだけをみると三五が五〇更に五八になり、毎月の場合には二三が四四と増加しているが毎週の場合にはほとんど増加がみられない。この点については次の寺内の発表を参照せう。

総反応時間は毎日、毎週、毎月何れの場合も減少している。このことは総反応数が増加しているにもかかわらず反応時間が減少しているところを見ると反応態度の変化、殊にテストの慣れが影響したものではないかと思われる。

A%、H%については毎日の場合、毎週の場合、毎月の場合、を通じて何れも初期、中間、最終の段階の平均値の間には有意の差は認められない。これによってみると寺内も述べるように反応総数は増加し反応時間は早くなりながらも、その他の反応の比率的な角度については有意の差が認められないようである。ただし上述したことは平均的な傾向であって個人的には反応が減少するもの、又中間で増減があつて再びもとに帰るもの等の類型が認められた。これは寺内の場合も同様である。

2 日本人のロールシャッハ

反応の研究(九)

——繰返しテストにおけるFとロケーションの変化——

児 玉 省

日本女子大学○寺内幸子

亀 島 和 子

F+は毎日繰返しの場合には多少減少し、毎週の場合にはほとんど変化なく、他方毎月の場合には多少減少を示している。F-は毎日の場合には多少増加の傾向、毎週の場合には規則的な変化はみられない、これに対して毎月の場合には多少増加を示している。

領域のW%、D%についても毎日の場合は三段階を通じてW%は多少増加しD%は減少。毎週の場合は三段階を通じてW%、D%共に有意の差がみられない。毎月の場合にはW%は減少し、D%は増加している。

少数例で一般的傾向を推測する事は危険であるがこの研究結果からはF%もW%及びD%も毎日、毎月テストに於ては変化するのに対し、毎週テストの場合は何れも変化の傾向がみられない。この事から我々は次の様な仮説的説明を試みようと思う。即ち毎日テストの場合は図

版を毎日みている為観察が細くなり反応数が増加するが、その反応の増加は多少のF+の減少F-の増加となつて表われるのに対しF%自体はほとんど変化がない。毎週の場合はこれらの点についてはほとんど差異がみられず、一方毎月の場合には一ヶ月の間隔の為前回のテストの時の事を多少忘れるものか新しい反応を示す様であつてF+、F-に変化が起つてゐる。Fについては回を重ねてもほとんど差異がみられずこれによつて我々はFの安定性即ち性格構造に於る基盤的性格が暗示される。領域についても毎日、毎月テストの場合には変化があるが、毎週の場合はW%、D%共に有意の差が認められない。これはF%の場合の様な説明がでるものではないかと思う。

繰返しテストの研究では長年月を置いてテストを施行しているのが多いが、特に幼児期あたりで長期の間隔で行つた再テストの研究がある。これらの結果に變動のある事は最初から予定される事であるが比較的短期間で再テストを行い変化の方向をみ、Rorschachの信頼性を検討しようとしたのがこの研究であつた。但しこれはこの種の研究の序論にしか過ぎない。

3 日本人のロールシャッハ

反応の研究(十)

——同一家族に適応した結果の検討——

児 玉 省

日本女子大学 椎 名 悦 子

○ 渡 辺 和 子

ロールシャッハ反応を通じて、一つの家庭の特色、家族成員の性格的類似性を把握し得るかどうかを検討しようとするのがこの研究の目的であつた。とりあげた対

象は東京及び近在中流の三十家庭で、その家族成員全部に対して同一検査員がこれを施行した。家庭の大部分はサラリーマンであるが、その他商家、牧師、医師等がある。普通の整理方法によつてその結果を整理し、更にDevos博士の方法による感情分析を行い、又研究者達の考えによる性格分析を行った。

結論として次の事が云えるのではないかと思う。(1)領域・決定要素・内容・E・B等の角度が、一様に家族の類似性を示しきりと示し得るとは云えない。例えば反応時間及領域についても必ずしも家庭的な類型を把握する事は容易ではなかつた。(2)家族間の類似性を最もよく示しているのはF%、F+、E・B感情分析並びに内容。(3)個々の家族についてみるとF%、F+、及びE・Bは共によく家族的類似性を示してゐる。但し家族成員間の類似性は家族全体を通じての形で表れると同時に、個々の家族成員間の個別的類似性として表れているものがある。F%について或る家族で父親だけ別で、母親、子供二人の間に類似性がみられた。E・Bについて母親の内向性に対し長女が同様、父親と次女が外向性の場合もあつた。(4)感情分析については敵意性・不安性・身体的関心・依存性・積極的感情・中立的態度等の角度であるが、この点についてもある家族は家族全員が殆んど同様に敵意性及び不安性を示しているのに対し、或る家族においては全然みられない。内容についても家族間にはかなり類似性がみられた。(5)自我観・感情のコントロール、感情的収縮・偏執性・観念の豊富さ・適応の角度として、不安性・攻撃性・退縮性・依存性等をとりあげたが、家族間に類似的傾向がみられた。発達的な変化を示しつつある子供の反応を、そのまま比較する事にはかなり無理があると考えられるがそれでも尚且、前述のような家族成員間に類似性を見出す事が出来た。

4 ロールシャハ・テスト に関する研究 (第二十五報)

○酒川靖一郎

金沢少年鑑別所 田中富士夫

佐竹隆三

ロールシャハ・インク・プロットとその平行系列(パラレル・シリーズ)であるハロー・インク・プロットとを比較し、両者の間の平行性(パラレリズム)について概括的知見を得ることを目的とした。元来平行系列はロールシャハ・テストを同一人に繰返す際、記憶因子・経験の及ぼす影響や反覆の効果等々の種々の因子が混入し、リテストの目的を完全に果し得ないという観点からの要望に応えたものである。従つてその所期の目的を達成するためには、両シリーズ間に夫々の反応が独立であることと同時に一定の平行関係が必要である。

ここにハロー・プロットは全体のプロフィールに於ける平行性と同時に各プロット毎に対応するように構成されているので、この点に留意しながら全体としての反応出現頻度からこれらの平行関係を主として検討してみた。

過去に非行を有する三五名の被検者を二分し、テスト・リテスト法により、シリーズの施行順序による効果を相殺した。反応時間、拒否数、総反応数の点から両テスト間に有意差はなく、ハロー自身標準化研究の結果を積極的に支持する結果はみられなかった。又各スコアリング・カテゴリーを概観すると、極めて高い平行関係があり、むしろハローの言うようなFCに於ける多少の増大や、プロットに対するアプローチの容易である傾向等の差異も認められなかった。

然し更に詳細な検討をすれば、プロット間の構造上の

差異が、特定のカテゴリーの差異と対応している点もあり、他の平行系列に於いての検討と共にこれらの詳細な分析の必要が示唆されている。

今後更にこうした平行系列の多くの知見を集めその間のリライアビリティを確認することは、単にハロー・プロットばかりなく、ベーン・ロールシャハや其の他のプロットにも及びたいと考えている。

5 ロールシャハ・テスト に関する研究 (第二十六報)

○田中富士夫

金沢少年鑑別所 佐竹隆三

酒川靖一郎

目的 アミタール・ソーダーが知覚上に退行をもたらすか否かをロールシャハ・テストに依つて検討する。

仮定 アミタール・ソーダーがロールシャハ知覚を退行せしめる効果をもつならば次の如き結果が期待される。アミタール・ロールシャハで(1)F+が減少する。(2)W及びDが増加する。

手続 一四名の被検者に、通常のロールシャハ、アミタール・ロールシャハを一〇〇日の間隔をおいて施行する。結果の判定は、ベックの基準に従う。

結果 (1)F+は減少する傾向にあるが、有意な変化は認められない。(2)Wは増加、Dは減少の傾向を示すが共に有意な変化ではない。(3)アミタール・ロールシャハでW+が増加する事実が認められる。

考察 アミタール・ソーダーはF+やW・D等で測られる如き退行をもたらさない。又W+の増加は、アミタールが結合性反応の増加をもたらすことを意味している。然し、結合の仕方は質的に低下して来ると考えられる。

6 Szondi Test に関する研究 (第十二報)

——テスト構成批判——

○佐竹隆三

金沢少年鑑別所 田中富士夫

酒川靖一郎

ゾンディ・テストに於いては、八個の要因は夫々別個に加算する手続きがとられている。この手続きをテスト構成一般の理論から見れば、八個の要因は八個の下位検査をなしていると言えよう。従つて各要因に属する六枚の写真相互間には他の要因とは区別された何等かの共通性が存在しなければならない。この同一要因に属する六枚の写真が共通性を有するという仮定を、我々は「要因内共通性の仮定」と呼ぶ。ゾンディ・テストのスコアリングには更にもう一つの仮定が置かれている。このテストでは、同一要因に属する写真は其の好き嫌い別に加算する手続きがとられており、それがどの組から選ばれた写真であつても何等の区別もせず同一に取扱われる。従つて同一要因に属する六枚の写真は互に等価と見做されていると言わねばならない。我々はこの仮定を「要因内等価性の仮定」と呼ぶ。

以上二つの仮定が妥当ではなく、同一要因の中にあつても個々の刺激材料としての写真のもつ誘意性がかなり異なるものであることを、被検者 正常人男女各々一〇〇名、非行少年一〇〇名、成人受刑者一〇〇名、精神疾患者(分裂病一〇〇名、神経症一〇〇名)等、計六〇〇名について実験的に確かめた。

このようにゾンディ・テストが少くともテスト構成上内部一致性に乏しいという事実は、本法の妥当性や有効性を論ずる上に重要なことであり、日本版作成や標準化を企図する場合の基本的課題である。

7 ロールシャッハ・TATを

ヒロポン患者に適用した

検査像について

早稲田大学〇滝 沢 清 人
慈雲堂病院 三 木 清 子

ロールシャッハ検査像とTAT像との関聯性を追求する目的でヒロポン患者に適用した検査結果を検討した。その結果TAT特徴における欲求圧力発現の貧困さ、短時間 blocking 拒否頻度の高さは、ロールシャッハにおいても反応総数が少く、Mが全被験者に出現しない傾向を示した。更に此の群の特徴と思われる細部注意がなく、グロブな反応は、Ddの多い事実と対応し、しかも明暗反応の多いこと、ディリケートなニユアンスの欠如した性質を示標した。

F%の高さによってみられるConstrictedな傾向とMが全くあらわれない事実は、TAT特徴と結びついて、社会的な概念、及び社会的関係の組合せをつみだてる能力が欠如していると解釈され得るように思われた。

又、TAT形式特徴における、高い頻度でみられた繪の批評反応、either-or 型は、Sが全被験者に出現しないという事実によって裏づけられ、意志不安定的な傾向をもつものと推定された。

TAT物語中の家族員の省略型は、中毒者群の生活史における親の欠損と一致し、共通した環境条件として重要視し得ると考えられ、更に、かかる環境を受けとる前述の人格傾向と結びついて詳細な環境分析が要求されると思われた。その他、中毒者の一例に特異な歪曲、異常な意味づけを認め、この種の人格傾向性に興味深い特徴があるのではないかと予想された。

本研究は鑑別診断をさけてなるべく心理学的な解釈診断を行おうとしたもので、異常行動が、具体的に診断されてゆくことを期待する。

8 P-F Study (試案) による

施設児の場面分析的考察

福島大学 工 藤 正 悟

本研究は、RosenzweigのP-F Study (試案)を施設児に実施し、その反応を各回毎に吟味して、彼等のPersonalityの片寄りを、場面と相即的に考察してみたものである。

調査対象として、孤児院児 四三名、教護院児 三八名、対照群は良好な家庭の子供 七八名とした。使用testは、児童版の改案である。

結果 (一) 施設群と対照群との比較 A、罰の方向差の認められたのは、親の非難、友人の過ちに対する反応で、何れも施設児は、外罰が多く、内・無罰は少なかった。B、反応の型 友人関係では、施設群は、自己防衛が少なく、要求固執が多かった。しかし、家庭場面では、対照群に要求固執が多かった。

(二) 施設間の差異 A、罰の方向 全般的に見て、対照群に内罰・無罰が多いのに対して、孤児群は外罰が多く認められ、教護群は、各場面に応じた種々の反応を示した。B、反応の型 対照群は、家庭に於て、特殊場面では要求固執、日常場面では自己防衛の反応が多かったが、教護群は何れも、外罰的な自己防衛を示し、孤児群は、一般成人に対する反応と同様の傾向を、何れの場合にも示した。超自我に關した場面では、孤児群は障害優位、教護群は要求固執が多かった。

(三) 施設収容期間による差異 見本が不適当な為、十分な吟味は不可能であったが、前述の結果が施設に収容

されていることに基づくことをほゞ実証することが可能であった。

9 不良化傾向児を発見する為の

人物描画テストの研究

大阪府教育研究所 扇 田 博 元

不良化傾向児を早期に見見せんが為の徴候診断の一方法として、本法の様な男女の人物描画によるテストを利用することの可否については、不良化傾向を(主として行動問題児)帯びる所の反社会的性格像が果してどの程度に本法でもって識別することが可能であるかを吟味することに於いて決まるのではなからうかと思う。

そこで、一応、不良児、不良化傾向児、正常児を含む八三二名を個人的に実験し、それより分析判定規準を設定し、それと照合して判定した結果を考察してみたのであり充分とはいえないが、不良児と正常児群との間に相当識別出来る事柄を導き出すことができたのである。しかし、本法の妥当性を確かめる為、再検査との結果を比較すれば、主として描かれる型、画線の強弱や位置等に於いてある程度恒常性のある事を発見することができ、よしんば画像に相当変化があったとしても、その裏に潜在する共通的な性格因子のある事が見出された。尚、知能程度が画像の描き方に影響をもつことが考えられるが、描画発達を測定する規準項目を除いた、異常特徴面の判定規準を設定しているから、ある程度低い関係を示した。さて無選択の学童に適用してみても、種々の型の問題的性格面を識別することができ、ところで、同一類型の問題児を相互に比較してみると大体は共通的な特徴を表現するが、必ずしも同じ形に描かれるとは限らない。だから単に僅かな特徴のみで直ちに判定できるものではなく、そこに潜む共通的な因子と、その様に描かれ

る様になった種々の心的条件の過程を検査することに重点が置かなければならないと思う。

詳細は、昭和三十年六月本研究所発行の「不良化傾向児を発見する為の人物描画テストの研究」と題する論文を是非参照して頂きたい。

10 ウエクスラー・ベルビュー法テストに依る保護少年の Scattergram の検討 I

東京少年鑑別所 袴田 明

対象としては知能検査並に問診其の他の所見に依り、ボーダーライン級(IQ六六〜七九)をとる。

鑑別所によるボーダーライン級は昭和二九年度に於ては入所総数四七四〇名中九九四名(二一%)を占めている。この事はボーダーライン級に対する、より深い臨床所見の必要を教える。

さて知能は個人の環境条件、生活年令等に左右されると思うので、総数二九名を中卒クラスAと不就学及び小卒クラスBに分け、且つ生活年令を十七才より十九才迄とした。

結果 Aクラス一三名の平均 Scattergramは、Vテスト内では、Vテスト平均値に比して「一般理解」にすぐれ「共通点の発見」「算術推理」に劣る傾向が目立つ。Pテスト内ではPテスト平均値に比して「絵の完成」「組合わせ」にすぐれ「記号合わせ」に劣る傾向が認められた。Bクラス一六名の平均 ScattergramはVテスト内ではVテスト平均値に比して「一般理解」にすぐれ「共通点の発見」「順唱、逆唱」に劣る。Pテスト内ではPテスト平均値に比して「組合わせ」にすぐれ「記号合わせ」「積木デザイン」に劣る傾向がある。

両群を通じてVテストでは「一般理解」にすぐれ「共通点の発見」に劣り、Pテストでは「組合わせ」にすぐれ「記号合わせ」に劣るという大略の傾向が考えられてよさそうである。

さらにそれぞれの Scattergramを見ていく時、グラフの動揺が非常に激しいこと、Vテスト平均値とPテスト平均値との差が著しいこと、そして大切なのはPテスト成績が殆ど例外なくVテスト成績よりすぐれていることが解る。

次に心情質所見と Scattergramの関係をみていくと例えは固有特徴を有するが割合安定した心情質所見を示す者のグラフは動揺も少なくV・Pテスト間の差も著しくはないが、偏倚又は異常特徴を有する者のグラフはその逆で、グラフの著しい動揺と両テスト間の大きな差が見られる。この点はさらに今後検討するが、Scattergramを見て一応、問題点の有無、その傾向等が或る程度解ってくる。ここに無力性を基調とした情意変調少年の一例を示す。

11 出生後四年間を継続観察した子供に関する心理学的研究

お茶の水女子大学 平井信義
○千羽喜代子

乳幼児の精神活動における成長、発達、個人差に関する研究の一端として、昭和廿五年より廿七年までの間、愛育研究所に来院した者の中、男児六十三名、女子廿七名、合計九十名を出生時より四年間追跡観察したものうち、運動機能・歯牙・発語・人見知り・癖の五項目についての結果である。

(1) 乳児の運動機能において、えんこ・はいはい・支え立ち・伝い歩き・一人立ちの夫々と歩行の開始期との

関係は、えんこ・這はいはい・支え立ちの早遅と歩行の早遅とは関係は認められず、早くえんこの行われたものに早く歩行がみられるとは云えない。えんこ十ヶ月に行われた子どもは歩行開始は十一ヶ月であり、えんこ五ヶ月で歩行十七ヶ月に開始した例もある。支え立ち・伝い歩きの早いものは歩行も早くできる傾向にある。

(2) 乳歯の発芽については、第一歯の発芽の早遅と、全発芽の早遅との間には関係はみられなかった。尚、犬歯の発芽が個人により異なる場合がある。

(3) 発語期の範囲は七ヶ月〜一年十ヶ月であったが、これらの被験者の現在の知能指数は普通又はそれ以上にある。

(4) 人見知りは約半数にみられ、その出現期は三〜廿六ヶ月に亘っているが、六〜十二ヶ月に現れる傾向がある。発現期より三〜四年続いている例もあった。

(5) 指しゃぶり・いじる癖・吸う癖・爪かみ等の癖は八八%にあった。指しゃぶり・吸う癖は〇〜六ヶ月に、かむ・いじる癖は一〜三年に多くあらわれている。又その継続期間も一ヶ月、長くは三〜四年という例もある。尚、癖の発現の原因を授乳法と関係させることには疑義をもつ、だが人見知りとともにその発現のメカニズムに対しては判然としない。

12 女児の発育の類型とその予後診断

お茶の水女子大学 平井信義
○森脇多恵子

女児三七〇名について、その児童期から青年期にかけての発育を身体検査表から、継続的にとらえ、身体発達の類型を求めると共にその予後診断を試みた。その結果、非常に個人差のあるのは見逃せなかった。

が、發育の類型として、身長においてはI型、体重においてはI型に一応分類する事が出来た。即ちI型として、平均曲線にそって、その上下を流れるものが、身長においては全体の六九%であり、体重においては五七・九%である。又、II型は常に平均曲線より急速に發育する場合で、身長の場合は二九・八%であり、体重の場合は一・二・五%であった。III型は發育のかんまんな場合で、身長では二・二%、体重では一・九%であった。IV型は、早期に發育は止まるが、一四、五才までに急速に發育する場合で、身長では九・二%、体重では七・八%であった。V型は児童後期に一時發育が、かんまんななるが、その後急速に發育、一六、七才で一応落つく場合で、身長では九・二%、体重では二・一%であった。VI型は、身長の場合、七つの類型中一番急カーブで、〇・八%、体重の場合は、大きな波状カーブで、六・六%に当る。VII型は、いわゆるジグザグ型で、身長では二・四%、体重では三・二%である。

又、予後診断の総括としては、身長、体重とも七才時に、上位にあるか、下位にあるかよって、その一〇年後を予測する事が出来る。

又、七才時に、身長・体重ともに優位にあるものは、一七才においても、身長・体重ともに優位にあるという事が、統計的に証明された。それと同時に、身長・体重共に七才で劣位にある場合は、一七才においても、共に劣位にあると云いうるわけである。

13 高熱の出没した一少女の 遊戯療法について

平井信義
お茶の水女子大学
古川裕

序 「家族構成」 Case 〇山〇子、八才の女兒。父三六才、母三三才、妹六才の四人家族であるが、現在父方の祖父母と叔母及びその子供である六才の女兒が隣接した家屋に住み、一軒の家の様に交通している。「家庭の内容」は Case の祖父、父共実業家。Case の家庭は初め昨年七月迄祖父母と離れた所に住んでいたが、現在の所に転宅。Case は本年四月の新学期に有名校F学園より近所の公立小学校に進んで転校した。

経過 Case の経過は、第一回は三月一四日より同月二〇日迄。発熱の状態は夜は七時又は八時より九時又は一〇時迄、約一時間から二時間、四二度以上即その都度体温器の上部を破って水銀が付き抜ける高熱、最初の日はアスピリン服用と同時に一時熱が下りその後間もなく上昇。第二回は同月二七日より三一日迄。第三回は四月三日夜八時より四日の朝九時迄と、五日より一三日迄。一四日の発熱は三八度。第四回は五月二八日の午後七時と、三〇日学校の歸りに友人の家で午後四時から五時迄発熱しそこで寝込む。三一日四時と六月一日午前九時に学校で気分が悪くなり帰宅し、やはり高熱。翌二日は学校で午前九時から一〇時迄。午後二時気分が悪いと帰宅、三七度の発熱。自覚症状は第一回と第六回のみで多少の頭痛・悪寒・胸苦しさ等。身体的な検査はA病院で二回、T病院で三回、何等異常が認められない。知能はI・Q一三一、M・A一才二ヶ月。治療からみた経過はルミナル〇・二瓦服用中平熱、研究室では Doll Play, Therapist による遊びの Psycho-Therapy を行

う。研究室を二回目に訪れた三月三〇日の翌々日二日間には発熱をみず、三回目に訪れた四月一四日は三八度でその後四二日間発熱なし。その後五日程発熱をみたが、六月五日に Therapist の家を訪問の際、母親が家庭内の Trouble と自分の精神的葛藤をすっかり告白し、Counseling を行う。その後現在に至る迄発熱をみず、Case は毎日を愉快に元気で送っている。発熱の原因は (1) Case の Personality が環境への適応がよい事と、Personality Tolerance が低い事。(2) 母親及祖父母の取扱。(3) 母親の Personality。直接の原因は (1) 家庭の Trouble (2) 母親の Conflict の Case への投影 (3) 転校の為による学校でのショックと推察される。

14 転生願望法による パーソナリティの診断(第一報)

(パーソナリティ診断用のテストバッテリー
作成の研究。第一)

東北大学 大脇義一

転生願望法とは仏教の「転廻転生」の語からとった私の命名で、「若し吾々がもう一度この世に生れ代って来るとしたならば、そして人間にはなれないが動物に生れ代って来ることが出来るとすれば、あなたはどんな動物に生れ代りたいか」と問い、その動物の名前の外に、その理由をば出来るだけ詳細に陳述させる方法である。

この方法は一九四九年の国際心理技術学会でスペインの Cordoba, Pigem, Gurria の三氏が Test de l'expression desiderative と名づけ、約一千人についての研究結果に於ける所見を発表した。それを私は願望対象を動物だけに限定して施行した。ホルドバ等によれば願望対象とその理由からして次のようなパーソナリティの徴候がわかる。(一)願望された対象は自己と相即的意味を持つ

か、又は自己補償の意味を持つ。(二) 当人の Vital Energy の大小が現われる。(三) 健康状態もわかることが多い。但し往々にして補償的に現われる。(四) 全人格が現われる。中でも情緒性、創造的想像力、及び意志の強さがよく出ている。それは、このような性能を殆んど持っていないと認められる Oligophrenie は全く解答が出来ないことでもわかる。(五) いつも当人が頭に持っていること、気にかけていることが、理想、目的、不満、不安などが出ている。(六) 外向性か内向性か、当人の社会性の多少もわかる。(七) 動物に対する親愛の情、その他が知られるという。なお願望対象は恒常度が大であって、一年間も変わらない人を確かめている。しかし信頼度、基準化などについての詳細は発表されていない。私は先づ常態者について基準を求める為に東北大学の専攻学生一四人(内女子四人)については是を施行すると共に、他方、仙台の短期女子大学生、一四四人について検査した。前記、専攻学生については同時にロールシャッハ法、マレーの T・A・T 法、自由画法、ミネソタ人格検査法、向性検査、要求水準などのテストを施行して互に対照した。私はコルドバの仕方を参考にしながら、なをその他に (一) 願望動物の種類、(二) その住居、(三) 理由叙述の様式の三項を追加して整理した。

15 Client-Centered Therapy の

臨床的研究

——Motivation について——

国学院大学 友田 不二男

Client-Centered Therapy における Client の Personality の転換については、従来、きわめてしばしば、Client の Insight が重視されていたようである。しかし、面接場面における Client の陳述表明を手掛りとし

て考察する限り、Client の Personality は、Insight によって転換するのではなくて、既に転換している Client の Personality が、Counselor もしくは第三者的な立場から説明する場合に Insight という言葉で呼ぶことができるような表現形式をとるようになるだけである、と考える方が妥当なように思われる。なぜならば、Insight が表明されることなしに Personality が転換していることみなされる Case が少なくないからである。Client-Centered Therapy において重要なものは、Insight ではなくて、Insight という表現形式となって現われることを可能にすると思われるところの Personality の転換であり、さらに、その転換を可能にする Motive である。

さて、それでは、Client の Personality の転換を Motivate する Motive は、いったい何であろうか？ 最近における二十才前後の男・女の Client の表明に関する限りでは、最も重要な Motive は、誰よりも Client 自身が、面接の初期(直接の資料においてはすべて第一回目の面接)において、その面接場面の経験を、かつて経験したことのないユニークな経験としてはつきり自覚することである、と思われる。しかもこの場合、その経験が、どのような意味においてどのようにユニークであったか、ということとは、人によって千差万別であるが、大して重要ではないようである。重要なものは、そしてまた Clients に共通していることは、それが、ともかくも、たゞユニークな経験として自覚されているということそのことである。

この自覚はいったいどうしてもたらされるか？ 今日までのところ、Client の表明によってこの点を説明することは恐らく不可能であろう、と思う。それは恐らく、完全に無意識的な過程に属するのである。

16 Client-Centered Therapy の

研究 (三)

——価値構造の分析——

明治大学 堀 淑 昭

分析の方法 Client-Centered Therapy の Interview の録音記録から、クライエントの、価値づけを含む全ての発言をぬきだし、現実面(自己と外界)、非現実面(理想、予測、未来の不安、等)のプラスとマイナスの四つのカテゴリーに分類し、直交軸により分かれた四つの領域に分配し、結びつきを示す。これらの項目は互に関連のある構造をもち、クライエントの価値の認知世界を示すことになる。

結果 この分析の結果得られた治療各段階の特徴は、典型的なケースに基づき主要点のみを述べれば、「初期」現実面のマイナス領域に落ちる項目が多いのは勿論、非現実面のプラスが強い。この二面は相互に相反する関係にあり、理想を云々することは、現実の自己の否定として語られる。「後期」現実面のプラスが多く強くなり、マイナスが少なくなる。注意すべきは症状がほとんど消滅しているにもかかわらず、中心的な価値づけにおいて、自己はマイナスであり、理想と相反関係にある。「終結期」多く支配的になるのはプラスでもマイナスでもない一群の価値づけであり、それは事実を事実のままに肯定し、その中で自己の自由な活動を肯定するものである。構造図の現実面に、第五の「肯定」の領域を設ける必要がある。

結論と提議 (一) この分析は、パーソナリティの重要な面の現象学的理解に役立つ。特に欲求理論でつくせない水準を示し得ると思う。(二) 治療過程を理解するのにこの分析は役立ち、特に症状の消滅は、治療を終結する

17 適応障碍としての心因反応

慶応義塾大学〇塩 入 円 裕

佐藤	武田	斎藤	佐藤	高橋	鎮目	高橋	阿部
晃		庄	紀	艶	光		
平	専	吉	子	子	雄	進	正

症例三〇例について心因、症状、転歸並に性、年令に対する性格と自律神経の關係を調べ、TATとロールシヤツハを施行した。

では七対五)、反之、後者では心因に両親の愛情欠如と症状として運動麻痺(一対五)が多く見られた。次に自律神経不安定を質問紙法により検査し、之が女と若年者に多く、心因として対家族葛藤、症状として感覚障害が多く見られた。転帰別では全治(一四例)が顕揚者が多い(六対七、反之、非顕揚では九対六)傾向あり、自律神経不安定者に少い(六対三、反之、略々安定者では四対九)。治療法を不問に付す時、転帰には自律神経不安定との関係を顧慮すべしと思われる。TATは早大版を用い、之に心因がそのまま投影されたもの二九%、推定三三%、即ち心因の発見に役立つもの六二%であり、顕揚欲性格と判定されたもの五二%で、これは前記の性格判定と略々一致した。ロールシャッパでは心因が反応に投影される事と、運動、色彩、明暗反応が多い事、体験型ではBに対しFBが遙かに多い事、及び抑制乃至拒否的で反応語数が少く検査資料となり得ない者が多かった事が特徴である。尚顕揚者では上記の特徴が一層よく認められた。適応障碍との関係は後述の予定。

18 GSR及び光電プレティスモ

グラフ (容量脈波) による

神經症的不安の研究

東京教育大学 原野 広太郎

目的 プレティスモグラフは記録方法がむずかしい為、充分研究されていなかったが、最近光電管を用いる方法が考案されて、その性質が明らかにされると、その応用価値は医学、心理学で注目されて来た。神経症の不安は、自律神経系の興奮と密接に関係しているといわれるが、本報告は光電プレティスモグラフとGSRによって神経症の不安の性質を明らかにし、さらに光電プレティスモグラフの心理学における臨床的応用資料を提供し

ようとする。

手續 プレティスモグラフの記録は、指尖の血流変化を光電効果によつて電流の変化に変え、これを増巾してペン書する。GSRはプレティスモグラフと同時に記録する。被験者は不安神経症者八名、正常者十四名から成り、次の四過程を比較検討する。

(I) プレティスモグラフィとGSRの安定度、(II) プレティスモグラフィの振巾と α 波変動、(III) 神経症的不安におけるプレティスモグラフィとGSR、(IV) プレティスモグラフィとGSRに及ぼす外的条件。

結果 (I)

高い者は、正常者十二名、不安神経症者なし。(ロ)プレティスモグラフ不安定、GSRの安定度高い者は、正常者なし、不安神経症者三名。(ハ)プレティスモグラフ、GSR不安定度高い者は、正常者二名、不安神経症者五名。

(II) 振巾変動（脈波の振巾が増減する）は意識され得る刺激（音、光等）にのみ現われ、 α 波変動（週期の長い変動）は意識に上らない刺激（恐怖、不安等）に直接関係した反応であり、GSRはこの両者に關係していた。

(III) 不安神経症者は、振巾の増減変動を伴わない α 波変動が著しく多く、GSRよりこの変動は一貫している。また、神経症的不安は、プレティスモグラフの α 波変動と密接に関係し、脈波の振巾変動と α 波変動を支配する自律神経系は、夫々異った神経系であつて、GSRはこの両者の機能を識別し得ない事が分つた。

(IV) 光電プレティスモグラフは、GSRと異つて、温度、湿度、等の外的条件によつて余り影響されないことが明らかにした。

×

×

×

×
×
.
×

19 精神薄弱児の Rigidity の研究

児 玉 省
○ 森 博 子
日本女子大学
西 森 房子
武田 みとし

我々は精神薄弱児の精神構造、特に rigidity を中心として検討したが、研究対象として正常児と同一精神年齢の精薄児をとりあげ、それに各種のテストを施行して比較を試みた。

研究の結果を次に要約する。

(一) 知的理解力及び了解力。精薄児は、その経験を生かし利用することができないようで、この点精薄児の特徴と云えよう。

(二) 被暗示性。簡単な絵を見せ、後で全く事実に対する質問をしたのであるが、精薄児は正常児よりも暗示にかかり易かった。

(三) 衝動性。やさしい迷路作業の後、かなり難かしい迷路作業に移らせたのであるが、この時、精薄児は自棄的に投げ出し易かった。又は、考えないでやってのける傾向が強かった。衝動性が強いと考えられる。

(四) 洞察力。精薄児は問題が抽象的であるものよりも具体的であるものの方で成績がよかった。

(五) 知覚的統合性。知覚的にはつきり区別できないカードを分類させた時に、精薄児は正常児よりも前後一貫性がなく、より統合性が少なかった。精薄児は知覚的にも場面構成の能力、即ち知覚的統合力に於て劣っていた。

(六) 固執性。二十五枚のカードを、はじめに色で分

類させ、次に形で分類させたのであるが、精薄児は正常児の二倍のものが色による分類からの脱却が困難であった。

全体的にみて、精薄児は具体的な問題に於てはしばしば正常児よりも優っているが、理解力、知覚面、行動面などに於て、既得の経験がしばしば障害となって、それを新たな場面に利用する上に困難を示し、場面再構成上、行動の再組織上の困難として現われ、他方、強い被暗示性及び衝動性とその半面の表現を構成する傾向を示している。ここに精薄児の rigidity をみることができ

20 精神薄弱児の生育歴について

— 精神薄弱児診断の資料としての生育歴 —

横須賀市教育研究所 村 山 秀 雄

目的 精神薄弱児の生育歴について研究し、精神薄弱児診断の正確な一資料を得る。特に客観的テストの実施不可能な幼児に対しての診断の一資料を得る。

方法 私の担当している教育相談部に来所した児童の中から二十四名の精神薄弱児を選びそれについて研究した。生育歴の調査方法としては、大部分保護者に対して質問し、その記憶によって研究したものである。これは予備的研究で本格的な研究は今後にゆづる。

結果 精神薄弱児の生育歴の研究項目は次のようなものである。胎児期の母親の健康状態、出産の状況、栄養、離乳、生歯、歩行はじめ、話しはじめ、幼児からの病歴、頭部外傷等である。

右の中、「歩行はじめ」と「話しはじめ」についての結果をここに掲げることとし、他のものについては後の機会にゆづる。

一般児の「歩行はじめ」については、アメリカのシャーレーや我國の尾崎氏外二、三の人々の研究によると、幼児は十二カ月（満一才）で「一人立ち」し、十五カ月（一才二カ月）で「ひとり歩き」が出来るようになると言われている。所が私の調査したものと比べると、平均二才〇カ月で、一般児より非常に遅れている。滝の川学園の調査も二才〇カ月で私のと一致している。ターマンの研究も二十四カ月（二才）で一致している。このように幼児における歩行遅れは、精神遅滞と相関しているようである。

次に「話しはじめ」については、その平均年齢は二才三カ月になっている。一般児の標準は一才から一才二〜三カ月と言われ、それに比較すると非常に遅れている。滝の川学園の調査では、更に遅れて三才五カ月となっている。「話しはじめ」も「歩行はじめ」と同様に精神発達と相関しているようである。

以上「歩行はじめ」と「話しはじめ」について述べたが、その他の生育歴と共に、これらは精神薄弱児診断の一資料として重要なものであると思う。

21 肢体不自由者の診断法研究(二)

— TAT専用図版の解釈上の一考察 —

国立身体障害者更生指導所 ○ 田 中 豊

早稲田大学 金子 精 宏

アクセプタンスという言葉は非常に漠然と使われているが、肢体不自由者に限らず正常者にあっても、自己の精神的乃至は身体的シチュエーションをより正確に把握し、且つ自己の社会における客観的位置を認知することは極めて困難なことであると言わなければならない。

グレイソンに従えば肢体不自由者の身体障害に対する

アクセプタンスには非常に多岐に亘る因子があると考えられている。彼はこれ等を二つのカテゴリーに分け、その第一は純粹に個体的なもので且つ本質的に個人のパーソナリティ構造に関するもので、第二は個人へのその障害に対する社会からの裁定であるという。従ってアクセプタンスの過程にも二つの基本的な面が存在するわけである。そしてこのアクセプタンスの概念は在来の劣等感概念に代って肢体不自由者の人格構造の解釈上の基本概念であると吾々は考えるものである。

シルダーに従えばフロイドの「自我」とは「知覚された自己」である。シルダーは身体像 (Body-Image) と名づけている。アクセプタンスはこの両者の適応であると言えよう。吾々は身的不全の圧力、それに対応する欲求の様相を分析し、併せて行動様式——欲求と圧力の均衡——を分類して肢体不自由者のその障害が心的機制に及ぼしている影響をアクセプタンスの概念より説明したのである。

即ち身体不全の欲求圧力に自己防衛の意志のあることがよりアクセプタンスが正確であり、適応方式に於ても身的不全がその行動様式に目的性をもつて作用していることがよりアクセプタンスが充分であると考えられる。この説明によって、その肢体不自由者の更生指導計画 (Rehabilitation Program) の妥当性も評価されるべきであると考察されるのである。

五、産業

1 作業性格検査 (九)

——向性検査及び

C・S・T・との関係——

東京都職業適性相談所 板倉善高

正常 (N) 上昇 (U) 下降 (D) 突出 (O) 陥没 (I) 平坦 (S) の作業曲線型と向性検査又は色彩象徴性格検査との関係を中学一、二年生一五三七名及び高校卒生三五三名について調べてみると

(一) 向性検査 (田中式) の外向度 (外向人員と内向人員との比) の順位は休前の曲線型では O (二・五七)、I (二・三三)、D (一・六八)、N (一・五七)、S (一・五五)、U (一・四四) …… 平均 (一・八)、休後では D (六・五〇)、N (二・一四)、I (二・一〇)、O (一・六五)、S (一・二〇)、U (〇・八六) …… 平均 (一・八)、前後の平均では I、D、O、N、S、U。

即ち動揺型は外向性、出足の遅い上昇型と平坦型は内向性の傾向がある。

作業量では速度の極めて早いものと遅鈍なものは内向性の場合が多い。

(二) C・S・T・との関係。異常率の順位は休前は S (二六・四)、U (二六・一)、I (二〇・〇)、N (一八・六)、D (一七・九)、I (一七・五)、休後は S (二三・六)、N (二三・〇)、U (二一・五)、D (一九・六)、O (一八・七)、I (一四・三)。

即ち、平坦型、上昇型は色彩反応は異常で、陥没、下降型はむしろ正常反応に近い。

又、作業速度では遅鈍のものと高速のものに異常傾向

が強い結果となっている。

(三) C・S・T・の性度との関係。先づ型の男性度の順位は、休前 I、S、O、N、D、U、休後 U、N、D、O、I、S、となつて休の前後で一見逆の関係となっている。又作業速度との間にも相関がない。これは色彩反応から得られる性度と作業性格との間には何等の関係も認められないことを示す。

2 学校進路選択における

助言者について (続報)

神戸大学 増田幸一

序 中学校から高等学校へ、および高等学校から大学へ進むばあい、生徒は誰に相談しその助言を受けるであろうか。その実態について調査した結果はすでに二回にわたり報告を行ったが、今回は本年度初め大学生について行った調査資料を追加し、特に助言を「受けない」と答えた者の数量的状況と理由の分析を主として考察した結果を述べる。

総括と結論 (1) 学校進路選択に当り、助言をうけない者は総数の約二割で、うける者に比すればずっと少ない。

(2) 大学生と高校生では右の比率はかなり相違し、後者の一割三分に対し前者は三割四分である。これは中学校卒業期と高校卒業期における生徒の自主性の差を示すもので、青年期における精神的発達原則に一致する。

(3) 助言をうけない者の数は少なくても、かかる生徒は指導上大いに問題とならなければならない。うけない理由としては、「助言をうけるべき人がなかった」というよりも、「ひとりできめた方がよいと思った」という「進学にきめていた」という方がはるかに多い。これは自主的精神や独立の感情の現われで、青年期における当

然の現象であるともいえるが、一面反抗的もしくは独善的態度とも見られる。

(4) いかなる生徒に対しても注意深くかつ温かい助言指導を行うことが必要であるというガイダンスの原理に基くならば、教師や父兄や先輩は、青年達が卒直に助言を求める態度をとるよう努めなければならないであろう。それには、前記のような助言を拒否したり回避したりする心的機制を、どうしたら変えることができるかというところを考究する必要がある。特に教師についてその必要はきわめて大きいのである。

3 第三回公共職業補導所

技能検定の結果について

労働省 村中 兼松

公共職業補導所における第三回技能検定は本年二月十四日から六日間にわたって全国一斉に実施された。とりあげられた種目は、製図、経理事務、英文タイプ、和文タイプ、木工、板金、旋盤、仕上、塗装、建築、電気機器修理の十一種目である。今回の技能検定を受験した補導生は八四三八名であった。

合格点は筆記、実地および合計のおののについて標準偏差値を算出し、平均点からマイナスの方へ一・五σをとって合格点とし、筆記、実地および合計の各得点がそれぞれ合格点に達していることを条件とした。その結果合格した者の数は七五九一名で受験者全体の九〇%を示している。

その信頼性をみるためにスピーアマン、ブラウンの予言公式を適用して信頼度係数を算出した。これらの結果からみると、和文タイプ（〇・四八）をのぞき、大部分は〇・六三から〇・九四までの高い信頼度係数を示している。和文タイプの係数の低いのは、問題数の少いことと

各問題に対する点数配分の異なるためであると考えられる。

つきにその妥当性を確かめるために、受験した補導生を学業成績によって上中下の三つのクラスにわけ、上と下のクラスの者について検定成績を比較して平均値の差の信頼度係数をみることにした。つまり学業成績上と下とのクラスについて検定成績を出し、その標準偏差値と平均値を算出し、そして上と下の標準偏差値の和（ σd ）を三倍したもののが平均値の差より小さければ上、下の間に有意差が存することになり、そのテストは妥当性があるといえる。この方式を用いて算出した結果は全種目について妥当性があることを示している。

つきに今回の検定成績は昨年度の第一回の成績と比較して全般的に良好な成績であった。平均点が満点の半分に満たないものは今回は見うけられなかった。

4 内田クレペリン作業曲線

に関する研究

愛知学芸大学 堀内 安男

採用試験や学期試験等の特異な環境に於いて示す、内田クレペリン作業曲線と平常の作業曲線とを比較し、試験等の作業曲線に及ぼす影響を調査した。

調査は本年度、中学校を卒業し、紡績工場に入社した五二名の女子工員と、高校二年在学中の男子生徒三五名を対象とした。

調査の方法は女子工員に対しては入社後、三ヶ月を経た七月一日に内田クレペリン検査を実施し、就職試験時のものと比較した。高校生に対しては二九年一二月の学期末試験の始まる一週間前、前日、直後及び二五日後の四回にわたり実施し、夫々の作業曲線を比較した。

調査の結果 高校生は第一回に非定型を示した者九

名中、第二回に於いて僅か二名が定型を示した以外、全部非定型と判定された。第一回に定型と判定された者二六名中、第二回に一二名（四五%）が非定型となり、このうち第四回まで引続き非定型を示した者が六名（二二%）あった。

女子工員は就職試験に定型を示した者四〇名中、七名が非定型に、非定型を示した一二名中、三名が定型に変わった。曲線の基本傾向は両者とも毎回大体似ているが、見られた変化のうち著しいものは次の通りである。

高校生は試験の直前において特に後期の初頭が低く、やや中高傾向を示し、動揺の著しい者が見られた。直後及第四回になるにつれ、漸次回復が見られる。この変化は非定型を示した者が特に著しい。誤謬は試験の直前、直後の後期に著しく増加している。後期増加率は大きな変化はないが回を重ねるにつれ漸減している。

女子工員も入社後の曲線は大體、試験前の高校生に類似している。

以上のように高校生では試験の影響が明らかに曲線の上に現れるが、女子工員は入社後三ヶ月の曲線は就職試験のものより劣っている。これは入社後三ヶ月ではまだ生活が安定していないためであると考察される。

5 右手切断者、左手切断者の内田クレペリン検査について

労働災害によって、右手を失って左手のみの国鉄傷い職員 二三名、弘済会職員 三八名、計六一名と、左手を失って右手のみの国鉄傷い職員 一五名、弘済会職員 二七名、計四二名の内田クレペリン検査の結果を数量的に取扱ひ、また平均曲線を描き内田定型曲線と比較し

鉄道弘済会 丸山 茂樹

た。

曲線は内田定型に比して作業量は、左手作業、右手作業いづれも内田定型にまさるが、傾向としては、左手作業は休憩後の初頭緊張の不足と終末上昇の異常傾向を示し、右手作業は休憩後三、四、五分目に異常上昇を示している。これを国鉄職員と弘済会職員に比べて比較すると、弘済会職員は左手作業が休憩後初頭緊張を欠くが、右手作業と共にやや内田定型に似た傾向を述べているのに、国鉄職員は左手作業は終末の異常上昇、右手作業は休憩後の初頭緊張の欠除と、二、三、四分の異常上昇を見る非定型の傾向が強い。

数量的取扱では、常態指数は右手の人の作業が、指数一に近いが、SDは大きい。偏異係数は右手の人の作業に大きく、SDもまた大きい。休憩効果率は、左、右とも同じで、誤謬率は右手の人の作業に大きい。国鉄職員弘済会職員に比べて比較して見ると、国鉄職員は左手の人が常態指数が一に近く、弘済会職員は右手の人が一に近い。SDはこの一に近い常態指数を示す方が、小さい。偏異係数は右手の人の作業が国鉄職員、弘済会職員ともに大きく、SDも大きい。休憩効果率は弘済会職員が国鉄職員よりも大きく国鉄職員は左手作業の人が右手作業の人より大きい。作業量は国鉄職員、弘済会職員ともに左手の人が多く、SDが小である。特に国鉄職員は左手の人が作業量が多い。誤謬率は国鉄職員、弘済会職員ともに左手の人が右手の人より少ない。作業量と誤謬率では左手の人が右手の人にすぐれている。

6 機械的適性と興味との関係

人事院 松浦健児

機械的職種に対する適性検査はいろいろな方法で分類されるが、紙筆検査をその機能によって分けてみると、(1)知識 (Information) (2)空間関係 (Spatial Relation) (3)機械的理解 (Mechanical Comprehension) (4)興味 (Interest) の四つに分類される。この分類のうち「興味」の傾向は、職場における能率・仕事からの満足など、「よい人事管理」の対策と関連して主要な意味をもってくる。

今回の研究では検査の妥当性を検討するため、機械関係の職種について職種別の差と能力別の類型について考察し、次のような結果を得た。

(一)金属鋳造会社の技術職員 (大学理工系卒) 二四名に對し、クイダー興味調査の人事院改訂版を使用した結果、機械・計算・科学の各分野に積極的な興味傾向を示し、説得・書記の分野に消極的な興味傾向を示した。全般的に各分野ともクイダーの化学者平均プロフィールと同様な結果になっている。再検査 (六ヵ月後) の結果では各分野の信頼性係数 〇・七〇〇・九八を得た。

(二)製造工場の精密機械加工・組立の男子工員四二名に對し、田研式職業興味検査を実施すると共に、職場の人的、物的環境に対する満足度 (Job Satisfaction) を質問紙によって調べた結果、職場に満足しているグループでは興味があるもの五五%、普通三三%、興味がないもの一三%であったが、満足していないグループでは興味があるもの二二%、普通二八%、興味がないもの五〇%で「満足」と「不満足」との間には明かな相違が現われた。

以上の外に、紡績工・機械工に対して実施した適性検査と勤務成績との関係を考察し、これら諸検査の結果は、人員採用・配置転換・人事相談などの有効な資料として役立つことを述べる。

7 職場内における人間関係の

一考察 (第一報告)

——そのグループ・ダイナミックス的研究——

人事院 ○金平文二
松浦健児

目的

最近グループ・ダイナミックスの研究の発展により、種々の社会集団や実験集団に対して実験的な研究あるいは追試が行われてきている。われわれが取上げた集団は協同作業的な知的水準の高い職務に従事する集団であるが、このようなグループに対して従来行われてきたような技術を導入することがかなり困難である。このような実際の職場におけるグループを研究するという場合、観察記録や面接、質問紙、その他の客観的な資料に基いた周辺の研究から、問題の核心へ迫るといふ、やや廻り道的な研究方法をとらざるを得ない、われわれはこのような職場における成人集団の人間関係の構造、機能、成員相互間の交渉過程を明らかにしようとする。

結果

(1)社会的地位と集団討議における発言回数とは関係があり、会議集団において社会的地位に応じた役割を果たしている。

(2)非公式組織における人間関係において、交渉の多いグループと独立したグループと二つに分かれる。特にリーダーというものはみられない。社会性得点、社会性評定と交友関係との間に余り関係はなかった。

(3) 性格検査と勤務評定間の項目間の相関は余りなかった。勤怠性得点と欠勤日数との間にはいくらか関係がみられた。他の班との間には著るしい差はみられない。

(4) 実務成績と勤怠性得点、欠勤日数、社会的地位との間に若干の関係がある。

(5) 職場内におけるcommunicationの量は、地位の高いもの、独身者に多いといえることができる。

8 職場モラルの因子分析

広島大学 兼子 宙

昨年中国電気通信局管内の電信電話局十二局の従業員約二千五百名について、職場モラル調査を行ったが、その約十五問の調査項目の間の相関を求め、これをサーソン法による因子分析を行った結果、第一因子として「仕事に対する興味」を中心とする因子J、第二として「職場の上司及び同僚関係」を中心とする因子H、第三として「職務の意義ないし誇りの自覚」ともいべき因子S、第四に「生活ないし賃金の充足度」についての因子W、を抽出し得た。

そこで、これら四因子に結果を集約して、各十二局のモラル水準を表示して、局首脳者に呈示したところその結果は甚だよくこれら各局の特徴を表現して居るといふ所見を得た。

そこで更に、各局の業務上の成績指標を求めて、これらの特徴が何を意味するかを追求しようと試みたが、実際にはまだ十分信頼し得る業務指標を得ることが出来ない。しかし、とりあえず、一昨年度の各局の業務表彰のために作成した、業績総合成績、欠過員率（定員に対する実員の比）、欠務率（休暇、欠勤等による欠務の率）など、このモラル水準との相関を調べて見た。結果はこれらの業務成績は、モラル水準ととくにJ、H等の

因子に於て高い逆相関を示す傾向があることが見出された。

この結果は、「モラルの高いところは業務成績が高い」という通俗的観念と全く逆であるが、こうした現実的職場の実際をよく知る者にはある意味で十分に理解し得る結果であるといえよう。然し、これは一般論であって職場によっては、モラルも業務成績も共に高いところもあり、低いところもあり得る。そうしたケースを今後掘り下げて研究せねばならない。また従来の業務成績の見方についても再検討を要する問題が指摘される。こうした点を今後の研究主題とする計画である。

9 統計機パンチャーの技能分析と作業性格

労働科学研究所 大須賀哲夫

I・B・M統計機パンチャーの技能のクライテリオンとして、カード三〇枚あてのWork Sample成績(A)と、経験九ヶ月目の実験成績から平均日産枚数(B)とミス・カード枚数(C)をとりあげた。A・B・Cの信頼度はそれぞれ〇・六九、〇・七五、〇・七三であり、かつ $r_{AB}=0.49$, $r_{AC}=0.14$ であった。

AとBは技能の比較量的側面と考えられるが、いまその速度比B/Aを仮に出力比と名づけ、その分布をみると略々三〇〜七〇%の正規型分布を示す。個人の出力比は、技能、適性、疲労、作業態度などと関連し、作業上の個人差をしめす一指標とも考えられる。

またBとCとは、熟練者の経験九ヶ月目には、 $r_{BC}=0.70$ であり、二四ヶ月目には、 $r_{BC}=0.70$ となる。この回帰線に就いて「拙速型」から「慎重型」の極へと、各人の作業類型を一連番号で命名してみると、九ヶ月目の類型番号と二四ヶ月目のそれとは、 $r_{BC}=0.70$ であり、作業類型が

はつきり表われない九ヶ月目の頃から個人の作業上の傾性は余り変化していないことがわかる。

この作業類型と出力比とは〇・八九のたかい相関関係にあり、最高出力にちかい水準で日常作業を継続するものには「拙速型」の者から然らざるものでは「慎重型」の者が多い傾向が知られた。したがって出力比や作業類型は作業のしかたの上での個人差として認めて良いかと思う。

このような個人差は、作業性格的な性質をもつものであるが、各種作業についてかかる作業性格の表われ方を明らかにし、それと個性との結びつきや、作業性格変更の可否、程度、方法を明らかにすることは、適性研究や技能養成の問題に寄与するものと思われる。

10 択一式テストにおける高得点者と低得点者の反応の比較

人事院 松井 資夫

(1) 五枝択一式テストを用いた場合、高得点者と低得点者とは、その思考過程の差異がどのように答案上に示されるかを、答案上に示された「解答のつけなおし」(例えば、はじめの枝を選択し、後でそれを消して3に選ばれる、といったもの)の状況から推測する。

(2) 六級職国家公務員採用試験(大学卒)受験者九〇六六中から得点による層別比例抽出法で一〇〇〇枚の答案を選びこれを上、中、下の三群に分ける。

(3) 問題は八〇題(一般知識と一般知能からなる)、解答時間三時間三〇分、最高得点七八点、最低得点九点、平均四四・一点、標準偏差一二・五。

(4) 上、中、下位群の「解答のつけなおし」数を、上位

群を一〇〇とした指数で示すと、上位群一〇〇、中位群一二九、下位群一四四となり、低得点者ほど「解答のつけなおし」が多い。このことは、低得点者程、正答以外の枝に迷わされたことを意味し、同時に、低得点者ほど問題解決への洞察が生まれるまでに手間がかかることを示している。

(5)次に「解答のつけなおし」の方向を、誤答→正答、誤答→誤答、正答→誤答の三角度から上、中、下三群について比較すると、上位群では、その約六〇パーセントが誤答→正答であるに対して、中、下位群では夫々四五・五パーセント、三六・三パーセントとなり、「解答のつけなおし」は上位群ほど有効に使われている。このことは、高得点者の思考過程は正しい洞察を得る方向に動くに対して、低得点者のそれは結局洞察には達しない無駄な試行錯誤が多いことを示している。

(6)以上の結果から、客観式テストにおいては、思考過程そのものは評価できないまでも、正しい思考過程の者と正しくない思考過程の者を区別することは可能と考えられる。

11 オーバー・オール・レイ

テイングにおける評定事

前の分析的態度について

立教大学 大塚 博 保

勤務評定をする時、諸評定要素を概括し、二・三の項目のみで評価をするオーバー・オール・レイテイングの時に分析的評価をして後にオーバー・オールな評価をする場合と、分析的評価を経ずに直接にオーバー・オールな評価をする場合とに如何なる差異を有するかを検討してみた。

評定項目は、(1)他人と応接する場合にその人に与える印象、(2)現在の業績、(3)本人の将来性、の三つに関するもので、女子七名を含む十八名が相互に評定を行った。オーバー・オールな評価の事前の分析的評価を行う為に「自ら進んで仕事のやり方を工夫した改良すること」に努めた」の如きもの四〇項目よりなるチェック・リストを用いた。しかし、このチェック・リストは評定者には、何ら採点の対象にならぬが、そのことは告げられていない。

この様にして行った結果、チェック・リスト使用の被評定者数一三七名、不使用の被評定者数一三五名で、平均の評定点は各評定項目を通じて、約七〇点と七四点で約四点の差があり、チェック・リストを使用した時の方が評定が辛くなっている。これを二つの平均値による検定にかけるとその値は各評定項目とも三以上で「チェック・リストを使用しても使用しなくとも評定は変わりなく行える」との仮設が起すのは〇・〇一より遙かに小さな確率を以てしかあり得ない。故に、この仮設は否定し得て、「チェック・リストを使用した時は辛く、使用しない時は甘く評定する」と言える。斯様に、オーバー・オールにならざるに事前にチェック・リストに目を通し、該当項目にチェックし分析的態度をとることは評価への心構えの作成でより正確に、より批判的に評価をなし、又、評定内容、要素を一層正確に把握しオーバー・オールな評価を行う前に大体の評価規程が目安として出来上るものと思われる。

12 職業集団における態度の

要因分析(第二報)

静岡大学 北脇 雅 男

目的 前回は、特定集団の態度値がいちぢるしく低か

ったから態度形成におよぼす要因として、集団のもつ意見に左右されることを想定した。これを検証するため、討論を課してその前後値の変化をみた。今回は、さらに資料をあつめ分析の方法を改めてこれを説明することに努めてみた。

被験者と実験法 被験者は四校の中学校第三学年、男一〇二、女八四、計一八六人。実験は昭和三〇年六月。実験手続は前回と同じである。

結果 (1)討論の前後における態度値の度数分布曲線は、男、女、男女計ともにあまり変化はみとめられない。

(2)平均値をみると、再検査の得点が必ず高くなり、点数であらわすと大体五点の差がみられる。そして平均値の差の検定をすれば男女計、女では $P < 0.01$ 、男では $P < 0.05$ となるから、討論の影響は女子に強くあらわれる。

(3)標準偏差は再検査に必ず小さくあらわれる。

(4)この被験者から男二〇、女二〇を抽出して、実験回数、進路、性別にわけて $2 \times 2 \times 2$ 要因計画表に収めて因子を分析すると、実験回数と進路に有意性がみられた。

(5)そこで別のグループの就職組一〇八、進学組二四一名の平均値を比較すると、危険率五%で進学組に高い数値があらわれる。

結論 討論の影響は、グループの態度を平均化する傾向がある。しかし、これが態度形式の決定的要因ではない。むしろ、就職希望の学生や就業中の成人にみられる現実的態度の相違が態度尺度の数値を左右するものと思う。

× × × × ×

× × × × ×

六、犯 罪

1 PGRの漸減特性による 嘘診断の研究

東京工業大学○宇留野 藤雄
新 東 宝 奈良 井仁一

この研究報告は、次回の報告の一部である。

目的 PGR現象の一特性である漸減現象を嘘診断に利用し得るかどうかの可能性を検討すると共に、この方法を用いて適中率を向上させるには如何にすべきかを研究しようとした。

方法 被験者は東京工大学生一〇〇名、CR回路を用いた。テストは、トランプカード五枚によるピーク・オブ・テンション法である。

実験は答え方による影響と器械に対する信頼度による影響とを条件とした。

結果 一般的な結果として、漸減特性を、或種の嘘診断に用いるならば、高度の適中率（一〇〇%に近い）をもたらすものであるとの見通しがついた。すなわち、この方法によれば、質問をくり返すにしたがって関係質問に対する反射は、最後まで、相当度の反射がみられるが、無関係質問、或はコントロール質問に対しては、五回目以降はほとんどゼロになってしまふ。したがって、前者の反射に着目すれば、誤りなく判定することが出来る。しかし、被験者によって必ずしもかかる一定の型を示さないが、われわれの実験では約六〇%のものがかかる型を示した。

つぎに、条件差による適中率の向上をみると、第一に、「ノー」と否定させた方が、もつとも安定した反射

が得られ、「イエス」では、反射に一定の傾向がみられず、また、無答の場合は、反射が全体的に小さく、速かに減少し、ゼロ反射を示す。

第二に、被験者の器械に対する信頼度を高めた方が、心的緊張がつよく、反射も大きく関係質問と無関係質問との差が明かに区別出来る。これに対し、低めた方は、反射が全体的に小さく、速かに減少し、ゼロ反射が多くまた、関係質問と無関係質問との差が明瞭でない。

2 非行女子少年に対する C・S・Tの一解釈

愛光女子学園 小 峯 友 一

(一) 検査対象は、東京管区内の女子少年院（上田清修寮、愛光女子学園、榛名女子学園）の収容者計二二八名とし、一般の中・高校生男女計八〇〇名（松岡氏の資料引用）で検査期日は昭和三〇年七月一三日に係員が出張検査した。

(二) 検査方法としては、C・S・T（色彩象徴法性格検査）の刺激語（恐怖、怒み、嫉妬、家庭等の）四一ヶを、検査人員二〇名（二五名づつに分け、主として性度、向性、異常点、P・R・C（反応頻度の多い色彩）について、学生群と非行少女群の差と傾向を調査しよう）と云う目的である。

(三) 検査結果

(1) 性度測定 先ず学生群と非行少女群との性度点の偏差段階別頻数分布状態を示すと、男性群(MV)七・〇四七、(σ)七・二五八、女性群(MV)六・二八五、(σ)七・〇四八、非行少女群(MV)五・七七九、(σ)五・九九八で、男女群より非行少女群は中央に著るしく集中している事から如何に中性的、男性的であるかが分り、之は施設での行動観察と合致している。

(2) 向性測定 之は他の向性検査によらず、C・S・Tで測定された向性点であり、性度とは稍々異り、非行少女群の方が分散度の高い、つまり一般の学生群より総じて稍々内向的に傾いている上に、内外の両向性に拡っている事を意味している。学生群(女子)(MV)四・八二九、(σ)六・七一二、非行少女群(MV)五・九七九、(σ)七・五七七

(3) 人格異常の診断(点の数の多い程異常傾向) ○点より一四点以上を七段階に分類し、両群の傾向をみると、七点以下に学生群、八点以上に非行少女群が多く約二・三倍になっており、一応精神的な健康因子は非行少女群に多い事が分かる。なお、再テストによる反応の恒常性は、性度と向性よりは、異常点の分布の方が安定しているが、異常反応数の多い者には動揺範囲(個人別振幅)がある。学生群(MV)二・五四二、(σ)三・六五一、非行少女群(MV)七・五三二、(σ)七・二三七

(4) 各十六種の色彩に対する異常点の差の有意性については、同じ系統の色彩を一群とし、それを八群に分け、それを学生、非行少女の両群に分けて χ^2 検定を行いその有意性を知る。

3 児童の日常生活における 感情体験について

大阪府立修徳学院 大 杉 隆 男

児童が日常生活において体験する不快・嫌悪感を惹き起すところの刺激と刺激場面を明らかにし、具体的不快・嫌悪感の個人における特殊なあらわれ方をたしかめようとする。

即ち、刺激に対する個人の不快・嫌悪感の相対的強

先づ予備実験として、普通小学校児童の四、五、六年の男女十名宛に質問紙法により、今までに「ウルサイ」「イヤダナ」「腹ガ立ツ」「イライラスル」「オモシロクナイ」等のように不愉快に思つた事柄を想い出す順序に書かし、一方、修徳学院児童に対しては、IQ九〇以上の男女児一七名を面接法に依り同様の感情経験を語つてもらつた。

この感情刺激表を被験者に配布し、このような刺激に對する個人の不快・嫌惡感の相對的強さ、特に男女の性差、年性差、ならびに収容兒と差異を見るために、刺激表の下に次の様に点数で整理出来る様に記載して報告を求めた。

疲れて学校から帰るとすぐに母が何か聞く。

- ⑤ 極端に不快⇨嫌悪⇨腹立つ。
- ④ かなり不快⇨嫌悪⇨腹立ち覚ゆ
- ③ ほんの少し不快⇨嫌悪なもの。
- ② 不快⇨嫌いではない。
- ① 今までそんな事はなかった。

東京家庭裁判所
山本晴雄

従来少年非行の原因は家庭関係特に親の態度にあると説かれたが、私は、第一六回大会で報告したように、普通少年群と比較すると親の態度よりも主として交友不良に依ることを見出した。しかし親の態度にも幾分欠陥が見られたので、本研究は更に此の点を探究したものである。

調査の方法としては、親の子供に対する態度を愛情、放任、溺愛、干渉、厳格、拒否、公平に分析し、子供の親に対する態度を親愛、信頼、適応、嫌悪、逃避、闘争に分析し、それらの各態度について一〇題づつの試問群を作成し、父母別に親子関係を調査した。態度の分析、試問の選定、試問群の構成は、男女中学生非行少年少女三八三名についての予備調査に依った。

このテストを男女中学生非行少年少女九五一名に実施し、無記名で記入させ、男女別、父母別、各態度別に中学生群に対する非行少年少女群の標準偏差値を求めた。なお非行少年少女に対しては「ぐれ始めた直前の父母の態度、自分の態度」を回想させて答えさせ、ぐれ始めた頃が中学生時代であつたものについて集計して比較した。

その結果によると、非行少年少女の父母の態度で特に目立つものは放任と不公平であり、これに次ぐものは娘に対する父母の愛情不足である。その他の態度は普通少年群との開きが大きくない。不公平が目立つことは興味あることであるが、非行少年少女は平素親から「学校の成績が兄弟より劣っている」「兄弟よりわがままで」などと低く評価されていることが多いことを反映しているかも知れない。この点は今後更に探究したい。

次に非行少年少女の親に対する態度で特に目立つものは適応と闘争であり、逃避、嫌悪がこれに次いでいる。その他の態度も担当に悪い。その原因としては親の態度も考えられるが、その外に第一七回大会で報告したように、非行少年少女の性格には自己中心性、自己統制薄弱が目立つので、これも一因をなすものであろう。この点についても今後の調査で探求したい。

——不満型非行者の予後分析——

横浜少年鑑別所 水島 恵一

一般にどのような少年が更生し易いかの研究に続き、どのようなしたら、どのようにして更生して行くかを研究する第一歩として、前回、感染型、不満型、発展型、習性型の四種に分けた非行型のうち、不満型非行者（フラストレーションの不応反応として非行が起っている）とみられるもので、不良感染、非行の発展、習性化の認められないもの（の予後を主として更生したケースを中心にして追った。

(一) 不満の場から退避させ、積極的に家庭愛を与えた場合——簡単に安定、更生した例があり、完全な失敗はない。安定したにもかゝらず、再び以前の不満の場にもどしたところ、忽ちにして再非行に陥つた例もある。

(二) 單に不滿の場から退避させた場合——この結果は余りよくない。特に人格に問題を持つてゐる者においては、新しい場に対しても同じような不滿反應を呈し、同じような非行に陥り易い。従つてこゝにおいて、人格の鍛練の問題が起る。

(三) 新らしい場に対して同様の不満反応を呈して再非行に陥りながら、その後同じ環境で、ケースワークを

受けて、次第に安定をとりもどし、その場に適應して、一年半乃至三年間無事故で続いている例が三例ある。この事は、できる限りの環境調整を施して後に、なおかつ不満反應の起る少年に対しては、それ以上徒らに環境を変えずに、臨機応変なケースワークの必要なこと、そして適応や人格の改善は、多くの場合極めて徐々に行われるもので、仮令再非行が現れたとしても、それは必ずしも悪化をいみするものでなく、治って行く過程において、以前の不安定さがたまたま現れる止むをえないものと解すべき場合の多いことを示している。

6 犯罪者、非行少年における覚醒剤嗜癖の研究

一、概括

犯罪生物学研究所 ○ 武田 慎二

酒井 敏夫

小泉 勝

空井 健三

目的 戦後覚醒剤の濫用が年毎に顯著になり、その被害も年と共に増加して来たが、昭和二八年頃から、覚醒剤濫用による犯罪が目立ち始め、法務省矯正局ではその対策を立てる為に、矯正施設に收容されている犯罪者及び非行少年について覚醒剤嗜癖に関する調査を行った。

対象 (1) 昭和二九年六月に刑が確定し刑務所に入所した受刑者二六四名。(2) 同年六月一日現在少年刑務所に収容されていた少年受刑者全員二一八六名。(3) 同年六月一日現在少年院に收容されていた非行少年全員一三三三名。(4) 同年六月中に少年鑑別所に入所した少年二九七八名。

方法 調査票を作成しこれを刑務所少年院の分類按官

又は分類関係職員に対象と面接の上記入してもらった。
整理方法 調査項目を七四のコラムにし、コーディングを行ってIBM方式による統計機械で集計した。

7 犯罪者、非行少年における覚醒剤嗜癖の研究

二、社会的背景

犯罪生物学会府中刑務所 奥沢 良雄

(一) 我々の調査資料からは、覚醒剤使用の動機として、次の三種類がみられた。(1)、文士、芸能関係者、学生等の利用で、一時的なもの。(2)、生活、仕事の必要から使用するもの。(3)、不良集団で、恐らくは文身、バクチなどの一般的非行と同趣のものと思われる嗜癖。少年の中には親分に強制され中毒に陥るものもある。

この中、後二者は次第に中毒となり脱落した嗜癖群となる。

(二) こうした使用動機に対しその温床ともいふべき次の様な社会的条件がある。(1)、原料の入手が比較的容易であり、少量の原末から大量の注射液が製造され、巨大な利益をあげやすいこと。(2)、古くから存在し、終戦後の社会的崩壊と貧困とに基く、てきや、ぐれん隊、バクチ打ち、集散娯などの不良集団や、スラム、ドヤ街などの脱落集団が存在し、更にこれらは中間層を経て一般大衆と接触し覚醒剤流行のルートとして存在していること。(3)、一部不良集団の親分がその財源のため覚醒剤の製造、販売、使用に加っていること。

(三) 使用者群を非使用のコントロール群と比較した結果からは、家庭の経済状態、住宅事情、保護関係などと覚醒剤利用との間には特別の関係を認めなかった。又、日雇、交通業、工鋳業関係にも使用者が多いという結果はみられなかった。使用はやはり遊興、接客関係や

非行集団に多く、その財源は正当な収入によるよりもポソ売、売春、犯罪等によっているものが多く、少年は成人よりも極端な嗜癖に走りやすく、これに対し家族の適切な処置は極めて少く又困難であるとみられた。

(四) 要するに覚醒剤使用は個人的悪癖としてでなく社会病理現象として把握するべきものであり、たとえ貧しくても健康な労働意識と健康な労働環境には覚醒剤使用の少いことが窺われた。

8 犯罪者、非行少年における覚醒剤嗜癖の研究

三、嗜癖と非行性との関係について

東京医科少年院 樋口 幸吉

覚醒剤の使用(経験)者、非使用者について罪質を比較すると、使用者に同剤取締違反が多いほかに、恐喝、暴行傷害等の暴力的犯罪が多く、窃盗、強盗、放火、殺人、猥褻等は比較的少い。

覚醒剤欲しさの犯罪は男子使用者の五七%で、窃盗に次いで家財持出等の家内非行が多く、女子では四三%で、売淫が窃盗の次に多い。中毒性精神障害による犯罪又は非行は、男子では使用者の一三%、女子では三%で、いずれも暴行傷害、窃盗が多い。

ずる休み、家出等の非行の初発年令と覚醒剤使用開始年令を比較すると、非行少年では覚醒剤の使用開始の大體一、二年程前から、受刑者では四、五年前から既に非行がはじまっている。更にその平均年令は、女子受刑者及び非行少年では非使用者の方が使用者より若干早目になっている。しかし喫煙、飲酒等嗜癖性非行及び性交経験、刺青、三回以上の転職経歴等について同様の比較を行ってみると、使用者の方にこれらの非行性が著しく濃厚である。概括的にいって、十才以前の早期非行は非

使用者に若干多く、素因性非行者の多いことを示唆するが、使用者においては十二、三才頃から非行の発現する者が多く、半年から二年位の間に覚醒剤に接近し、同剤使用の前後から急速に非行の進展している場合が多い。知能指数の平均値は男子では使用者八六・七、非使用者八六・一、女子では使用者七九・四、非使用者七五・七で使用者の方が幾分高く、その差は女子に著しい。精神薄弱は使用者に低率である。性格変調の著しい者については、使用者の方に意志薄弱、自己顕示、発揚、爆発、気分易変の傾向が比較的多い。一般的に言って、覚醒剤の嗜癖は犯罪者、非行少年においては、社会不適応の症状として、代償的欲求充足の形で起る場合が多い。

七、シンポジウム（日本におけるカウンセリングの諸問題）

1 教育部会（シンポジウム）

——学校教育におけるカウンセリングの問題——

司会 東京教育大学 中野 佐三

(1) カウンセラー養成の問題

一般問題 東京教育大学 井坂 行男

カウンセラーの資質の問題

東京大学 沢田 慶輔

(2) 現場におけるカウンセリングの問題

大学における 東京大学 重田 定正

高等学校における 大阪府立住吉高校 森 陽

中学校における

東京都足立区教育委員会 松川 武彦

(3) カウンセリングとテスト

国際キリスト教大学 岡部 弥太郎

ここでは必然的に、教育的カウンセリングの意義、特質、その領域などが討議の対象になるだろうと期待されたのであったが、実際には、これにはほとんど触れるところになかった。活発に論ぜられたのは、学校においては誰がカウンセリングを担当すべきであるかということであった。これは、恐らく、学校という現場では、その意義、特質、その領域といったことに問題性がないためである、というよりは、誰をそのことに当らせるかにより実際の現場的な問題が伏在しているためであろうと察せられる。カウンセリングの教育における重要性を認識すればするほどその担当者が問題になり、そしてカウンセラー養成の問題もカウンセリングにどんなテストをどのように用いるかの問題も、実際問題としては、そこから考えられる問題である。

今日、大学生の相談を求めてくるものは、案外に、多い。しかも、身体的健康に関してであるものもあるが、精神的健康に関してであるものがより多い。——重田氏は東京大学の例であることとわってこの間の事情を明かにされた。——それにもかかわらず、僅かの大学にしかその相談に応ずる施設はない。中・高校生についても同様で、これを放置しては教育はないというほどである。しかし、これに当たっているものは若干の有志である。ことに中・高校においては、多くの教師の中には教科の指導をしさえすれば事足りるとするものもあれば、ホーム・ルーム・ティーチャーでありながら父兄とのつながりにばかり気を配るものもいて、このため全職員の協力の得難いという事情がある。また、カウンセリングに関心をもち熱意を示すものはむしろ若い教師に多いが、こ

の若い教師に事を委ねるような組織が学校にないという事情もある。かかる事情が除かれている場合にも、一方に授業をしながら他方に相談に当らねばならないので負担過重という現行制度では除き得ない事情がある。かくて、学校がどんな組織をもって誰をカウンセリングに当らせるかに現場の困難な問題がはらまれるのである。そこでカウンセリングに当る教師は授業時間数を減少し得るよう、できれば専任のカウンセラーをおき得るよう、学校内組織にその位置が確保できるよう制度的裏付けをすることが望まれる。

カウンセラー養成の問題については、現場では、右のようにカウンセリングに当たっているものがほとんどホーム・ルーム・ティーチャーであるので——井坂氏は自身の調査結果によってこのことを明かにされた——まず着手すべきはそれらの教師を現職教育によってカウンセラーにまで仕立てることである。しかし、これで十分である筈はない。そこで大学の課程のうちに養成コースをもつようにしなければならない。しかし、この場合教科に関する教員免許状を主としカウンセリングに関するものを副とするか、それともその逆にするかが問題になる。そこで、また、かかる兼任的カウンセラーは将来は専任のカウンセラーに切変えられることを問題にしなければならぬ。この場合大学の養成コースはさらに充実したものにする必要がある。すなわち大学院修士課程がこれに当てられるよう考慮されなければならない。そして専任のカウンセラーを考えると、その資質としてはガイダンスやカウンセリングの原理、計画、技術に通ずることはもちろん、一定年数の教職の経験、面接の経験ということも必要であり——沢田氏はこれをアメリカの最近の文献を引用して論じ、その他一年内外の実業界での実務経験までがそれに加えられているという——なお、相手にネガティブに反応しないというパーソナリティは

カウンセラーのパーソナリティとしても重要であるので、この点からもその資質をいかなければ不十分である。で、かかる資質を考えてカウンセラーの訓練を思うと、もっとも有効な訓練法は有能な指導者の下で Fieldwork をさせることである。

カウンセリングとテストの問題はカウンセリングにテストを欠き得ぬということで、それはテストが個人に関する information を得るものであるからである。しかるにときにテスト不用論をきく。これはテストのこの意義をみないもので、これに対してはテストの活用とその重視を強調する必要がある。もちろん現に行われている標準テストの中にはサンプリングに難のあるものがあり、またサンプリングが全国的であつてもこのテストを大会の子どもに適用するには特別の注意を要するという問題もあり、さらに例えば GATB (general aptitude test battery) のような、また FLAT (foreign language aptitude test) のようなテストの出版されることを望むという問題もあるが、テストを軽視することはカウンセリングをしつかりした基礎におこうとするものではない。以上は、教育心理部会でのシンポジウムにおいて活潑に論ぜられ点の粗拙であるが、児童、生徒、学生のためのカウンセリングは、それがどうあるべきかの論争から、どう実践して彼らを幸福にするかに移っていることが知らされる。

(中野佐三記)

2 臨床部会 (パネル・ディスカッション)

司会 東京教育大学 鈴木 清

この部会での提案者は、発言順に、
精神医学の立場から 慶応義塾大学 塩入 円 祐
心理学の立場から 東京学芸大学 品川 不二郎

精神分析の立場から 九州大学 蔵内 宏和
テストの立場から 日本女子大学 児玉 省
の四氏で、その内容は「神経症のカウンセリング」を中心として、(1)意味と分類、(2)症候、(3)鑑別診断、(4)形成要因、(5)治療、などにわたっていた。提案者を、医学と心理学の異なった立場に求めたのは、今日わが国にはまだ、臨床心理学者養成の独自のコースが確立していないため、もっとも親近関係をもつ、この二つの立場からの見解や主張を検討し、協力の足場を作り上げることが重要だと考えられたからである。以下、提案された主な内容と、討議における問題点を概括しよう。

神経症は症状も原因も多様であるが、ほぼ従来精神医学で定義してきたように「精神的、情緒的原因によって起されるもので、機能的な、すなわち解剖的な変化の認められない病的状態」としておいてよいであろう。そしてその分類も、(1)神経衰弱、(2)不安神経症、(3)強迫神経症、(4)ヒステリ、とするのが一般的である。

症候としては、医学的には自律神経の不安定からくる情緒的不安がさまざまな精神的・身体的症状を作り出すと考えるし、心理学的には神経症の人格としての生産的エネルギーの浪費、人格的統合の欠如、したがって精神を集中することの困難、さらには外から動因で動かされ易いこと、統制過度、潔癖、情緒不安定に重きを置く。いいかえれば、医学では自律神経という身体的な基礎から説明し、心理学では行動の機制からより多く説明しようとする。神経症の人格を考えると、当然それが形成される過程、生育状態や環境の影響を重視することにもなる。

治療的カウンセリングは、医学においては主として物理的、化学的療法の補助として行われるが、特にこの方面を系統的に開拓してきたのは精神分析療法である。精神分析にも古典的なフロイディアンからネオ・フロイデ

ィアンに至るまですでにいろいろあるが、ここではけっきょく、本能と自我、自我と超自我の葛藤にその原理をおき、自由連想法により、治療者への感情転移もしくは反対感情転移の過程を重視する。心理療法からいえば、洞察にまで引き入れるいろいろのテクニックが考えられるが、治療ということに主眼をおけば撰択的に効果あるものを随時とり上げるといって eclectic な方法がとらるべきであろう。

テストとくにプロジェクト・テクニックにはいろいろの批判もある。その欠点としては、弁別性がそれほど明確とはいえない、面接などに比べて伸縮性がない、結果の解釈が困難であることなどがあげられ、反対に長所としては、客観性をもちうる、ある主観にこだわらず視野が広がる、今日のテストではかなり深層的なものも把握できることなどがあげられる。けっきょく、解釈の行きすぎを慎しみながら大いに診断に利用すべきであると考えられる。

以上のような提案に対し、部分的な修正意見や注意もしくは希望がかなり多く発言された。その主要なものをあげておく。

診断や治療において、もしも医学と心理学が別箇に手続を進めていくと、例えば心理学的診断では、身体的基礎の明らかなるものを見逃し、治療の失敗を招くこともありうる。こうした点からも医学と心理学との協力が望まれる。

診断テストの利用については、もっとも大きな問題は結果の解釈に客観性をもたせることである。いつまでも名人芸的、芸術的なものに頼らず、理論的にも臨床的にも、誰にでも行いうるし解釈しようという、テストの客観性を確保するよう今後の研究努力が必要であろう。

カウンセリングにおいて、説得、指示、非指示その他便宜に有効と思われるものを随時適用すること

つては、方法論的には疑問もである。いわばカウンセリ
ングはまだ出発したばかりの状態であり、今後それぞれ
の方法の効果と限界、適用の範囲などが究明される必要
がある。しかし、すべての方法に共通することは治療
者の態度が基本的な重要性をもつということである。

その他、希望意見もあり、討議し残されたものとして
は、診断、治療のテクニックとして集团的、社会的な
もの（例えばサイコロドラマ）の開拓、治療効果の評価に
関するもの、臨床心理学は多くの隣接科学の協力を必要と
するがそのための組織や体制、臨床心理技術者の養成や
資格認定、わが国における神経症の特性、などがあげら
れる。

（鈴木清記）

3 産業部会（グループ・デイス

カッション）

——産業カウンセリングの諸問題——

司会 労働科学研究所 桐原 葆 見

(1) 職業関係相談

a 職業指導に関して、増田幸一（神戸大学）氏は、個
人的相談と職業相談と教育相談とにわければ、その個人
的相談においては臨床的に人格の特質を把握しその治
療にまで及ぶものであるから、高度の専門的臨床心理学
的知見と経験とを必要とする故に、現在職業指導の全面
にこれを期待することは出来ない、勢い職業指導では職
業相談と教育相談とを担当すべきであるが、現在中学校
で教師によって行われているその相談を、某中学におい
て録音して検討したところ、時間的（分量的）に見て教
師の発言が甚だ多く、内容的には甚だ directive であ
った。これは面接を重ねて、生徒の発言を多くし自発的に
問題を持って来るようにする必要がある。が、職業指導
はその性質上全く non-directive ではない、そこに

directive なものが混入せざるを得ない、これは必要か
らであるとの発言があった。

次で藤本喜八（立教大学）氏、Columbia 大学の実情を
あげて、その面接記録を調べると、directive と non-
directive と截然区別出来ないものがある、言わば両者
を折衷した eclectic の方法である。これは単なる混合
折衷というよりも、両者の各長所を持ったものというべ
きである。また欧州の、特に英、仏のやり方は、就職と
直接につながる関係上、むしろ directive な点が多い。
アメリカの現勢は将来の成功と満足のためという
よりも、適応を主として行っている。

これに対して、わが国の現状は、あまりに directive
であるから、生徒にもっと考える機会を持たせるよう
non-directive な方法をもっと普及する必要がある、と
の見解に一致した。

b 職場配置に関して、狩野広之（労働科学研究所）

氏、配置の方針としては、職種別能力水準を手がかり
に、その不適または欠陥を各個人についてはこれを問題
として去就を判定するやり方が可能で且つ合理的なやり
方である。検査は採用時に行うよりも、採用後に行っ
て、それに基づいて相談を行うことが一層必要であり、効
果的である。

次で行田忠雄（大阪府職業相談所）氏は現在職業安定
所において行われているところの placement の面接相
談の実状を説明し、それが甚だ形式的に、粗略に、した
がって全く directive になっている事情を訴え、それに
必要な客観的資料としての職務の条件及び求職者の個人
の側の条件についての詳細な調査の上になつて、本来の
機能を発揮し得るよう陣容を整えることの必要を強調さ
れたが、これには失業並に生活の逼迫という今日の社
会的状況を外にして考えることが困難であろう。

(2) 経営関係 椎名新一（十條製紙会社）氏は、経営関

係において産業心理学上の相談の要求される事項とし
て、適性検査、人事考課、人事相談、人間関係、
Communication、事務の機械化、作業分析及び職分
位の説明等の各分野の問題について説明し、職場におけ
る Counselling は職業指導の follow up として必要
であり、これが実施方法としては業種別企業集団の
Consultant の方式が効果的であると考えられるが、な
お成功するためには、その結果が資本、管理および労働
の各側の利益となる証明がなければ不可能であると論
じ、これが諒解された。

次に牧田稔（輿論科学協会）氏は販売、市場、広告効
果についての企画、宣伝、調査、運営各部署の相談を受
けるが、日本の現状は、調査方法と結果の解釈について
の相談に終始している。各企業で秘密を要する事項であ
るために一般的な方法は定め難いが、その方法と解釈に
関して、心理学的な研究を必要とする論じた。

(3) 労働関係相談について吉村司郎（精工舎）氏、経営
においては入職者、在職者及び退職者についての面接相
談が行われるが、誰が面接相談をするかによってその手
法ならびに効果と影響とが甚だ異なる。ある場合には被相
談者あるはその監督者に、不安と疑惑と恐怖さえも持た
せる結果となる故に、その機構と人々を選ぶことが重要
である。

永丘智郎（関東学院大学）氏、労働者の意識の段階を
審にし、その深奥の要求をつかむこと、Counsellor がど
の立場に立って相談をするか、が最も重要な問題であ
る。労働組合の幹部は実際に Counselling を実行してい
る、そうしてそれを行動にまとめるのが彼等の役割であ
る。その上、世話役活動、苦情処理活動あり、また現場
監督者がTWIの結果から、専門相談者に代りつゝある
現在、そのどれが労働者に最も信頼されるかが問題であ
る。これについて各方面の実状が論議された。

次に武沢信一（立教大学）氏、産業 Councelling は凡そ次の四基礎仮定の上に行われて行われている、①産業界には現に不適応現象が存在する、②これに対して経営側で組織的な対策を講ずる必要がある、それは対労働運動と、地域的な必要から、③不適応現象は個体的条件の変化によって解消させ得る、および、④不適応現象の解消は non-directive な相談によって、その者に insight を持たせ、Catalysis をおこさせることによって達せられる。但しこの基本仮定は今日まだ完全な解答が得られていない。こゝに経営側としての意見が絞れる因がある。

これに対して、再び産業内相談の agent, organization に関する報告と論議が交されたが、各方面の要求から見ても経営、労働、中立それぞれの側の相談が、更に例えば寄宿舎相談等、事項別に行われるべきであるとの結論に達した。

（桐原葆見記）

4 犯罪部会（シンポジウム）

司会 法務省 遠藤辰雄

話題提供者として、現場でカウンセリングを担当している佐伯茂雄（警視庁）、井原法洞（東京都中央児童相談所）、山本晴夫（東京家庭裁判所）、宮田義雄（府中刑務所）、中河原通之（東京保護観察所）の五氏を煩わした。なお出席者のうち菊池省三（法務省）、樋口幸吉（東京医療少年院）渡辺康（横浜児童相談所）の諸氏にも発言をお願いした。

第一の話題は「犯罪」を直接カウンセリングの問題としてとりあげている実情についてであった。その結果「犯罪行動」の特殊性のため犯罪者自らが直接対象として現われて来ないので、次の範囲に止まっていることが明らかにされた。

先づ最初の関係者（教師、父兄、長上等）の手によ

てカウンセリングされる場合が考えられる。その件数は最も多い筈であるが、技術・効果などの実態は把握できない。

次に「犯罪」の問題は公安福祉の立場から扱っている公の施設が考えられる。

(1) 警察では少年に対してのみ補導という名のもとに、警察官が中心となってカウンセリングを行っている。しかし現状では早期発見と最も簡単な直接的・説教的方法による効果の範囲を出ることはむづかしい。

(2) 犯罪者・非行少年・不良児童などの収容施設（刑務所・少年院・教護院など）では、既に古くから(イ)収容生活に伴う各種の問題特に適応の問題を扱って来たが、(ロ)最近犯罪性の除去という教化活動のプログラムに織り込み、カウンセリングの組織化を図っている点が注目される。

(3) 前項の収容施設を出た大部分の人たち又は特定の処分を受けた人たちについて、戦後専門施設（保護観察所）が設けられた。ここでは保護観察官が行う更生に必要なカウンセリングを中心に業務が運営されている。

(4) 児童相談所・少年鑑別所は、広く児童・少年の福祉のために、あらゆる問題の相談に応ずる施設である。これは当局がカウンセリングの基礎として科学的鑑別の重要性を認めたものとして注目される。児童相談所では、児童福祉司・児童委員が密接な関係を保ち、業務を運営している。

(5) 家庭裁判所では、少年の保護事件全般を取扱う関係上、調査官のもとに持込まれる相談も漸増し、調査官の資格もカウンセラーとしての素養を重視するようになって来ている。

第二に前記の公の施設で共通の問題として次の点が明らかにされた。

(1) 犯罪行為そのものについては、法律手続上の問題以外に自ら解決を求めにくる例は殆んどない。しかも本人の周囲の者が手に負えなくなつてから施設に持込んでくる場合が多い。

(2) 施設で最も困っている問題は「就職」問題である。殊に犯罪者というレッテルとの関連は深刻である。

(3) 少年の場合には家庭関係の調整、成人の場合には差し当りの不満の単純な解決が求められていることも注意された。

第三にカウンセラーの資格が問題となった。これは教育部会とも関連をもつが、児童相談所・少年鑑別所を除いては、殆んど専門家がいない現状である。ところが資格が確立していないことは「素人」がやってこじらせるという危険を多くしている。従つて一方では専門家の養成を図るとともに、他方では現にカウンセリングを行っている人たちの訓練を行い、資格を与える必要が強調された。

第四に技術の体系化という大きな問題が提出された。同時にその基礎として次のような悩みが明らかにされた。

(1) 最初から科学的なカウンセリングをやつてほしいこと。素人判断は危険であり、資料も作っていないのは困る。

(2) 家庭や地域社会も積極的に協力してほしいこと。本人だけでは不十分な場合も少なくない。

(3) カウンセラーの権力についてはなお検討を要すること。犯罪のような自ら相談を求めて来ない性質の問題についてはある程度権力（強制力）を必要とするという意見と、全く権力を離れた立場（例えば刑務所・少年院などで採用している篤志面接委員のような純粋の民間人）をめぐる、カウンセリングと規律・懲罰などの管理上の権力との関係についていろいろの問題が提出されたが、結論を得るには至らなかった。

(4) またカウンセリングは、現状に適應させるのがねらいか、あるいは理想的な社会を考えたところで向上させるのがねらいかを決めなくては実施できないという意見も提出されたが、この問題も解決には至らなかった。

(5) 犯罪行為のような習慣化しやすい行動を対象とする場合には、資料が常に交換できるようなシステムが考えられなければならないこと。科学的な意味で正確な記録を常に作るよう、またその利用はカウンセラーとしてのモラルによって行うようにすべきであるという意見があった。

(遠藤辰雄記)

5 身体障害者部会 (シンポジウム)

——身体障害者のカウンセリング——

司会 日本大学 渡辺 徹

身体障害者といえ、身体障害者福祉法(昭二四・一)の視覚障害者、聴覚障害者、言語機能障害者、肢体不自由者を想起する。ここではその三つに手近な結核予防法(昭二六・三)関係から結核治療者を、精神衛生法(昭二五・五)関係から精神病寛解者を、精神衛生法(昭二五・五)関係からカウンセリングで人類福祉増進に資する方法いかんやこれに心理学はどんな寄与をするかを明らかにするためにこの特別共同研究が計画された。(一)視覚障害者は国立東京光明寮教務主任松井新二郎氏、(二)聴覚障害者は元国立聾学校長川本宇之介氏、(三)肢体不自由者は国立身体障害者更生指導所長高瀬安貞氏、(四)結核治療者は厚生省国立療養所課技官関誠一郎氏、(五)精神病寛解者は桜丘保健養院副院長野口晋二氏がそれぞれを対象とするカウンセリングにつき、かねての造詣を披露された。

以下は並立討議における各代表発表の要点紹介。

(一) 視覚障害者。先天盲乃至幼時失明は盲学校に譲り、光明寮の対象、中途失明の更生指導をもつばらカウ

ンセリングの問題とした。個人の適応相談と職業相談とがそのおもなもの。生命持続の動機を起させることと自己の現実能力の正確な認識を持たせることを悲歎に沈む中途失明者に助言をもつて誘導し、その上で漸次、(一)職業選択、(二)職業訓練、(三)職場発見、(四)職業適応に進む。日本の失明者の職業は鍼灸、按摩とされ、どんな適性の人でもこの職に就かなければ、経済的に自立困難の現状。この適性無視の因習的職業から脱皮するために積極的打開策として、失明被助言者の心理特性を十分理解しているカウンセラーが必要。助言者と被助言者とのラポール関係がよく成立するためにも失明心理学者のカウンセラが生れてもよいかと思う。

(二) 聴覚障害者。(一)失聴者カウンセリングは失聴年齢や原因、学校教育と関連して種々、様相を異にする。(二)失聴程度はオーディオメータによって測定、「デシベル・ロス」の六段階・全聾とする。各段階相応の指導方法がある。(三)青年期以後の重難聴以上の者には補聴器使用の外、読話の修練。(四)聾学校上級や卒業期生徒に職業、進学指導は重要。現在では不十分。(五)小・中・大学の難聴者は難聴ゆえに劣等感情を起し不適応に陥り、はては非行者となりがち、精神衛生を主体とするカウンセリングが重要。米国の聴覚クリニック、読話修練施設の設置がのぞましい。

(三) 肢体不自由者。更生指導の最終目標は職業問題の解決。この前提、整形外科手術、作業療法など一連の機能回復処置、職業訓練、就職斡旋などが必要。更に根本的な問題は肢体不自由者が自身に内在せる一切の能力と意欲とを回復し、一切の可能性を発現させ、社会生活によく適応して役立つ人格に成長することである。この成長の援助にはカウンセリングの技術が重要。あまり依頼心を持たせない用意をもつて臨床心理学者がこの困難な仕事に成功して行く六時期——①欠損過大視、②潜在能力

再認、③動機づけ、④職業相談、⑤適応相談、⑥就職相談を挙げている。身体障害者福祉法はこれに百数十名を要求しているのに現状は十指を屈するに足らない。将来この分野の臨床心理学者を養成すると共に、制度上地位向上の努力を要する。

(四) 結核治療者。肺結核に重点を置いた。治療者職業復帰カウンセリング効果はなお一〇〇%の落伍者。これはその仕事の困難と共に、体系が米国のように完成していない証拠。過去病歴恐怖心による作業能力低下、伴う有形無形の社会的損害、長期治療原因の性格異常、強い環境依拠心、これらの是正が主題。次は対治療者カウンセリングのあるべき姿、①性格の淘汰、②社会性に自覚を与える、③作業能の鑑別、④作業能と生活維持経済力と相関を求め選別、⑤再発への責任を的確にする。

(五) 精神病寛解者。精神病院のカウンセリングは現在主治医が当っている。第一段階医学療法、積極的症狀を消失。これに精神療法を加味し、生活態度改善、対人関係調整など最小限度社会適応できるよう人格改造へ力。生活規則、作業療法、リクリエーション、スポーツなど使用。作業療法はいきおい、指示的。患者は病状改善と共に、希望や不安を生じ、家庭や職業につき主治医に相談、近代的カウンセリングの第二段階が展開。退院予定患者には家族や職場の相談もあって、対人関係の心理学的研究が必要になる。桜丘保健養院退院の実状、平均在院一年八箇月、全治三〇%、軽快四〇%。前者は問題なく家庭や職場復帰。後者は慎重なカウンセリングを要する。

以上が発表要旨。更に代表討議で、身体障害者のカウンセリングは結局、職業指導に落ち着くけれども、まず破綻せる全人格の社会適応性の回復を問題とし、ついで適職を得て、「生甲斐」を感じるよう誘導する必要があることにはみな意見が一致。これの成功には収

容施設の精神衛生、各種専門家の総合協力が重要と討議。なお一般聴衆からも他の特別共同研究団からも前記各カウンセラーの養成、臨床心理学者の資格認定、助育被助育者間の倫理などの研究が焦眉の問題として提出された。

(渡辺徹記)

6 日本におけるカウンセリングの諸問題 (シンポジウム)

司会	東京大学 中村弘道
犯罪心理部会	法務省 遠藤辰雄
産業心理部会	労働科学研究所 桐原葆見
臨床心理部会	東京教育大学 鈴木清
教育心理部会	東京教育大学 中野佐三
身体障害者部会	日本大学 渡辺徹

(抄録は省略)

八、シンポジウム (アメリカにおける科学的カウンセリングの現状—パネル・ディスカッション) The present status of the scientific counseling in U.S.A. (Panel Discussion)

発言者 * ロイド氏 (W. P. Lloyd) (ブリガム・ヤング大学 (Brigham Young U.) 学生部長) * ロビンソン氏 (F. P. Robinson) (オハイオ州立大学 (Ohio State U.) 教授) * ボーディン氏 (E. S. Bordin) (ミシガン大学 (U. of Michigan) 教授) *司会。

初期ならびに発展の時期

B 一九二〇年代後半、ミネソタ大学一派のテストの研究が科学的カウンセリングを始める上に基礎的な影響を与えた。L 初期には教授が学生と直接に話し合いをして助言が与えられるだけであった。R その役には学生部長というものが主としてその任に当たった。B 後に、オハイオ州立大学のトゥーブス教授 (Toops) が進学適性検査 (Ohio State University Psychological Tests) を作るに及んで、科学的方法が発達した。L 心理学者がアドミニストレーターと協力してこれを行ったことも力となった。R 一方テストの研究に Psychological Corporation と Educational Testing Service のような商業的出版者が資金を投じたことも重要だ。APA (American Psychological Association) もテストの発展に寄与した。

理論と応用の両方面の共同

B 第二次大戦後、理論心理学者・実験心理学者が応用心理学に興味を抱き始めた。このために両者のギャップが狭められてきた。APA という統一組織は、この両者の結びつきを強めている。最近 APA の会員は十一万二千に達するという。R そのうちカウンセリング・サイコロジのグループは二番目という大世帯である。しかし APA の中の協力ぶりは、一人の学者を理論と応用とのどちらかに分類できない程である。両分野を分離しては考えられない。L それでもこれだけになるまでには長い年月を要した。

現在のカウンセリングの理論

R 現在、カウンセリングの理論が人によってまちまちであることは興味深い。だが、他人の意見が間違っているという自分の方が正しいという態度はとらず、どのカウンセリングの仕方でもよい結果は得られる、だがどうすれば更によい結果が得られるかを互に研究しようという

態度がとられている。精神分析の人がロジャース (Rogers) の研究をほめたたえているのはその一例である。L しかしカウンセリングおよび SPS のその他の分野がまだ発展の途上にあることは認めねばならない。

今後の発展の方向

B 「パーソナリティの発達」という研究が、今後に強い影響を与えるべき一つの方角であると思う。L 細かい点にまで経験をつんだ心理学者の研究が、人間の発達ということを明らかにするのだ。R 数年前、ノン・ダイレクティブな方法とその他の方法との間の議論が行われたが、最近はおつと他のアプローチが加えられてきた。たとえばボーディン博士の著書 (Psychological Counseling) には精神分析の方法が強調されているし、ペピンスキーの本ではコンディショニングに基づく理論が述べられている。自分は、面接事態での社会心理学的分析とか、カウンセラーの特徴の分析などが今後行われなくてはならないと考えている。B その他に、職業選択におよぼすパーソナリティ因子の影響についての研究とか、スーパー教授 (Super) (コロンビア大学) の児童期 (十三才頃) から成人期になるまでに職業の選択がどのように変るかという研究、などがやはり有効な方向と考えている。L 科学的カウンセリングの本質とは何か? という質問には容易に答えられない。

各大学におけるカウンセラーの数

B ミシガン大学では毎年よく訓練され、経験も豊富な PhD を送りだしているが、それでも要求を満たすには至っていない。例えば、傷病兵の病院のカウンセラーとか、矯正施設、工場などポストのあいているところが多いが、全部満たすわけにいかない。L ブリガム・ヤング大学では尚四人ほしい。R 政府は大学院の課程に数千ドルの金を投じて、カウンセラーの養成をはかっている。オハイオ州立大学では APA に所属する五人とその

他二〇〇三〇人のカウンセラーが働いている。B ミシガン大学ではもう少し小人数だ。R アメリカでは大学が分散しているがこれが人数の足りない原因の一つだ。L 結局のところカウンセラーの絶対数が足りないという感じがしよう。

カウンセラーの訓練計画について

B 現在の問題点の一つは、訓練の基準を明らかにすることである。この訓練計画について、APAでは特別委員会を作った。カウンセリング・サイコロジの部門が働いて訓練基準ができた。R 最近発刊された Journal of Consulting Psychology はそれらの研究を集成発表する大きな役割を果たすであろう。

カウンセラーと学生部長との協力

R 心理学者が小部屋で行うのがこれまでのやり方だが、その他に、集団式の方法もある。また学校環境を整えるために、学生部長が協力している。例えば、学生部長は予算のことや、運営の面で協力する。B カウンセラーと学生部長が、大学の計画をたてる際に共同で知恵をかしあう。R 心理学者は学生のアドバイザー・カウンセラーという面に働く。B 心理学者は学生の問題を常に敏捷に洞察すると共に、教授団とも深い関係をもっている。学校行政の担当者として心理学者(カウンセラー)の協力の重要性を強調して、一応この討論を打切る。

以下、討論の要約が行われ、フロアーの質問、意見に対する応答が行われたがその詳細は省略する。

(中村弘道記)

第十八回大会研究発表抄録補遺

変化の様相から見た性格診断

——性格記号法の反復実施——

阿部 孫四郎

性格記号法年長用の性格診断を小学校六年生三八名(うち女二一名)に正確に五週間の間隔をおいて三回実施し、それぞれの性格記号がどの様に変化し、性格特質がいかに様に変移するかをしらべた。この年長用記号法は小学校三年以上成人までに施行出来る検査法で、クレペリン数字加算法を二休憩三〇秒型に改訂し、性格特質を分析的記号に表現する道をひらいたものであって、小学校二年以下に施行する幼年用(○△×の補填作業を二休憩三〇秒型に行わせる)と同じ理論と方法で結ばれている。分析第一項目は知能の正常異常、第二・三・五項目は意志(第二・三は個性領域の摩擦性、第五は持久性)の正常異常、第四項目は感情の正常異常を現わし、たとえば性格記号が A023p15 ならば作業能力は大学生総合曲線を上廻るが、意志項目に二つの正常性と一つの異常性があり且知能の異常性を伴っていて、総合される性格判定は知能的欠陥となるし、又記号が E05p234 ならば作業能力は小学校五・六年と三・四年のそれぞれの総合曲線の間だが、意志項目に一つの正常性と二つの異常性があり、且感情異常性をもっているから、総合判定は意志的並に感情的欠陥である。これらの各項目と性格特質との対応関係は臨床的に定めたのであるけれども勿論一義的ではない。かような方法で五週間毎に三回くりかえし診断したところ、次の結果を得た。(一) 意志項目つまり第二・三・五項目は固定し易く、殊に第五項目は変化し難い。(二) 感情項目つまり第四項目は変化し易い。

(三) 知能項目つまり第一項目は固定し難いのと固定し貫くのとが見られるが、これは作業能力の高低をしめす記号(A・B・C・D・E・F)学令的発達曲線の区割とは一応無関係であって、作業能力記号は大体一定に保たれる。たとえば D05p23 意欠 D015p23 準意欠 C012345 優秀 D0245 健全 C02345 健全、と変化。(性格記号法は阿部、性格の科学、一九五二参照)

(この抄録は、第十八回応用心理学論文集「人格」の部門に所載されるべきものであったが、第十八回大会事務局の手違いで所載されなかった。ここに補遺する次第である。)

交通事故防止のための心理学的研究ならびに施設の強化についての意見書

昭和三十年九月一日

日本応用心理学会会長 中村弘道

洞爺丸事件から最近の紫雲丸事件に至るまでの約一年ほどの間に起きた交通関係の事故は、その頻度においても重大性においても、かつて類例をみなかったほどのはげしさを示しています。そして社会一般がこれによって交通に対する大きな不安をおとしいれたことはあきらかでありまゝ。しかし、幸にこれらの事件を契機として、このたび内閣に交通事故対策本部が設置され、総合的施策が強力に推進されることになったことは、従来、ややともすれば責任者の追求、関係者の引責辞職、あるいは交通従業員に対する精神主義的鞭撻というような措置をとるに過ぎなかった交通事故対策に対して、一新紀元を画するものとして、誠によろこばしいことと考えます。しかし元来交通事故はその原因を分析してみますと、多くの研究が実証しているように、人的原因によるものが約九〇%にもほり、純粋に機械、道路（水路）天候などによるものは一〇%内外にとどまっています。交通事故の問題には、極めて多くの心理学的研究課題が含まれています。したがって、交通事故防止対策には、その根本に、事故の人的方面に関する科学的研究が強力に促進されなければならないものがあると考えられます。行政的対策や物的方面の対策のような一見、心理学的研究とは無関係に見えるものさへも、人間のもつ短所や欠点に関する科学的な心理学的認識の上に立って行われなければならないものが少くないのであります。

そもそも交通安全に関して心理学的に考究、施策すべき分野は誠に多いのでありますが、わが国の現状に照して、もっとも緊急かつ重要な事項は次の諸点であると考

えられるのであります。

- (一) 事故報告の心理学的見地からする統計的研究（たとえば心理学的見地から分析した不安全行動の型の分類など）
- (二) 事故を起し易い運転従業員の心理的特徴の研究（たとえば交通事故を頻発する人の知覚、感情、反応、思考、性格の分析など）
- (三) 交通法規違反者の心理学的研究（たとえば違反者の性格、生育歴、教育度の研究など）
- (四) 運転従業員の選抜法の研究（たとえば運転従業員の心理学的適性検査の標準作成に関する研究など）
- (五) 運転従業員の労務管理および監督者に関する心理学的研究（たとえば一般の産業的職務における労務管理方式との異同点、安全教育および監督者の在りかたなどに対する心理学的研究など）
- (六) 交通法規規定に関する心理学的研究（たとえば運転従業員の人的資格要件に関する検討、試験制度、適切な処罰法などに関する心理学的分析など）
- (七) 交通に関するPR（公衆関係）活動に関する心理学的研究（たとえば運転従業員および一般通行者に対する安全遵守を目的とする働きかけ方の心理学的研究など）
- (八) 交通労働における精神疲労の研究（たとえば従業時間と疲労との関係、休憩日目の挿入法、交替制度の研究など）
- (九) 交通に関する心理工学的研究（たとえば識別し易い標識、錯覚誤読の少い計器の原理、人間の自然動作形式と機械設備の形式との関係の研究など）
- (十) 学校生徒に対する交通安全觀念の養成に関する教育心理学的研究（たとえば安全問題の單元への取り入れ方、校外安全活動の方法の研究など）

以上の諸点については、ドイツやアメリカにあっては、すでに二、三〇年ほど前から深い関心が寄せられ、鉄道省あるいは警視庁などの研究所、あるいはまた国立科学研究所の交通安全委員会などにおいて、心理学者の手によって着実な研究が續行され今日に至って、その蓄積された研究の成果は交通事故の著しい減少、それによる経費の著しい節約となつてあらわれています。今回、日本応用心理学会第一九回大会が東京大学で開催せられた機会に、心理学関係からわが国の交通事故防止に寄与する方策が議論され、下記のごとき結論に達しましたので、交通事故防止対策が強力に推進されようとして、現在、施策の一つとして、われわれの提案が採り上げられ実施されることを強く要望いたします。

交通事故防止に関する心理学的対策

- (一) 政府機関に交通事故防止に関する心理学的研究機関を設置または強化すること（たとえば運輸省、警視庁などに新設し、労働省産業安全研究所を強化する）
- (二) 交通関係企業体内に心理学的研究機関を設置または強化すること（たとえば東京都、大阪市などの大都市にある地方庁内に該機関を設置し、国鉄本庁厚生局労働科学研究室を強化する）
- (三) 大学その他の研究機関に事故防止対策研究のための研究費を交付し、研究委託をすること
- (四) 政府および交通関係公共企業体の出先機関に安全管理のための心理学者を配置すること（たとえば各地方労働基準局、国鉄各管理局などに配置する）
- (五) 交通に関する監査および必要な対策の勧告をなす権限を有する交通安全委員会を中央および地方に常置し、委員は行政官、交通安全事業経験者、工学関係技術者、心理技術者、医師をもつて構成すること
- (六) 学校教育および社会教育に交通安全問題を強力にとりいれること（たとえば教育課程に安全問題を一層強力にとりいれること、特別教育活動に交通安全に関する実習をとることを、社会教育の面において交通安全の教育の徹底をはかること）

以上

2000

応用心理学論文集

—第19回大会発表抄録—

編集兼発行者 日本応用心理学会
会長 中村弘道

東京都目黒区駒場町865
東京大学教養学部心理学教室内

